GB521
484
86W68718

事故本

書き込み多数

1998.8.19

イ3L-19

帝国図書館蔵書

至

石田秀人兄

(本書は発売禁止本也)

水野廣徳著

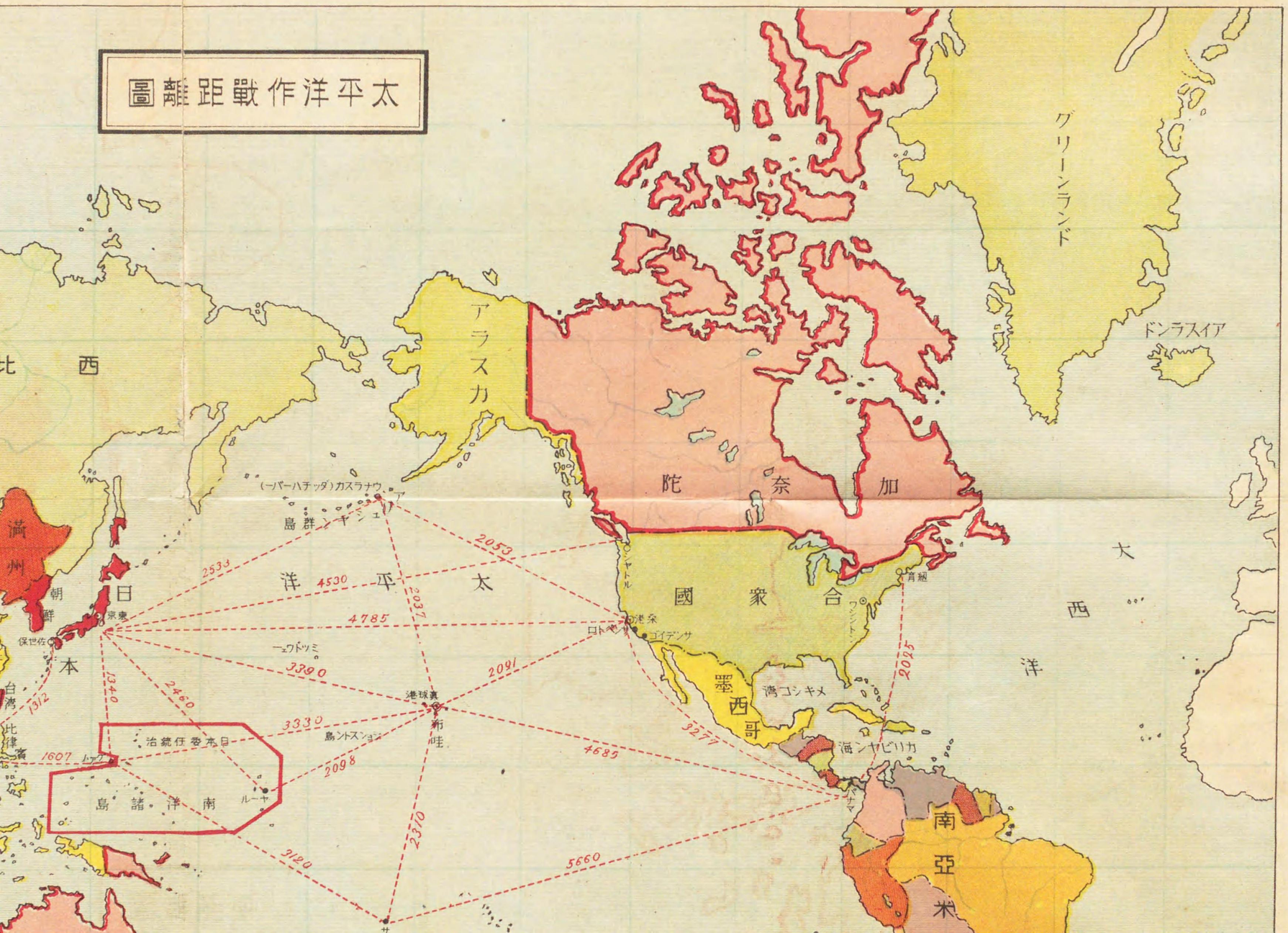
# 打開か破滅か 興亡の此一戰

東海書院刊

GB521
484

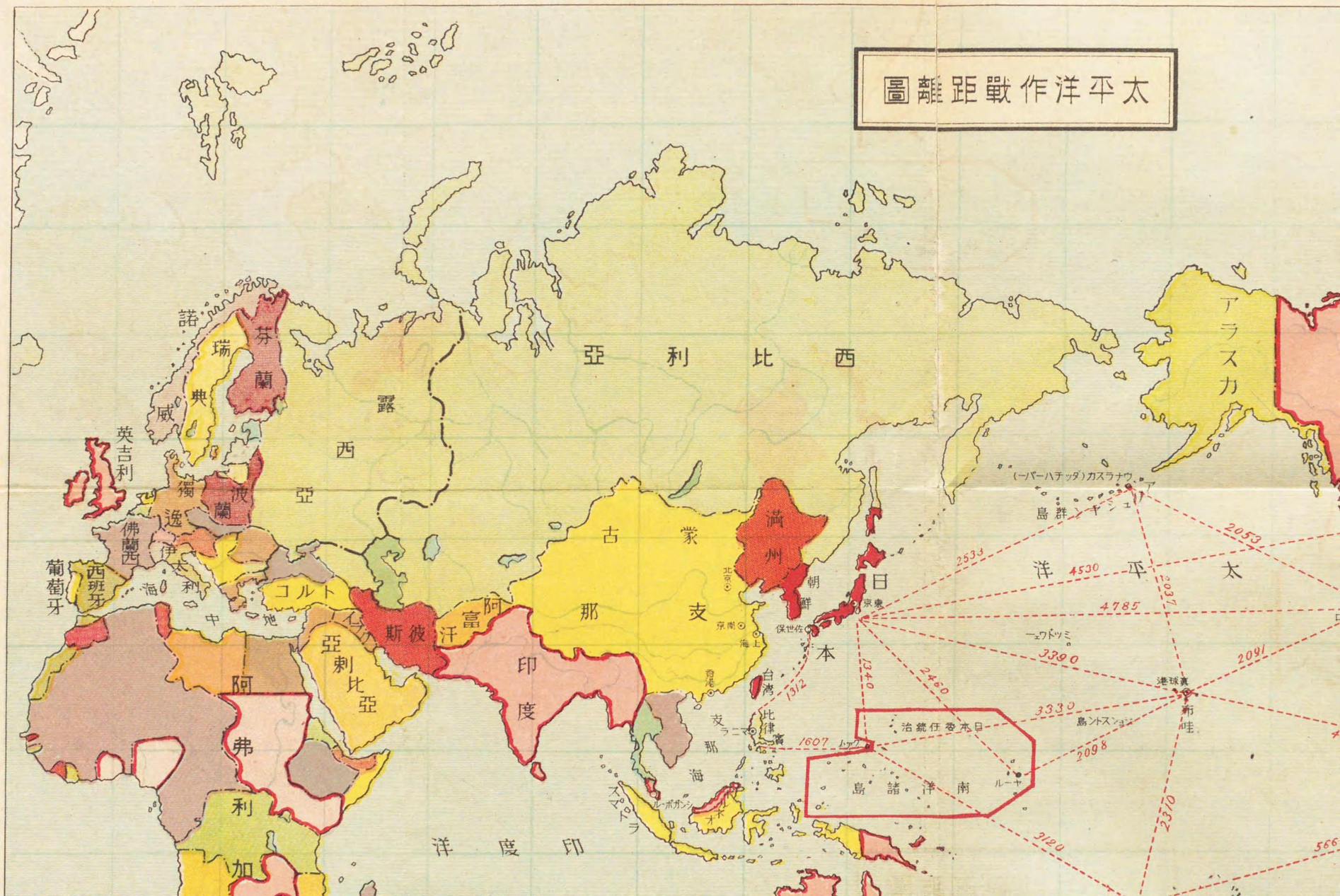
86W68718

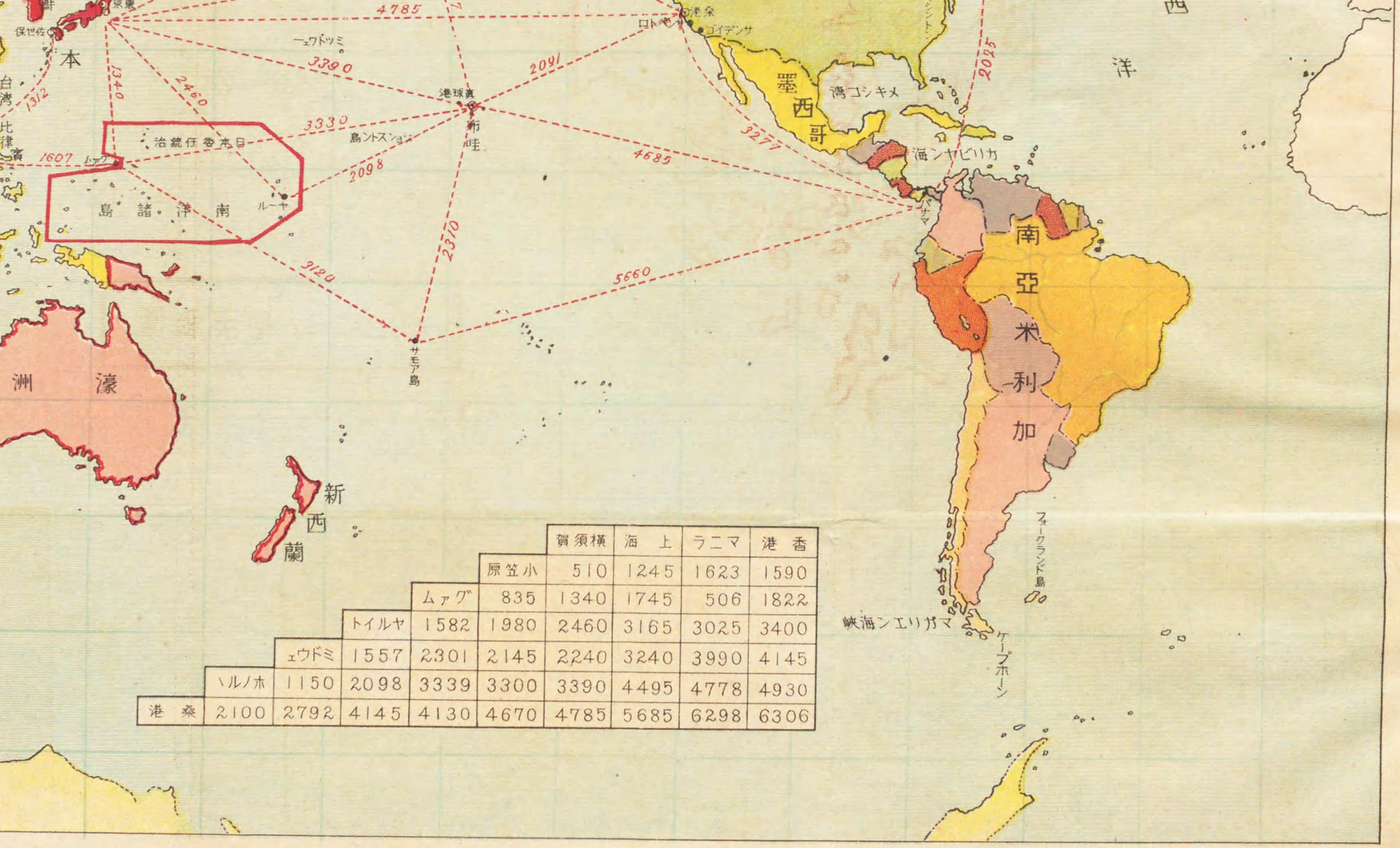
# 太平洋作戰距離圖




GB521
484

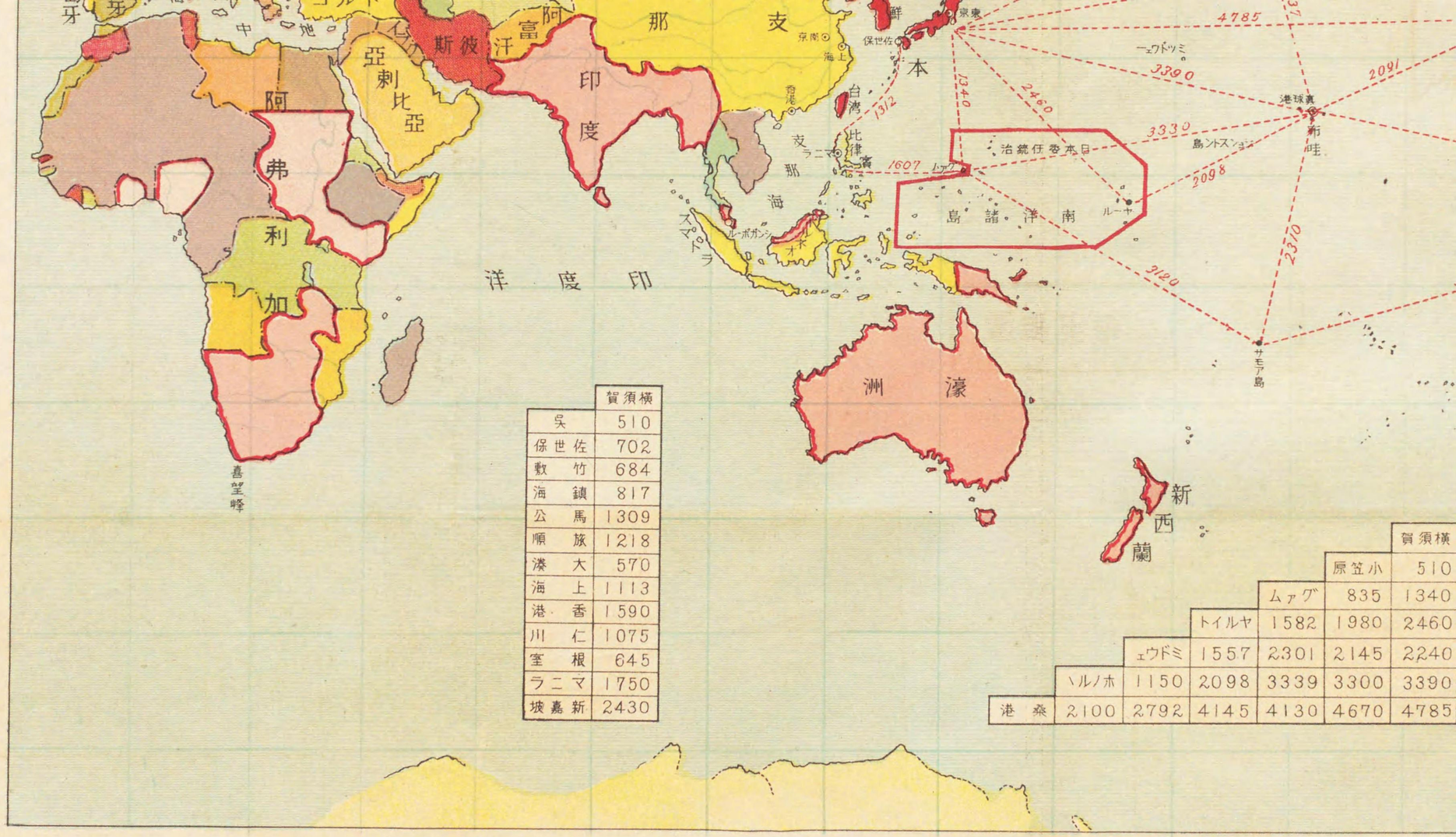
# 太平洋作戰距離圖


西比利亞
露西亞
諾威
瑞典
芬蘭
英吉利
獨逸
波蘭
佛蘭西
伊太利
西班牙
葡萄牙
中海地
コルト
阿富汗
斯彼
亞剌比亞
阿弗利加
印度
印度洋
古蒙
滿州
朝鮮
支那
北京
京南
海上
保世佐
日本
京東
台灣
香港
比律賓
支那海
ルーポガンシ
スマトラ
ボルネオ
アラスカ
(ーバーハチッダ)カスラナウ
島群シャンシュ
ーェワドツミ
港球真
新哇
島ントスンショ
治統任委本日
島諸洋南
ルーヤ
ムック
太平洋
2533
2053
4530
2037
4785
3390
2091
1340
2460
1312
3330
1607
2098
2370
3120
566




| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 賀須横 | 海上 | ラニマ | 港香 |
| | | | | | 原笠小 | 510 | 1245 | 1623 | 1590 |
| | | | | ムァグ | 835 | 1340 | 1745 | 506 | 1822 |
| | | | トイルヤ | 1582 | 1980 | 2460 | 3165 | 3025 | 3400 |
| | | ェウドミ | 1557 | 2301 | 2145 | 2240 | 3240 | 3990 | 4145 |
| | ハルノホ | 1150 | 2098 | 3339 | 3300 | 3390 | 4495 | 4778 | 4930 |
| 港桑 | 2100 | 2792 | 4145 | 4130 | 4670 | 4785 | 5685 | 6298 | 6306 |

國立國會圖書館
62. 3.10
86W68718




| | 賀須横 |
|---|---|
| 吳 | 510 |
| 保世佐 | 702 |
| 敷竹 | 684 |
| 海鎮 | 817 |
| 公馬 | 1309 |
| 順旅 | 1218 |
| 濟大 | 570 |
| 海上 | 1113 |
| 港香 | 1590 |
| 川仁 | 1075 |
| 室根 | 645 |
| ラニマ | 1750 |
| 坡嘉新 | 2430 |

| | | | | | | 賀須横 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 原笠小 | 510 |
| | | | | ムァグ | 835 | 1340 |
| | | | トイルヤ | 1582 | 1980 | 2460 |
| | | ェウドミ | 1557 | 2301 | 2145 | 2240 |
| | ハルノホ | 1150 | 2098 | 3339 | 3300 | 3390 |
| 港桑 | 2100 | 2792 | 4145 | 4130 | 4670 | 4785 |

# 序に代へて

師を興すの國は恩を隆んにすることを先きにす。攻め取るの國は民を養ふことを先きにす。寡を以て衆に勝つ者は恩なり、弱を以て強に勝つ者は民なり。（三畧）

大智は智ならず、大謀は謀ならず、大勇は勇ならず、大利は利ならず。天下を利する者は天下之を啓き、天下を害する者は天下之を閉づ。天下は一人の天下にあらず、天下の天下なり。（六韜）

國を和せずんば以て軍を出すべからず、軍を和せずんば以て陣を出すべからず、陣を和せずんば以て戰を進むべからず、戰を和せず

んば以て勝を決すべからず。（吳子）

百戰百勝は善之善なる者に非らず、戰はずして人之兵を屈するこそ善之善なる者なり。故に上兵は謀を伐ち、其の次は交を伐ち、其の次は兵を伐ち、其の下は城を攻む。（孫子）

天下の戰國五たび勝つ者は禍なり、四たび勝つ者は弊なり、三たび勝つ者は霸たり、二たび勝つ者は王たり、一たび勝つ者は帝たり。是を以て數々勝つて天下を得る者は稀に、以て亡ぶ者は多し。（吳子）

柔能く剛を制し、弱能く强を制す。柔は德なり、剛は賊なり。弱は人の助くる所なり。强は人の攻むる所なり。能く柔、能く剛なれば其の國彌光やぐ。能く弱、能く强なれば其の國彌彰はる、純ら柔、





純ら弱なれば其の國必ず削らる。純ら剛、純ら强なれば其の國必ず亡ぶ。（三畧）

秋毫を擧ぐるは多力と爲さず、日月を見るは明目と爲さず、雷霆を聞くは聰耳と爲さず。古への善く戰ふ者の勝つや、智名も無く、勇功も無し。是を以て勝兵は先づ勝つて而して後に戰を求む、敗兵は先づ戰ふて而して後に勝を求む。（孫子）

孫子曰く「彼を知り己を知りて百戰殆ふからず」と、現代の戰爭は王侯個人の私戰にあらず、國民全體の公戰である。從つて彼を知るものは國民全體でなければならぬ。而かもそれは正しく知らねばならぬ。

本書は著者が國民的良心の許す限りに於て、國難的時局に就いて、出來る

だけ公正に、出來るだけ率直に書いた積もりである。然かも尙ほ外國人より見れば、我田引水の誹を免れぬであらう。

昭和七年十月

著者識す





# 打開か破滅か 興亡の此一戰 目次


一　日本丸の船出……一
二　太平洋波高し……一〇
三　日米果して戰ふか……一八
四　戰爭する氣かしない氣か……二六
五　日米反目の煽風機……三五
六　霹靂の滿洲事變……四八
七　背水の滿洲國承認……六〇
八　國際聯盟の大論戰……六八

九　來るべきものが遂に來た……八〇
一〇　遂に火蓋は切られた……八九
一一　戰局を制する英露の動向……九七
一二　巴奈馬運河爆破の効果……一一三
一三　比律賓は日本への進物……一二三
一四　特別旅團の進發……一三三
一五　比律賓攻略戰……一四二
一六　太平洋作戰と布哇……一五四
一七　此の布哇を奈せん……一六三
一八　出陣のその前夜……一七二
一九　太平洋の第一作戰……一八九







二〇　甲板の馬鹿話　上……一九八
二一　甲板の馬鹿話　下……二〇六
二二　桑港の空中奇襲……二一三
二三　奇蹟的に虎口を脱す……二二五
二四　特別艦隊の出動……二三三
二五　布哇沖の空中大激戰……二四九
二六　事實上の經濟封鎖……二六〇
二七　浮世床戰難問答……二六七
二八　熟柿か澁柿か滿洲の正體……二七八
二九　乾坤一擲のるか、そるか……二八八
三〇　知彼知己百戰不殆……三〇二

三　日米戰爭と東京空襲……三七
三　錢湯の飛行機珍問答……三六
三　爆彈下の東京……三六
三　興亡を決する一通の外電……三〇

附錄

一　太平洋作戰の考察……一
二　日米海軍力の質的比較……二

附圖

太平洋作戰距離圖……一





打開か破滅か

# 興亡の此一戰

## 日本丸の船出

東亞の空に雲蔓れば太平洋に波逆卷く。

此の亞細亞の東方に位して太平洋の波に洗はるゝ大日本國！　北は世界唯一の共産主義國として、國際最大の脅威たるソヴエート露西亞と境を接し、東は世界第一の富有國として、黃金の光眩しき北米合衆國と太平洋を隔てゝ東西相對し、西は寢れる象か、蠢めく豚か、人口四億を有する世界の謎の國たる支那民國と壤を連ね、南は其國旗の翻へる處終歲日沒せずと豪語せる、世界最大の國たる英國の領地、濠洲及びニージーランドと南北相望んで居る。

米、支、露、英は其領域の大に於て、人口の多きに於て、國土の富に於て、世界の第一位より第四位に至る大國である。其眞ん中に取り圍まれたる日本國！。土地は狹く。物資は乏

しく、唯有り餘るものは人間許りである。米國の富、英國の大、其一を隣國に持つとするも、國としては大なる威壓を感ぜざるを得ない。而も此兩者を隣りする許りか、北には共產露國の脅威あり、西には動搖支那の不安がある。東西南北悉く敵國の觀がされる。惠まれたるか、呪はれたるか、世界國多しと雖も斯くも難境窮地に立てるものは亦とあるまい。

成吉汗の顧問たりし伊太利人マルコポーロが、金の柱に銀の屋根、桂を焚いて玉を炊ぎ、錦を着て綾を敷くと、出たら目の駄法螺に、夢の國日本を始めて歐洲に紹介して以來、幾世紀の間日本探檢こそは、歐洲人好奇の焦點であつた。バートロメ・ヂヤスの喜望峰發見も、バスコ・ダ・ガマの印度洋進出も、クリストファ・コロンブスの亞米利加發見も、日本探檢が其目的であつたとさへ傳へられて居る。

歐羅巴の船舶が始めて日本の海岸を訪れたのは、今を去る凡そ四百年前なる天文十年（一五四一年）に、葡萄牙船が九州豐後に漂着したのに濫觴し、尋で同十二年には葡萄牙船が薩摩種ヶ島に來つて、始めて鐵砲を傳へたと記錄に殘つて居る。其後葡萄牙、西班牙、和蘭等の船舶が續々來航して貿易布教に從事したが、德川幕府の鎖國勵行に及んで、特に許された





る和蘭以外の船舶は、我沿岸より全く其姿を消すに至つた。

是れ等の船は何れも印度洋方面より、南洋及び支那を經て我國に來航したるが爲め、其寄航地は殆んど九州海岸に局限せられ、太平洋方面に在つては、波は萬古の純潔を保つて、未だ嘗て外船の帆影を寫さず、黑潮に眠る巨鯨の夢は尙圓かであつた。

葡萄牙船が九州に漂着してより二百五十年の後、寛政四年（一七九二年）に露國船が我漂流漁民を乘せて始めて蝦夷に來航した。爾後露艦屢々蝦夷に寇し、北邊漸く多事となり、幕府は是が對策に苦しんだが、次で文化四年（一八一七年）には英國商船が始めて浦賀に入航した。之れぞ米國ペルリ艦隊の來航に先つ事三十六年にして、外國船が我本洲太平洋岸を訪れたる最初である。其後外船の我東海岸に出沒するもの漸く繁く、英佛米露の船舶交々來つて通商を乞ひたるも、幕府は祖宗の遺法を楯として悉く之れを峻拒した。之がため世論囂々、人心兢々、幕府は俄かに海防を嚴にし、遂には異國船打拂令をさへ出すに至り、海岸に砂土手を築き、之れに寺の鐘を鑄潰して造つたズンベラ大砲を備え、以て外船の來航を警戒した。品川沖の臺場や、各地の天保山なるものが當年海防の名殘である。

鎖國日本の黎明は近づいて、日は尙ほ太平洋の水平線下に沒するも、ツアイライトは既に東天を白めて居る。

如何に異國船打拂ひを布令たところで、砂堤のズンペラ砲で威かしたところで、世界の動きを堰き止める事は出來ない。嘉永六年（一八五三年）六月米國水帥提督ペルリは、軍艦四隻を率ゐ、國書を齎して浦賀に至り、幕府に迫つて通商互市を要求した、浮城の如き大船が帆も張らず、艪も用ゐず、煙突から黑煙を吐きつゝ白波を蹴つて進み來る壯景は、當時の我國民の膽を奪ひ心を驚かすに充分であつた。

先輩國として、又聖人の國として、我國民の景仰したる隣邦支那が嘗たる阿片戰爭の苦しき經驗は、我が幕府の當局をして『祖宗の遺法』一點張では、米國大統領の國書を拒絕することの無謀を悟らしめた。斯くて鎖國三百年の夢は破れて、國を世界に開き、開闢以來幾千年、亞細亞の東に緊く纜を繫ぎたる日本丸は、玆に始めて風濤險はしき太平洋上に引き出されたのである。日本が安南緬甸とならずして能く今日あるは、當年伊井大老が攘夷の頑論を廢して、開國進取の英斷に依るものと云はねばなるまい。





爾來星霜八十年、太平洋の風雲屢々動いて、東亞の天地時に疾風怒濤を卷く事もあつた。妖雲雷霆を轟かす事もあつた。幸ひに順風に惠まれた我日本丸、難破沈沒の厄にも會はず、日淸、日露、日獨と、一役を經る毎に國勢益々張り、國運愈々開けて、今や世界五强の一にすら列するに至つた。實話か僞作かは知らぬが、開國當初に於ける人身御供の唐人お吉や、降る亞米利加に袖を濡さぬ遊女龜遊の哀話悲劇も、今では春宵一夕のダンスに、目玉の靑い子供を生む貴婦人もある程に、人の心も變つて來た。千噸の黑船に腰を拔かした役人も、蒸汽機關に膽を潰した國民も、今では世界第三位の海軍を有する迄に、國の力も變つて來た。

日本の開國は世界必然の趨勢であつたとは云へ、固く閉された鎖國の岩戸を、手を下して開きたる手力男命は米國であつた。米國は日本の開國に對する責任者である。それか、あらぬか、英佛露等の歐洲諸國が東洋に呑噬の爪牙を競ふ間に、獨り米國のみは自由平等の建國の精神を持し、我國の良師良友として、陰に、陽に、庇護誘掖して呉れたのである。かの唐人お吉にあらぬ浮名を歌はれた初代全權公使ハリス以來歷代の公使が、排外暴徒の橫行した る明治維新の前後に於て、如何に我國に好意を寄せたるかは史乘に明かである。此の時に當

りて太平洋は其名の如く、風靜かに、波平かに、始めて世界文化の海に乘り入れたる日本丸の航海は極めて平安であつた。

勤勉怜悧なる少年日本の發達は極めて速かであつた。行燈が洋燈となり、チョン髷が散髮となり、明治二十七年（一八九四年）には大國支那と戰つて之れに勝つた。世界は恰もゴライヤスを倒したダビットの如くに少年日本の勇敢に驚目し、東亞の小國は一躍して亞細亞の强國となつた。然し世界は尙は日本を以て愛すべき勇敢な少年でなければ、面憎くい生意氣な小僧位にしか思つて居なかつた、當時米國は日本にとりては最も賴母しき叔父さんであつた。米國も亦日本開國の責任上日本の後見人位に思つて居たらしい。その頃日本の最も嫌ひな國は英國で、日英戰爭の書物があつた位である。然し嫌ひながらも東洋の英國などゝ呼ばれることを以て、日本國民は非常に得意としたものである。

日清戰爭後、露、獨、佛の三國干涉がやつて來て、戰勝の獲物たる遼東半島を日本の手から奪ひ去つた。

支那に勝つて得た自信と、三國干涉に對する義憤とは、日本國民に大なる敎訓と强き刺戟





とを與へた。三國干涉こそは戰勝によつて漸く驕り緩まんとする日本國民の精神を報復に緊張せしめたもので、天が日本に與へたる嚴しき試練であつた。世界の荒波を潛つた日本は、最早頭を撫でられて喜ぶ無慾の少年ではない。

支那に代つて東洋の立役者となり、主人公となり、盟主となつた日本は、善惡共に支那の遺產を引繼がざるを得ない。東亞經綸の覇氣に燃ゆる戰勝日本の面前に、昂然と立ち塞がつて居るものは、歐亞に跨る北方の雄國露西亞であつた。數世紀に亘る其東方經略は、既に亞細亞の東端を極め、コサックの馬首は今や南向して朝鮮に、滿洲に、蒙古に、中央亞細亞に亞富汗に、彼斯に、長鞭一下侵略の蹄を蹴らんとして居る。

十億圓の巨費を投じ、國都彼得堡より絕東の浦鹽斯德に至るまで延長六千哩、雪の西比利亞を縱貫する西比利亞鐵道は着々工を進めて居る。露西亞の南下に對して恐威を感ずるものは日本と英國とである。日本は朝鮮と滿洲とに對して、英國は印度と彼斯とに對して。

日清戰爭の敗北に依つて、老いぼれた豚の眞相を暴露した支那は、露國の命これ奉ずる傀儡に過ぎず、我國の賴みになる隣人ではなかつた。

三國干渉に刺戟せられたる日本は、臥薪嘗膽の誓ひを以て海陸軍備の大擴張を斷行した。露國の南侵は西比利亞鐵道の延進と共に益々激烈となり、印度に對する英國の不安は愈々加はつた、我十三個師團の陸軍、六六艦隊の海軍は、光榮ある孤立を以て傳統の誇とせる大英國をして、秋波を日本に送つて同盟の手を差し伸ばさしめた。世界第一國を以て自他共に許す英國と、對等の攻守同盟を結びたる日本は、恰も素寒貧が大富豪と結婚したるが如く、大いに國際的地位と信用とを高めたものである。利益の爲めには體面や行懸りに捕はれる事なく、理性と打算とに依つてのみ動くジョンブルの面目が躍如として窺はれる。

日英同盟は明治三十五年に結ばれ、日露戰爭は明治三十七年に開始された。露國の暴慢に慊焉たる世界は、日本の蹶起に對し快哉を呼ぶと同時に、同情と憂慮とを以て小さき日本の運命を眺めた。

俊敏なる隼は强暴なる大鷲に打勝つた、勝利の榮冠は再び小さき日本の頭上に落ちた。曩に支那に勝つた事が怪我勝でないことが證明された。世界は自分達が恐れた大露西亞國を打破つた日本を驚異し、驚嘆し、中には恐怖を懷くものさへ生じた。國光は輝き、國威は揚り





日本は最早や東洋の强國でなく、實に世界の强國となつた。田舍廻りの旅役者は、今は歌舞伎の檜舞臺に立つ事となつたのである。國力は潮の滿つるが如く增進し、國運は旭の昇るが如く發展した。

敵國外患なければ國危しと云ふが、常に國民の精神を緊張せしめ、士氣を鼓舞する爲めには、敵國の存在が必要であると言ふのが、古來政治家の頭である。西、支那を破り、北、露西亞に勝ちたる日本は、新に國民の向ふべき目標を何れに定むべきか、東、米國か、南、濠洲か、併し濠洲の宗主國たる英國は、日本と攻守同盟の與國である。白羽の矢ならぬ軍艦の砲口は自から五千海里を隔つる東の方米國に向けられた。

日清戰爭までは、日本の假想敵は、海軍も、陸軍も、支那一國であつた。

日露戰爭までは、日本の假想敵は、陸軍も、海軍も、露西亞一國であつた。

然るに日露戰爭後に於て、日本の假想敵國は、陸と海とが二つに分れた。

陸軍は露國を！。海軍は米國を！。

日本の國難は或は玆に觴を溢ふのではあるまいか。

# 太平洋波高し

伊井大老の開國以來、日露戰爭媾和談判に至るまで、兄の如く、師匠の如く、影になり、日なたになり、庇護援助し來りたる日本が、今や自國の競爭者として、對抗者として、太平洋の彼岸に昂然として英雄的勇姿を現はしたるを見たる米國は、恰も飼犬に手を咬まれた樣な驚きと、悔しさと、憎しみの情に燃えだであらう、

由來歐洲列强の呑噬爭奪の外に超立し、西半球にモンロー主義の鐵條網を張つて、無盡の寶庫に飽暖の夢を貪りたる米國は、日露戰爭後日本が東洋に相手國なきに拘らず、其海軍の急激なる膨張を見て、猜疑と憂慮とを感ぜずには居れなかつた。

『仕舞つた！』と後悔の臍を噬んだものは、曩年のルーズベルトだけではなかつたであらう。

國貧しくて民勇敢なる日本と、國富んで兵弱き米國とは、正に猫と鰹節とである。米國は日本を對照として、軍備の充實を計り、海軍の大擴張を開始した、日米の睽離は茲に濫觴し、日米の反目は茲に胚胎した。





日露戰爭を堺として、米國の日本に對する態度は、親日より排日へと、掌を返すが如く豹變した。

明治四十年に起つた桑港に於ける日本學童隔離問題を皮切りとして、カリフオルニヤ州の日本人土地所有禁止問題を始め、樣々の排日法が矢繼早に、日本移民の居住せる米國西部諸州に於て制定された。

一つの排日法が行はれる毎に、日本國民の對米感情は惡化した。

日米反目に拍車を懸けたものが、兩國海軍の競爭的擴張である。國交が圓滑を缺くが故に戰爭の危險がある。戰爭の危險がある故に軍艦建造の競爭が起る。軍艦建造の競爭がある故に國民の敵愾心が益々激發し、國交の圓滑を缺ぐに至る。鷄が卵を產み、卵が鷄となる。

一艘の軍艦が進水する毎に、日米國民の感情は激化した。

明治の末から大正の始めにかけて、太平洋の風雲は一時頗る急迫を告げ、日米戰爭避く可からずとの聲は全世界に喧しかつた。バルカンと太平洋とは、當時國際間に於ける二大低氣壓の發生源であつて、何れの低氣壓が先づ動いて、全地球を暴風怒濤の中に、卷き込むかが

世界の大問題であつたのである。

然るに日米の爲めには幸福にも、低氣壓は先づバルカンに起つて、遂に歐洲戰爭の大雷雨と爆裂した。

歐洲戰爭中は日本も、米國も、金儲けに忙殺されて、太平洋の低氣壓は一時何處かへ消し飛んでしまつた。してみると金さへ儲けりや、戰爭なんかしなくつてもよいものらしい。

歐洲戰爭は百年かゝつて築き上げた歐洲の文明と繁榮とを、土臺から叩き壞してしまつた。お蔭で日本と米國とは戰爭成金で、玉子一個金拾錢也と云ふ好景氣、鄙も都も黃金の洪水に溺らされた。

大砲の煙が歐洲の空から消えると、大平洋の空が再び曇つて來た。日本も、米國も、金はある。造船力も增した。軍艦でも造りや今の內だと許りに、八八艦隊贊成！。主力艦三十二隻オーライ！。大々的海軍大競爭が捲土重來の勢ひを以て盛返して來た。日本も、米國も、造船會社の大豐年、鐵槌の響きは大平洋の波を涉つて互に聽こへる許りであつた。

當然起る日米戰爭熱の再現！。





動あれば反動がある。戰時財界の大景氣から戰後經濟の大反動。大小成金は枕を並べて沒落した。忽ち困つたのが、やつと議會を通過した許りの、而も十幾億圓を要する我八八艦隊の財源である。平素から苦虫を咬み潰した樣な海軍大臣が、更に澁を嘗た樣な顏をしたのも無理ではなかつた。

經濟に國境なく、財界の反動は米國とても同じ事である。そこで大統領ハーディングの下に、國務卿ヒューズが畢生の智慧を絞つて開いたのが、大正十一年（一九二二年）の華盛頓會議である。日本の爲めには正に渡りに船であつた。賢明なるヒューズは列國の懷中具合を探つて腹の底を見拔いて居た。

參加諸國の海軍軍人の不滿を押し切り、政治的協定によりて華盛頓會議は相當有効なる海軍の縮小制限に成功した。米國の軍人は日本に比率を與え過ぎたと言つて不平を稱へ、日本の軍人は日本の比率が少な過ぎると言つて不滿を叫んだ。殊に日本の軍人並に一部の國民中には、華府協定を以て、米國が日本の發展を阻止すめる爲の隱謀だと言つて、國民の反米心を鼓舞したものである。

是れが爲め華盛頓條約は日米の國交改善と云ふ上に於ては、大なる効果はなかつたのみならず、之れを理由として日米戰爭熱は種々の機關を通じて、不斷に油を注がれて居た。

そこへ起つたのが大正十二年の關東大震災である。米國官民の救援と同情とが、どれ程日本國民に徹底したかは疑問である、嘘か、眞か、あの頃の新聞によると、米國から罹災者救援の爲めに寄送して來た米國軍隊用のネルの襦袢を、日本のでは、こんな上等な品は罹災者風情には不向きだとても思つたものか、入札で商人に拂ひ下げたところ、口の惡い米國の新聞がそれを聞きつけて、言ふ事が面白い。

『日本と云ふ國は震災までも商賣にする』

米國の好意を日本人は知らず、米國人は日本人を義理知らずと云ふ。國際間の誤解や反感は、兎角斯かる感情の齟齬から起ることが少くない。

積りに積つた日本人の反米心をいやが上に募らしたものは、大正十三年米國議會を通過した排日移民法である。米國市民權を與へられざる外國移民の入國絶對禁止に依つて、『日本移民入る可からず』の制札が、高く太平洋の彼岸に建てられた。支那人、印度人などゝ同格に





扱はれたと云ふ事が、顏と體面とを重んずる日本人の自尊心を甚だしく傷つけた。

日本の輿論は反米に沸き返つた。埴原大使の『重大なる結果』の對米抗議が、却て米國民の憤激を買つて、遂に大使の交迭と迄なつた。

日本人は米國の排日移民法を以て、日本が震災の爲めに苦しんで居る其弱點につけ込んだものとして一層氣を惡くした。米國膺懲の聲が翕然として日本の都鄙に喧しかつた。併し埴原大使の所謂『重大なる結果』を具現するには、震災による日本の傷はあまりにも深く、世界の情勢は猶未だ日本の自由行動を許さなかつた。

蛇の生殺しは必ず生き返ると云ふが、華盛頓海軍協定は蛇の生殺しであつた、主力艦は制限したるも、補助艦は自由競爭の儘に取り殘された。日米主力艦の比率は三對五に制限された。日本は主力艦の劣勢を補ふ途を補助艦の增勢に求めた、生殺しの海軍制限は、再び息を吹き返して補助艦制限の爲めに、昭和三年（一九二八年）に日英米三國のジュネーブ會議が開かれたるも決裂し、更に昭和五年（一九三〇年）に倫敦會議が開かれた。對米七割最少限度

の叫びが、海軍當局自身のチンドンに依つて津々浦々迄宣傳された。

だが英米就中米國の强硬なる反對に依つて、日本の七割要求は破れて六割八分となつた。

七割が一分缺げても國防が危いと、當局者から吹き込まれた正直な國民は承知しない。

『國防の缺陷をどうして吳れるんだい？』

とゝのつまりは、米國の日本壓迫、國防の危機、潛水艦の不足を補ふ爲め航空力の大擴張といふ結論に導かれた。軍縮剩餘金の大半は是れがために消えてしまつたのである。國民は軍部の吹く笛のまゝに踊つて居る。

國際平和を目的として造られた華盛頓條約、倫敦條約は、少なくも日本に於ては戰爭鼓吹の具に使はれた觀がある。倫敦會議以後、日本國民の對米敵愾心はいやが上に高まり、日米戰爭說は一層やかましくなつた。

かくて昭和六年秋世界不況の眞つ唯中に、時を同じうし突如として起りたる東西の大事件！。曰く、西に於ては世界金融の總元締と謂はれたる英國の金輸出禁止！。東に於ては日米戰爭の導火線と目せられたる滿洲に於ける日本の軍事行動！。





世界は愕然として殆んど策の出ずるところを知らなかつた。

總ての懸案は早晩淸算されねばならぬ時が來た。

滿洲事變に對ゝ、國際聯盟と米國とは動いた。國際聯盟は聯盟規約に依り、米國は不戰條約と九國條約とにより、共に日本と對立するに至つた。就中事變に對する米國の聲明は、日本の行動と正に正面に對向して居る。

十三對一、十九對一、日露の危機、日米の危機、暗雲は二重三重に日本の空を塞ぎした。

軍服を着た人間が、演壇の上から聽衆に向つて、公然と三年後に於ける日米戰爭の必發を叫ぶ程に、形勢は逼迫した。

事の起るは起る時に起るのではない。

國際の戰爭は靑天の霹靂の如く突發するものではない、戰爭の芽が出るまでには、相當永い溫床がなければならぬ。

日米兩國民の心の奥に、グロディアスノットの如く堅く結ばれたる反感は、アレキサンダーの劍ならぬ、十六吋砲の彈丸以外に、之を解くものは無いであらうか？。

# 日米果して戰ふか

『日米果して戰ふか？。日米遂に戰はざるか？。

是れ二十世紀上半期に於ける世界の一大疑問にして、亦帝國の最大重要問題たり。非戰說者は乃ち曰く、日本の財力は到底戰費の負擔に堪えず、米國の兵力は到底日本を侵す能はず。是れ日米遂に戰はざる所以なりと。開戰說者は乃ち曰く、米國の帝國主義は今や顯然として覆ふ可からず、帝國の海外發展亦實に止む能はず、相對進せる二物の衝突するは科學の原則なり。是れ日米必ず戰ふ所以なりと。何れか是。何れか非。著者と雖も未だ俄に之を斷ずるを得ず。』

とは、大正の始め日米國交の緊張せる際、著者が日米戰爭を假想して書いた『次の一戰』の自序の一節である。爾來茲に二十餘年、其間に歐洲戰爭の起るあり、國際聯盟の成るあり、世界の狀勢と列國の興廢に幾多の變動ありたるも、日米の關係に至りては二十年一日の如く右の序文は文句こそ古けれ、尙其のまゝ今日に適用することが出來る。





久しい哉、日本と米國との反目抗爭！。

洋々五千哩の太平洋を隔つる日本と米國、殊に日本開國以來數十年間、嘗ては最も親善輯睦なりし日本と米國とが、今日犬と猿の如く、事々物々、反目抗爭して日米戰爭の聲絕えざるものは如何なる因由に據るのであらうか？。

兩賢相厄せずとも謂い、兩雄並び立たずとも謂ふ。太平洋の西と東とに國する日本と米國賢國か將た雄國か。賢國なれば太平洋の波は汪洋として和平の光を湛へねばならぬ。雄國なれば太平洋の波は澎湃として搏擊の響きを轟かすであらう。

個人が他人のものを强奪すれば强盜罪で罰せられる。個人が喧嘩をすれば暴行罪で罪せられる。然るに國家が他人の國を奪ふ事は、國家發展の善事であつたり、國家が他國に戰爭を仕懸けることは、國家自衛の正義であつたりするのが、今の國際道德なるものである。古來人に賢人あるも、國に賢國ありしを聞かない。是に於いてか兩雄並び立たず覇權の爭奪となる。

個人と國家とを問はず、環境の近似せるものは、害を同じうするときは協同の敵を防ぐため最も仲のよき味方となり、利を同じうするときは獅子の分け前を爭ふため最も仲の惡き敵

となる。兄弟でも、あまり年の違はぬ太郎と次郎とは菓子を爭ふて常に喧嘩し、學校でも、一年と二年とは勢力を競ふて往々衝突する。是れ一つには環境が近似せる故、相互利害の衝突が多く且つ激しき爲めであり、又一つには實力が相如ける故、互に抗爭して相下らない爲めでもある。

個人の生活に於て隣り近所の親密なのは、共同の害を防ぐ爲めであり、國際間において隣接國の不和なのは、互に利益を爭ふか、或は優越を競ふがためである。ローマ、カルタゴ爭覇の昔を問ふ迄もなく、英吉利と佛蘭西、佛蘭西と獨逸、佛蘭西と伊太利、米國と墨西哥、日本と支那、日本と米國の如きは、現代世界に於ける隣邦抗爭の多くの好標本である。

英國と佛國とは歐洲の覇權爭奪に過去千年の血を流して來た、佛國と獨逸とは、アルサス・ローレン二州の爭奪を中心として、互に不倶戴天の仇と憎み合つて居る。伊國と佛國とは地中海の爭覇と北亞弗利加の分割に半世紀の暗闘を續けてゐる。墨西哥は米國の横暴に反抗し支那は日本の壓迫に抗爭して居る。日米反目に際し墨西哥が日本と親しみ、支那が米國に近づくのも、自然の趨勢とは云へ、面白い現象である。





嘗て日本は英國と同盟して露國に當り、佛國は露國と同盟して獨逸に當つた。隣邦吳人の顰笑を氣に病む越人も、遠國秦人の肥瘠には超然として居た。遠交近攻は支那外交の秘訣か知らぬが、遠親近爭は國際關係自然の流れである。

扨て然らば、日本と米國とは互に反目し、憎惡し、抗爭せねばならぬ理由は何處にあるのか。否、何が故に日本と米國とは、互に反目し、憎惡し、抗爭して、戰爭の死の淵に急ぎつゝあるのか。

資本主義最後の段階たる、市場獨占の帝國主義の衝突といふ、マルクスの公式を適用すれば、答案は簡單明瞭である。然し今の世界に資本主義國は日本と米國のみではなく、英國もあれば佛國もある。然るに英米、英佛、佛米、日英等の戰爭說起らずして、獨り日米戰爭說のみが、叫ばれるのは何故か。

そこに公式丈では割り切れぬ問題が殘る。

印度及濠洲を領有し、支那に經濟的根據を張れる英國と日本との關係は、經濟上に於いても、軍事上においても、米國と日本との關係よりも、一層對立的であり、背反的であるにも

拘らず、日英衝突の聲は極めて稀にのみ聞く。

濠洲、加奈太等に於ける排日に對しては默過せる日本が、米國の排日に對してのみは急喚疾呼して反對して居る。日本の海軍に對しては神經を尖鋭化する米國も、加奈太との國境には一座の要塞すらも設けず、晏如として意を安んじて居る。

茲に於てか日米の關係は、マルクスの公式のみを以て片付けるには、あまりにも複雜なる何物かがなければならぬ。

抑も日米國交の惡化は、日露戰爭に於ける日本の勝利に淵源する。歐洲に於ける過剩人口の放水池として西半球に超立し、武陵桃源の太平を夢みたる米國は、日露戰爭後忽然として太平洋の西岸に聳え立ちたる新興日本に對して警戒の眼を放つに至つた。

『油斷のならぬ此リッツル・ヂャップ！。』

先づ第一に太平洋の防備が叫ばれ、海軍の擴張が行はれた。

職務に勤勉に、戰爭に勇敢に、而も豚の樣な低生活に甘んじながら、鼠の樣に多產の日本移民が、米國到る處に髮の黑い、色の黃色い、背の低い子供を生み散らされてはたまらない





今の間に何とかせねば、米國は、庇を借して主屋を取らる馬鹿を見るであらう。排日の聲の嵐は、倏忽の間に太平洋岸の諸州を吹きまくり、ロッキーを越えてミスシッピーの流域に迄も及んだ。

好ましからぬ日本移民を排斥せよ！。

米國に同化せぬヂャップを追ひ拂へ！。

市民權なき日本人の土地所有を禁止せよ！。

憲法に許されざる外國移民の入國絕對反對！。

等、等、等。

排日に就いて米國人の云ひ分の主なるものは斯ふである。

一、日本勞働者は其生生活程度の低きを利用し、低廉なる賃銀を以て雇はれるが故、白人勞働者の職業と生活とを脅威すると。

一、日本移民は母國の風俗習慣を頑守して米國に同化せず、社會生活の平和を害すると。

一、日本人はあまりにも祖國意識强く、米國に居住しながら常に米國を敵國視して居ると。

一、米國に生れたる日本人は米國の國籍を有するに拘らず、日本は二重國籍法によつて彼等に兵役の義務を課して居ると。

一、米國の憲法は米國に於て生れたる者の外、白人及び黑人以外には市民權を與えて居ない、故にそれ等外人の入國を拒絶する事は米國の自由であると。

其の他、日本は石井ランシング紳士協約に於て、日本移民の制限を約しながら、協約を履行しないとか、日本は特に軍隊教育を受けた在鄕軍人を移民に仕立て、一朝有事の際結束して立たしむる計畫だなどゝ云ふデマさへ交つて居る。

米國の云ひ分が正しいか否かは別とし、是れ等の排日事實は、一等國民を以て自ら高く止まれる日本國民の誇りと自尊心とを傷づけることは甚だ大である。

日本國民の反米輿論が激すれば、米國民の反日輿論も亦激する。兩國の新聞が之れに油を注ぎ、兩國のジンゴイストが之れに拍車を掛ける。針小棒大の誇張や、架空揑造の妄想やが太平洋を渡つて行き來する。

だが排日問題は、日本に取つては實質よりも寧ろ體面の問題である。日本が如何に顏を重





んずればとて、之れがために國運を賭してまで、戰爭を開始する程の事ではあるまい。殊に泥棒にも三分の理と云ふが、米國の言ひ分にも何分かの理があるにおいておやだ。されば排日問題は、日米戰爭熱を煽る扇風器ではあるが、戰爭に火をつけるマッチとはならぬであらう。

では日米開戰の動機となるべきものは何ぞ?。

日本には『米國恐るゝに足らず』と云ふ有名な書物があるが、米國には『日本恐るべし』と云ふ書物を書いた人がある。實際米國は日本を恐れて居る。然り、米國は確かに日本の武力を恐れて居る。そして眞面目に日本の侵略を恐れて居る。

それは米國の誤解である、杞憂であると、口を酸ぱくして百萬遍、日本の平和主義を說いた處で、日本が强大なる海軍を有する限り、米國人は決して日本の言を信ぜぬであらう。恰も米國人が如何に平和主義を稱えても、日本の國民は之れを信ぜぬであらうが如くに。

米國の排日も、元を訊せば日本が恐ろしいからである。まさかの場合に、獅子心中の虫に咬まれない用心のために過ぎない。

米國が海軍縮小に熱心なのも、日本の海軍が恐ろしいからであるとも解せられる。

米國は日米戰爭の場合、武力に於ては或は大なる自信こそ持たぬかも知れぬ、只米國の賴む處は、自國が無盡藏にして自給自足の物資を有せるに反し、日本の物資が貧弱にして、長期の戰爭に絕え得ぬと云ふ點である。だから米國は此點を押さえて、日本の攻擊を制肘阻止しやうと考えて居るらしい。

もし日本にして豐富なる資源を握つたならば、それこれ鬼に金棒で、最早米國の手に負えない事を米國はよく知つて居る。

處が日本のためには幸ひにも、米國のためには氣の毒にも、日本の隣りには支那と云ふ物資に富んだ尨大な國がある。而も其の一部の滿洲は朝鮮と境を接し、日本軍一度鴨綠江を渡れば最早日本の自由である。日本の滿洲占領は、日米戰爭を考慮する限り、米國にとつては殆んど致命に近き大打擊であるとされて居る。されば滿洲が日本の存立上積極的生命線であるならば、米國にとりてはそれと同じ重要さにおいて消極的生命線である。

だから米國は萬難を排し、或は萬危を冒しても、日本の滿洲掌握を阻止せねばならぬ立場





にある。

國內に有り餘る資源を有せる米國は、支那に對し、滿洲に對し、恐らく積極的野望は持たないであらう。米國の唯望むところは、支那、滿洲が日本武力の給養地とならざらん事である。

支那の領土保全も、門戶開放も、九國條約も、不戰條約も、米國に取りては、皆是れ日本の支那及滿洲占領を阻止するの目的に外ならない。

形式は何んでもよし、日本が滿洲を占領或は事實上の併合に成功したる時、支那は最早日本の藥籠中のものである。支那の富と物資に養はれたる日本の武力が、太平洋を東に向ふとき、米國の運命は疑問である。米國の恐れと、憂ひと、惱みと、悶えとは、實に玆にある。

今や日本は滿洲を確かりと握つて居る。

日本と國際聯盟及び米國との關係は頗る緊張し、世界大動亂の機運は機微の間に動いて居る。

太平洋に激浪逆卷くか否やは、一に滿洲問題に對する日米兩國の態度如何によつて決する。

日米果して戰ふか、日米遂に戰はざるか、賽は既に投ぜられて正に盤上に轉げつゝある。

# 戰爭する氣か、しない氣か

世界の將來が不斷の戰爭であるか、將た永久の平和であるかは、人類の本能が鬪爭であるか將た和親であるかによつて定まる。

けれども人類の本能が、鬪爭であるか、和親であるかは、人の性が善であるか、惡であるかと云ふ問題と等しく、千歲未決の懸案である。

釋迦の如く、基督の如く、慈悲を說き、博愛を說く平和の聖者もあれば、アレキサンダーの如く、ナポレオンの如く、攻戰を恣にし、侵略を逞しうする鬪爭の英雄もある。

而も人間は釋迦、基督の敎を信仰すると同時に、アレキサンダー、ナポレオンの武勇を尊崇する程に矛盾の動物である。

隻眼を閉ぢて世界の一面を見ると、そこには平和を目的とせる國際聯盟がある。侵略戰爭を罪惡と宣言せる不戰條約がある。其他中裁裁判、軍縮會議など、國際戰爭を防止せんとする種々の機關がある。而して現代世界の文明國と稱する程の國は殆んど全部之れに參加し、





たとへ參加せざる迄も其趣旨に贊成して居る。

世界の總ての國が平和に贊し、侵略を否定する以上、人間の生血を啜る戰爭の惡鬼は、最早や此地球上に跡を絕たねばならぬ筈である。

然るに更に眼を更えて世界の他の一面を窺へば、そこには今尙不斷に戰爭の叫び聲が聞えて居る。世界的經濟難に失業者は都鄙に滿ち、パンの爲めの自殺者は日々の新聞を賑はすも軍備のためには幾億の巨費を投じて惜まない。生產工場は操業短縮のため機械に錆を生ずるも、兵器工場の機械のみは全力を以て運轉して居る。

理想と現實の矛盾、言ふ事と、爲す事との背反、人間虛僞の暴露である。

人類の本能が鬪爭であると信ずるならば、宜しく鬪爭に備ふべきである。三度の飯を節して軍隊を養ふも好からう。晩酌を廢して軍艦を造るも好からう。大いに備えて、大いに戰つて、大いに勝てば、大いに幸ひである。武運拙く破れても恨みはあるまい。

人類の本能が平和であるとするならば、親和を妨ぐる一切のものを排斥除去せねばならぬ戰爭の誘發物であり、戰爭の演技者である軍備の如きは、第一番に撤廢すべきものである。

何れの文明國でも、社會の治案を維持する爲めには、個人の兇器使用を禁止して居るではないか。

鬪爭なら鬪爭に徹底せよ。

平和なら平和に徹底せよ。

鬪爭に徹底して、大いに軍備を張るの勇氣もなく、平和に徹底して、軍備を全廢するの決心もなく、半上落下の武裝平和の名に隱れて、他國の虛を狙つて居るのが今の世界の姿である。清盛が定めし地下で苦笑して居るであらう。

何事ぞ花見る人の長刀、平和のために何で武裝が必要ぞ。

國際聯盟の軍縮會議に於て、世界の知嚢を集めて論議するところのものは何ぞ。自國の軍備を最も有力ならしめんが爲めの軍備縮小論、口角泡を飛ばして堅白異同の言を弄するところ、宛として雄辯競技會である。こんな會議に列する委員の、大名旅行の旅費を負擔する國民こそ、よい面の皮と云はねばならぬ。

知識餘つて信念足らざるものが、今の國際聯盟であり、軍縮會議である。





全世界の全軍備全廢の露國の提案を、國際聯盟の列强とかは冷笑を以て葬り去つたではないか。

全世界の大砲を悉く打ち碎き、全世界の軍艦を悉く打ち沈める事が、世界平和への最捷路である。

此の大覺悟と大決心となくして、口に平和を唱ふるの資格はない。

職業軍人の失業反對などを氣にして居ては、軍縮のグの字も斷じて出來つこはない。華盛頓會議、倫敦會議、其他の軍備縮小に、軍人が反對しなかつた事があるか。

女郎屋の親爺の反對を氣にしては、公娼廢止は絕對に出來ない。

軍備の目的は唯一の戰爭に備ふるためであり、平和に備ふる爲めではない。

軍備の撤廢に反對するものは、なぜ平和に反對しないか。

軍備の力によつて、或は自國の不當なる既得權を擁護し、或は新權益を獲得せんとするならば、それは戰爭の延長であつて斷じて平和とは云へない。

軍備と云ふ暴力によつて、自國の不當なる既得權を擁護せんとする事と、他國の不當なる

既得權を破壞せんとする事と、道德上に何程の相違がある？　前者が正しければ後者も正しい。後者が不正なれば前者も不正である。他國の不當はこれを邪とし、自國の不當はこれを正とするところに、國際の平和は亂れ、戰爭の嵐が吹き荒ぶ。

日本人は米國の布哇合併を以て、米國の帝國主義的野心に出づるとなし、其毒手の東洋に及ばん事を恐れ且憂えて居る。

米國人は日本の朝鮮併合を以て、日本の軍國主義的侵略によるとなし、日本の怪力が西半球に延びん事を憂え且恐れて居る。

それが疑心暗鬼であるか、枯尾花の幽靈であるか、さては亦形に添ふ影であるかは、軍備の對立する限り、何人も說明することの出來ない觀念の問題であつて、唯時の力のみが事實に之を證明するだけである。

南北戰爭の頃に、誰が米國の布哇合併を想像したであらう。日露戰爭の前に、誰が日本が朝鮮を併合するであらうと想像したであらう。

日本の米國侵略！　米國の東洋進出！　時の力以外に何人も、之れを肯定することも否定





することも出來ない、是に於てか兩國民の間に不安の念が起り、妄想し、空想し、互に猜疑し、互に憎惡する。其間に各々ためにせんとする煽動宣傳が種々のトンネルを通じて行はれ國民の敵對心をして、牢乎として遂に拔く可からざるに至らしめたのである。

それが相互の誤解に出づると、正覺によるとを問はず、今や日米兩國民の反感敵視は、否認することの出來ない儼然たる事實である。外交官の儀禮的日米親善のテーブルス・ピーチは、虛僞の雛形として國民の冷嘲をさへ浴びて居る。

此時に當り國民の此不安を一掃する唯一の道は、相互軍備の完全なる撤廢の外にない。併しながら若し軍備の撤廢が出來ぬとせば、此不安を輕くする只一の御守り札は、自國の軍備の優越である。

例へば人間が神化せざる限り意見の扞格もあるであらう、感情の齟齬もあるであらう、利害の衝突もあるであらう、從つて時には喧嘩口論もするであらう。其場合、御互に傷をせない爲めには、武器を持たぬ事が一番安全である。然し持たねばならぬとせば、役に立つ樣な物でなければ安心は出來ない。

然るに責任の地位に立てる軍人が公然と國防の缺陷を唱へたり、筋の多い軍人が、米國は華府會議に於て、日本城の外濠を埋め、倫敦會議に於て內濠を埋めたなどゝ叫ぶのを聞けば實狀に暗き國民が痛心憂慮するのも無理ではない。

斯くて軍備の對立が尖銳化する。

戰爭をする積りなら、するだけの大覺悟が必要であらう。

戰爭をしない積りなら、しないだけの心掛けがなければなるまい。

戰爭をするだけの大覺悟もなく、しないだけの心掛もなく、和戰兩樣の備への名の下に、行き當りばつたり主義で、一面には戰爭の發生を恐れながら、一面には國民の敵愾心を必戰的に煽り唆かして居る。

春談に昂奮した青年の走るところは、きまつて居る。

沸ぎり切つた國民の此の敵愾心を何う始末する?。

此時に當り滿洲事變が忽焉として新に舞臺に上つて來たのである。





# 日米反目の煽風機

出版業者の話に依ると、日米戰爭物だけは業界不振の外に超然として版を重ねて居ると。道理で本年になつてからでも、類似の書物の出版が、日本だけで十指を屈してもまだ足らぬであらう。之れを見るも日米關係乃至日米戰爭と云ふ問題に對し、我國民の關心が如何に大なるかを窺ふ事が出來る。

書物の內容は大概飛書がきまつて居る。即ち、東洋就中滿蒙に於ける日本の正當なる發展に對する、米國の不法なる干涉壓迫が因となつて、日米戰爭が開始されたが、華府條約、倫敦條約によつて海軍を縮小されたる日本は、非常に苦戰に陷ると云ふので、結論は軍備充實の宣傳に一致して居る樣である。

是等の書物の中に、日本のS海軍少將によつて書かれた『深まり行く日米の危機』と云ふのと、米國デヴイス海軍大佐の原著で日本の小澤海軍大佐の飜譯になる『日本恐るべし』と云ふのがある。兩書共に架空の戰爭小說ではなく、歷史と事實(?)とに對する著者の考察

に基く軍備論策である。而して兩書ともに、最近出版に於ける新記錄を作つたと言はれる程に、多くの日本人に讀まれた書物である。

是等兩書に於ける著者の議論や意見やが正しきや否や、當れるや否や、は玆に評する限りでない。唯斯かる書物によつて兩國々民の反感や敵愾心が、如何に唆り立てられるかを知る爲に二三の句文を摘出して見やう。

『深まり行く日米の危機』に於て著者は滿洲國の獨立に對し、

『固より滿蒙は滿蒙の滿蒙であつて、濫りに第三國の干渉な許すべくもないが、日本の正義的存在なくしては、滿蒙の獨立は到底不可能なる實情に於て、日本はその母體たるの努力と任務とを拂ふに吝であつてはならぬと同時に、最も勇敢に且大膽に滿蒙新建國の大業に生みの親たる責任を盡し與ふるの必要がある。』（三七三頁）

と論じて、日本の行動の正義を强調しながら、同じペンを以て巴奈馬共和國の獨立に對しては、

『其遺り口は、不幸息子を煽て上げて憐な寡婦から貴重の財產を橫領したのと少しも違つた事はない。』（七頁）

と云つて、當時に於ける米國の行動を責めて居る。

又日露戰爭の際、我滿洲軍が苦況に立てるを見て、米國大統領ルーズベルトが好意的に仲裁の勞を採つて吳れた事は、當時我國民の感謝したる處であるが、之に對して著者は、

『當時米國の立場から云へば、日本にせよ、露國にせよ、一方が立つ能はざる迄に傷つく事は取りも直さず、他の一方が非常に優勢になると云ふ事になるので、是れは極東に於て恐るべき米國の敵を作る所以である。就中日本が大局に於て疲れ果てゝ、露國が極東に其羽翼を延ばす樣な事があつては益々以て米國の邪魔になる。だから米國は成るべく兩方があまり負けない程度に、そして相當に疲れた機會に調停を試みねばならぬ理由があつたのである。其活機を掴んだのがルーズベルトである。』（九頁）

と言ひ、尙日本が賠償を得ずして北樺太を還付したのは、ルーズベルトが日本政府を威嚇した爲めだと言つて居る。

著者は華盛頓會議に對しては。

『恰度其頃ヴエルサイユ平和條約並に國際聯盟規約の產婆を勤めながらも其批準を拒絕して、國際信義に對して多少の忸怩を感じて居つた米國は、國內的には負擔輕減の叫び、財政行き詰り、建艦工程の遲延等により、海軍競爭の前途に頗る暗い影がさして居たに拘らず、對外的には極東進出の熱望に燃え、出來得ればヘー宣言の徹底的保證を得て、政策遂行上の障礙を除き、又親支排日策の續きとして山東問題を解決せんとする企圖を持つて居た尙新に選出された大統領ハーチングにしても、亦其與黨にしても何か一つの大手柄をして、內にあつては衆望を繫ぎ、外にあつて國際的不評を挽回し、再び平和會議當時の華々しき牛耳振りを發揮しやうと考へたのである。」（一五一頁）

と米國大統領の心事を迄肘度し、ジユネーブ會議に對てしは。

『首唱國の米國は何等の犧牲を拂はずして他國の優越を制止し、其期間に於て自己の擴張を遂行し、新式有力なる艦船を建造して其劣弱を補ひ、斯くて出來上つた優秀艦隊を以て世界に君臨せんとの企圖である。これ程虫のよい話があらうか。自分は競爭に負けたから暫らく俺の準備が出來る迄先に行くのを待つて呉れ、どうせ俺は一番になるのであるから





と云ふのである。もし此の思想を國際的におし進めれば、獨立國家の自衛權を折伏して强國優越の前に跪座せしむる事になるのである。」（一七六頁）

と米國の我儘をこき下し、倫敦會議に對しては。

『口にはどんな崇高な理想を唱へても米國主唱の軍備縮小の窮極は、最も安價に好戰的比率を日本に强いんとするのに過ぎないのである。換言すれば極東の勢力均衡を故意に攪亂して自己の國策を武力の背影によつて無遠慮に遂行せんとする具に軍縮會議を利用したのである。假令眞の動機は人類最高の道義的理想から發足しても、每次軍縮の經過は最も雄辯に以上の事實を物語つて居る。之れが果して世界の平和を庶幾して居るものゝ態度であらうか。』（二六六頁）

と米國の不誠意を難詰し、更に滿洲問題に對しては、

『更に米國の態度を見るに、聯盟協約國の埒外にありながら、終始聯盟と不即不離の關係を持續し、或る時は聯盟を使嗾し、或る時は單獨に日本の行動に抗議し、恰も事變の眞相を無視して一に非違の我國にあるかの如き態度を示すのは吾人の怪訝に堪えざる處である

殊に滿蒙民族の自發的自立による滿蒙新政權に對して、九國條約を引用して其合理的承認の拒否を豫約するが如き對日通牒を發して、將來の口實を留保するに至つては、聯盟以上の横暴振りと云はねばならぬ。聯盟は事の始めより米國を招引して其威力の强化を計つたのであるが、米國亦聯盟を操縱して自國の對策に資せんとして居る。其何れにしても日本の强大化を呪咀するに於ては一である。」（三六七頁）

と米國の横暴を憤慨して居る。

其の他寸言斷語、反米の氣が紛々として全卷到るところに漲つて居ると云つてもよい程である。之では『深まり行く日米の危機』でなく、『深め行く日米の危機』と題する方が遙かに適切の感がある。

次に『日本恐るべし』（小澤大佐の譯書による）に於て著者デヴィス大佐は劈頭先づ日本を總評して、

『英國には洗練されたスポーツマン・シップなる準繩あり、最も良心ある米國には正邪に對する鋭い意識がある。其他の國民も或は宗教、或は傳統的政策による自制があるが、日





本と云ふ新興勢力は、過去を反省せず、只管膨脹に專念する外に、何等の之を敎導する信條なく、漫然として二十世紀に流れて來た。吾人が、今日本の行動や行跡を檢討し、密接なる利害關係ある英米にとりて、之が如何なる意義を有するかを考えて見なければならないのは之が爲めである。』

と無遠慮に皮肉くり、巴里會議に就きては、

『日本の疾風迅雷的な戰略地點獲得は、一九一九年（大正八年）の巴里平和會議に始まる彼は世界大戰に名目だけ參加して、何れかと云へば、引き留められた客が、馳走の出具合で帽子を取つて歸らうとして居る樣な態度で聯合側につゐてゐた。それにも拘はらず平和會議の席上では最上の美饌を要求したのである。當時尙ほ撤退前の西比利亞占據はさて置き、彼はカロリン群島、パラウ諸島、グワムを除くマリアナ群島及びマーシャル群島の委任統治國となつた。』（二四頁）

と嫌味を言ひ、華府會議に關しては、

『軍縮會議の案內狀が發せられた時、日本は回答に頗る手間取つた。其理由として日本は

孤立無援、四周開け放しの小海國であるから、自衛上、絶對に強大なる海軍を必要とする所以を說いた。恐らく各國の內で、一番懸け引きの上手なものであつた日本は、外に目的を持つて居たのであらう。（中略）日本は軍縮會議の幾ケ月も前に、趨勢を豫察して小笠原群島と流球諸島との周圍に巡洋戰艦を以て警戒網を張り、大戰中以上に監視を嚴にした是等の邊僻の島で何事があつたのか、別に穿鑿する者もなかつた、と言ふのは一見世界の他所に何等の交涉もあらうとは思へなかつたからであつた。併し實際に行はれて居た事は蟻の如く群がる幾千百の小さき褐色の勞働者が、何百噸とも知れぬ鋼材と、幾千噸のセメントと一所に、是等の島に繰出されて居つた事である。而して彼等は夜を日に次いで働いて居つた。（中略）是れ等の島には完全なる飛行場が設備せられ、此處から最も破壞的な恐るべき爆擊機や戰鬪機が容易すく出發して、鷹が森の小徑に鶉を狙ふ樣に、海上交通路を監視する事が出來る樣になつて居たのである。』（二八頁）

と日本の行動を誣ひ、又日本の巡洋艦建造に對しては。

『然るに此條約調印を、多數の造艦契約を有し多量の材料及び人員を擁する日本官民造船





界は、憤然立つて之に抗議した。日本は此抗議を自國の新聞に依つて猛烈に支援した結果世界は彼れの國民生活の平衡が正に危殆に瀕して居る樣に思はしめられた。是れ皆彼れの所謂世界の平和の爲めには進んで自己の利益を犧牲に供せんとする表面上の眞摯にして寬容なる態度に魅せられて居た爲めである。然るに此間に乘じて手早く、言ひ分けしながらも是等造船界に仕事を與へる方法を探し出した。日本は數年度に跨り、二十六隻の快速巡洋艦建造計畫を立てた。彼れの說明に依れば、全く失業の狀態から勞働者を救ひ、造船業者の破產を防ぐ爲めと云つて居る。要するに彼は弩級艦に割當てられた豫算を其儘、新式快速巡洋艦の建造に向けたのである。』（三六頁）

と說き、亦日本の航空施設に關しては、

『だが日本が其海軍を强むる事は啻に之に止まらない。彼は水上と同じく空中に於いても優越を占め始めて居る。航空兵力の發達並に整備用として彼が既に協賛を經、又は近き將來に計上せんとする豫算は二億弗であるから、巨大なる爆擊機、偵察機、戰鬪機其他發明されてある限りの各種破壞的航空機が、彼の空軍に編入されるであらう。但し日本人自身

は優秀な飛行家ではないが、其位な事では彼を尻込みさせるに足りない。世界到る處、自國で用ゐられない優秀な飛行家が居る。特に獨逸の操縱士は日本に集められ、仕事のない世界の冒險家たる佛國の操縱士、英國、土耳其の飛行家等は皆彼等に飛び方を敎えつゝあるのみならず、隊員として來り投じつゝある。』(三九頁)

と出鱈目のヨタを飛ばし、日本の侵略については、

『彼は今日本人たる事を要すると同時に、米人、英人、獨逸人、佛蘭西人の贅澤と發明品とを併有する事を欲して居る。其狹き島國を牢屋の如く思ひ出し、窮かに而も死物狂ひに戶口を探し、其處から倦む事を知らざる子供等を入り込ましめ、見込ある新しき土地を得て、彼れの國民的光榮に加へ、富を巨船に積んで故國に送り歸さん事を望んで居る。彼れは之れを亞細亞大陸には試み盡した。彼れは西比利亞の咽喉を摑んだ。彼は朝鮮を脚下に押えた。彼れは滿洲を蠶食して居る。彼れは支那人を脅迫した。彼れの間近には一大群島ありて、頗る彼の要望に適ひ、貪婪の目を向けられて居るものがある。即ち比律賓群島である。彼れは之れを手に入れやうとして居る。今日の狀況では或は是れを實現するに到る





やも知れない。然る後彼れは米大陸の何處かに門戶を探すであらう。然して若しカリフヤルニヤに植民する事を强行する能はざるときは、墨西哥又は南米に之を求めるであらう。之を實行する爲に有力なる海軍と、强力なる空軍とを有する優勢なる兵力を完成するを要するのであつて、之に依つて武力のみを以て植民の機會と其國民精神に相應しき名譽とを要求するであらう。』(四三頁)

と言ひ、日本の軍國主義に就いては、

『日本陸海軍の主腦が一見好戰的なりとて之を非難してはいけない。何となれば日本人は今尙封建的國民であつて、其人民が好戰的なる事は顯著なものである。彼等は從來常にさうであつた。將軍が實權を失ひ天降れる天皇の治下に統合せる日本となりて以來五十年の間に、鬪爭人種たる武士の血にとつては、平和を求めて平和的となるには年月が足りなかつた。其間日本は實に三大戰爭を賭して是に勝ち、其上王國朝鮮を收め、支那、露西亞、獨逸より大塊の土地を收受した。一事成れば萬事成る、斯くの如き成功は類例がない。日本が皇帝より學童に至る迄帝國主義、軍國主義のレッテルを貼られるは之が爲めである。』

（六二頁）

と述べ、支那關係に於ては、

『支那は平和主義なるも、事實は平和どころではない。世界第一の大常備軍は暴力亂用の各軍閥黨派に分屬し、貪慾と迷信とに驅られて、支那を絶え間なき鬪爭の巷と化して居る之が日本の付け目であつて、某派と結んでは他黨を排し、平和を叫ぶかと思へば、武器の投げ賣をなし、此處に讓歩を得、平和を裝ひて、彼處に喰ひ入り、終始地歩を固めつゝ、骨拔の四億の支那民衆の運命を掌上に乘せて醜弄して居る。』（六六頁）

と誠らしく述べ、日本の野心に關しては、

『世界の平和を念とせるものにとりては、自國をいやが上にも武裝し、軍國化しつゝある一方、他國の防備運動に對しては事毎に難癖を付けんとする日本の厚顏な要求は、平和運動の勇氣を挫く結果となるに相違ない。日本の戰爭に對する絶大なる努力は總て其努力を攻擊される虞れに發して居るとは認められない。彼は殆んど難攻不落の天嶮に惠まれて居る。亞細亞の本土には非戰鬪的な國民が住んでをつて、日本に對して何等敵對行動に出づ





る虞れはない。英國及び米國は日本と何等重大な爭ひをして居ない。又露國は理論上彼の同盟國である。然らば日本の各種軍事作業は何を目標として居るのか、曰く太平洋に覇たり、亞細亞の盟主たり、未來の女王たらんとする傲慢なる野心に基づくものである。世界各國は宜しく活眼を開いて、此島帝國の爲す處を注視する必要がある。』（七〇頁）

と叫んで居る。其他之れに類する日本非難の文句は枚枚擧に遑がない。

日本人は此『日本恐るべし』を讀んで、どう感じ、どう考えるであらう。米國人は此『深まり行く日米の危機』を讀んで、どう感じ、どう考えるであらう？。

是で果して日米の親善が保てるであらうか？。戰爭が避けられるであらうか？。

然も日本の著者も、米國の著者も、口を揃へ、筆を合して、

日本は戰爭を好むものではない。米國は戰爭を欲するものではない。然しそこに大なる戰爭の危險が横わつて居る。之を防ぐ爲めには、海軍の充實が必要である、航空力の充實が必要である。

と結論づけて居るのである。

# 霹靂の滿洲事變

五年の間、全世界を掩ふた戰雲が漸く收まり、勝誇つた聯合國は、慘敗の獨逸を俎上に乘せて膾にせんか、炙にせんかと、ベルサイユ評定の眞最中に於て、早くも日本は第二の獨逸と云ふ聲が何處からともなく擴がつた。

第二の獨逸とは、獨逸文化の相續者と言ふ意ではなく、侵略慾に燃ゆる軍國主義獨逸の繼承者と言ふ意味であつた。

『日本恐るべし』の著者デヴイス大佐は其著書に於て

『彼(日本を指す)は世界大戰に名目だけ參加して、何れかと云へば、引き止められた客が御馳走の出具合で帽子をとつて歸らうとして居る樣な態度で聯合國に付いて居た。それにも拘らず平和會議の席上では最上の美饌を要求したものである。』

と言つて居る。之れは必ずしもデビイス大佐ばかりの觀想ではなく、當時巴里に集つた多くの外國人の懷ける感情であつたらしい。





歐洲戰爭に參加した國の中で、金儲けをしたのは日本と米國とである。米國は參戰後、儲けた金の大半を戰費として吐き出してしまつたが、日本は其儘銀行の金庫にしまい込んだ。惡錢身に付かずと云ふ譯でもあるまいが、之も戰後の財界反動に引き續く大震災で、大部分は灰になつてしまつたらしい。

歐洲戰爭では、獨、墺、露の三大國は沒落し、英、佛、伊の三强國は疲憊し、敵も味方もへと〳〵になつた。其間に於て日本は幾十億圓の現ナマの外に舊獨領南洋諸島の委任統治、西比利亞出兵を種に北樺太の利權獲得、對支二十一ケ條の要求など、相當美味い汁を吸つて居る。

御蔭で日本は世界五大國の一となり、國際聯盟の常任理事國となり、英米佛伊と對等の地位に昇り、世界は最早日本の同意なくして國際間の何事をも決定し得なくなつた。

三百億圓の戰費を使ひながら。而も一エークルの土地も、一弗の償金も取らず、大いに公明ぶりを發揮した米國のデヴイス君が燒餅交りに嫌味を言ふのも不思議ではない。

ベルサイユ會議以來烏兎早々十五年の歲月が流れた。人の噂も七十五日で、日本は第二の

獨逸との世評も、何時しか人の口から遠ざかつた。華盛頓會議に於て日本は、佛伊の先輩國を抜き、五、五、三の比率を以て英米に次ぐ世界第三の海軍國となつた。其長足の進歩、駈足の發達は、恰も歐洲諸國が歐羅巴と云ふ狹い池の中で、互に餌を爭つて居る間に、日本は亞細亞と云ふ廣い海の中で、唯一人自由に發育した觀がある。

四千億圓と云ふ莫大な戰費を大砲の煙と化し、一千二百萬と云ふ多數の人間を塹壕の底に埋めたる、歐洲大戰に於ける破壞の亡魂は、戰後約十年を經て、漸く其傷ましき姿を世界の經濟界に現はした。戰後疲憊の歐洲諸國は言ふ迄もなく、萬年景氣を誇りたる米國でさへも職を失ふて食を得ざるもの數百萬に達し、多年世界金融の總元締を以て自ら任じたる英國すらも、金本位制の停止を斷行するなど、世界は悲鳴を上げて之が對策に惱んだ。大きな波はど其打返しは、遲くてそして大きいものである。

資本主義沒落の瑞兆として、マルキストは赤い笑ひを見せたであらう。

歐米諸國が不景氣對策に頭を惱ませる際、突如として東洋の一角に起りたる滿洲事變は、恰も晴天の霹靂の如く、世界の衆目を聳動せしめた。





削除又か？

日支開戰？。世界大亂？。

日本國民も初めは寢耳に水と驚ひたが、次の瞬間には、軍部より發する我軍事行動の成功に有頂天となつた。

日本政府は對外關係上、困つた事が起つたと思つたらしいが、最早手の付け樣がない。唯軍事行動に對する外交上の尻拭ひに悶殺されて居た。

全國の新聞は事實的に軍部の統制下に置かれ、盛んに戰爭氣分を宣傳して、國民の血を愛國的に沸ぎらしめた。

駐滿軍の喇叭の聲の儘に、日本全國たゞ譯も分らず、踊り廻つたのである。

滿洲事變の突發は、折から開會中の國際聯盟總會に大衝動を起さしめ、直に總會の決議を以て、日支兩國に對し事件の擴大を防止すべき注意を喚起した。而し聯盟の空氣は、日本の行動に對して不滿と不安とを抱ける事は明かに窺はれた。

聯盟の警告と、帝國政府の聲明とに拘らず、軍事行動は益々擴大し、錦州空擊では聯盟及び米國の對日空氣を著しく惡化せしめ、北滿進出では對露關係を甚だしく緊張せしめ、日

本に對する非難の聲は、全世界の言論界に滿ち滿ちた。

或る者は眞正面から日本の侵略政策を攻擊し、或る者は滿洲にある日本軍の無統制を以て文明國の軍隊にあるまじき事と非難した。甚だしきは日本の行動を以て、計畫的强盜行爲とさへ叫んだ者もある。

斯くて世界の對日世論は益々惡化して、終に十月二十四日の聯盟理事會に於ては、日本を除く理事國全部の一致を以て、日本軍の原地撤退の決議を見るに至り、所謂十三對一を以て日本は國際聯盟、否、全世界と正面に對立する事となつた。

併し日本は、十三對一を以て、聯盟規約の全員一致に非ずとの法理論を楯に採り、決議服從の義務なしとて、强力に突刎ねた。

最後の腹の決まらぬ聯盟の腰は碎けて、日本の頑張りは効を奏した。

世に被告者の同意を得ねば判決が出來ぬとせば、之れ程無權威な、滑稽な裁判はない。けれども幸ひに國際聯盟は、裁判所でもなければ、日本は被告でもなかつた。だが之れが爲日本と聯盟との對立は益々尖銳化せざるを得なかつた。





聯盟側は國策戰爭禁止の不戰條約と、支那領土保全の九國條約とを以て日本を責めた。

日本は滿洲に於ける權益擁護と、居留民保護の爲めの治案維持とを以て、滿洲に對する聯盟の認識不足を詰つた。

滿洲事變が紛糾を極むる最中に、亦も突發したのが上海事變である。滿洲の僻陬と違ひ、世界有數の國際都市であるだけに、世界は一層驚倒した。

日本に對する世界の疑惑は益々深まり、對日經濟封鎖の聲も高まつた。駐日外交官の一齊引上も叫ばれた。

日本に於ても負けては居らず、聯盟脫退論が學者の口から唱へられたり、大新聞によつて叫ばれたりした。

國際聯盟は事件の重大性に鑑み、支那の要請に依つて臨時總會が招集せられた。會の空氣は依然として日本に冷やかである、日本の爲めに辯護の勞を採る國は一つもなかつた。秘密理事會に於ける對日攻擊は隨分猛烈であつたらしい。

總會の結果は、現地調査の爲め、英米獨佛伊の五ケ國委員より成る支那調査團が設けられ

且つ十九ケ國委員より成る擴大繼續委員會が作られた。

繼續委員會は日支紛爭事件を、聯盟規約第十二條より第十五條に移す事を決議した。日本は第十五條を滿洲問題に適用する事に反對を聲明し、投票權を放棄したので、十九對一の孤立を再びする事だけは免れた。

上海事變は外國人環視の下に行はれたるが爲め、日本軍の勇武を世界に示すと同時に、日本人の〇〇性をも世界の前に暴露した。外人に依つて撮取された寫眞と云ふ文明の利器が、世界の對日感情を害した事は決して少くはないであらう。

滿洲に於ける日本の軍事行動の目的は、最初は鐵道附屬地の防衛から、次は在留邦人の生命財產の保護に、最後は治安維持の爲め匪賊討伐にまで進展し、權益擁護から生命線の確保に迄發展した。而も日本政府は繰返し〳〵、支那の領土保全、門戸開放、機會均等等を聲明して居る。

日本人として日本の聲明を見れば、日本が正しいと思ふであらう。支那人として支那の言ひ分を聞けば、支那が正しいと思ふであらう。是に於てか第三者の判斷が、善惡と正邪とを





決する。善も、惡も、正も、邪も、神の命令でもなければ、學問の眞理でもなく、唯時の道德の基準によつて決せられるのである。

然らば道德の基準とは何か？

それは時代的常識と地方的慣制とによつて作られた社會通念である。孔子の所謂十目の見るところ、十指の指さすところが即ち夫である。故に昨日の善必ずしも今日の善でない。東の正必ずしも西の正でない。

例へば封建時代の善であつた仇討も、今日では法律上の罪惡である。

日本に於ては邪と憎まれて居る共產主義も、露西亞にをいては正と尊ばれて居る。

此意味に於て十三對一は何を物語るものであらう。

だが最早や、是非の問題ではなく、死活の問題である。

理屈の問題ではなく、實在の問題である。

損德の問題ではなく、意地の問題である。

そこに交讓の妥協がなければ、唯實力の鬪爭があるのみである。

日本は、國際聯盟は、米國は、之に對して如何なる決心を有する？。

經濟封鎖か？。

聯盟脱退か？。

滿洲における日本の積極的軍事行動に對し、支那は隱忍して徹頭徹尾無抵抗主義をとり、國際聯盟を動かして日本に當らしめた。之をしても所謂以夷制夷と云ふのであらうか。夫とも亦聯盟の精神を尊重して、平和に忠實とでも云ふのであらうか。何れにしても國際聯盟は弱少國にとりては決して邪魔者ではない。反對に强大國にとりては、眼の上の瘤とも見られる。

斯る間に滿洲に新政府が建設せられ、宣統廢帝溥儀氏を執政に擁立し、滿洲國の獨立を宣言した。

支那は滿洲國を以て日本の陰謀と、教唆と、支持とによる僞國家となし、其獨立を承認しない。

世界は滿洲國の獨立を以て、支那の領土と行政權の保全を保證する九國條約に反するもの





として、日本の行動を疑つた。

日本は列國の誤解を解くため、滿洲の獨立は滿洲住民の自決に依るものにして、日本は何等これに關與せざる事を聲明した。

凡そ今度の事變位、各國の聲明の多い國際問題は曾てあるまいと思はれる。日本の聲明、支那の聲明、國際聯盟の聲明、米國の聲明、と正に聲明の中毒！。流石に宣傳の時代であると共に大衆獲得の時代ではある。

滿洲國の獨立が支那の云ふ如く、日本の陰謀教唆によらずとするも、少くも日本の軍事後援の下に立つて居る事だけは非認する事は出來ない。

二十年前サラゼオ街頭、一青年の放ちたる二發のピストルは遂に歐洲戰爭を卷き起した。

昭和六年秋滿鐵線路三メートルの爆破は果して何處迄發展するであらう？

臨時國際聯盟總會で決定したる支那調査團の一行は既に現地調査を終つて、今や報告書の起稿中である。寶が出るか、蛇が出るか、報告書の內容如何によつて、聯盟の態度が右か左かに決するのである。

滿洲事變に對する世界の輿論、滿洲の國際的地位、滿洲國獨立の眞相等を、冷靜に、虛心に考へたなら、調査團の報告なるものが、必ずしも日本の處期と合致するものではない事は相想するに難くない。

然るに日本の衆議院では、全員一致を以て、滿洲國の速かなる承認を議決した。之は日本全國民の意思と見らるべきものである。

日本が滿洲國を承認して、支那が承認しなかつたなら、その結果はどうなるであらう。支那より見れば滿洲國は明かな反逆國である。支那は當然これに對する討伐權を持つて居る。支那が滿洲國討伐軍を滿洲に派遣した時、日本はこれを如何に處置するであらうか。若し日本がこれを阻止した場合は、重大なる支那の內政干涉となるかも知れない。支那は更めて國際聯盟に訴へるであらう。

滿洲國の正式承認が、支那の領土保全の九國條約に反くや否やは、議論の存する問題である。日本は九國條約に反しないと解釋して居る。米國及び國際聯盟は、果して如何に解釋するであらうか。





其解釋が違つた場合、日本は條約違反國、條約破棄國たる責を免れ得るであらうか。それとも亦獨逸宰相ベートマン・ホールウエツヒに倣ひ、條約を以てペーパー・オブ・スクラップと蹴飛ばす積りであらうか。

併し日本の國論は、議會の決議を初めとし、滿洲國の即時承認說によつて風靡され、殆んど一の反對論も聞かない。而して即時承認の最も强硬なる主張者は陸軍である。

滿洲問題に關する限り、日本政府は全く陸軍の指導の下にある。南滿鐵道總裁すらも、陸軍の御意を伺はねば任命が出來ない程に、政府は軍部に對して遠慮して居る。

されば日本政府の滿洲承認は只時期の問題である。機會のある每に、寧ろくどいと思はれるほど、不必要と思はれるほど、あれ程頻繁に、あれほど明確に、內外に聲明して置きながら何の面下げて今更中止が出來やう。政府も、軍部も、國民も、最早や退くことの出來ない背水の陣頭に立つて居るのである。併し前には相當嶮しい斷崖が峙つて居る。

# 背水の滿洲國承認

國際聯盟が斷乎として支那を抑へ得ず、日本を制し切れず、日本軍の原地撤收といふ時効に懸つた決議案を、いつまでも擔ぎ廻つて、優柔不斷、踏躇逡巡、悠々緩々として支那調査團を派遣せる間に、事變は擴大又擴大して、北滿に延燒し、上海に飛火し、遂に滿洲國の獨立とまで進展した。

滿洲國の獨立に對し、日本は早くも新國家承認の決心を內外に聲明し、無爲無能の國際聯盟をして、更に目を廻さしめた。

日本は米國の反對に頓着せず、國際聯盟の意向を顧慮せず、遂に斷乎として滿洲國の承認を正式に聲明した。日本に關する限り。滿洲は最早支那領土の一部ではなく、支那と對等の立派な獨立國となつたのである。

『斷じて行へば鬼神も避く。』

『小田原評定は戰爭に訴へず。』





之が滿洲問題に關して國際聯盟に對する、日本軍部の指導精神であるらしい。

日本の滿洲國承認は國際聯盟を驚愕せしめ、米國を憤慨せしめ、支那を悶殺せしめた。

滿洲問題は最早日本と支那との問題でなく、日本と國際聯盟及び米國との問題に移つた。

國際聯盟及び米國は、日本の滿洲國承認に對し如何なる態度を採るであらうか。

雨か、風か、雪か、將嵐か。

東京を蔽ふた暗雲は、ジュネーヴの空からワシントンの空に迄擴がつた。

雷霆裂けて天地碎けるか。妖雲散じて麗陽輝くか。不安と恐慌との氣は、今や全世界に漲つて居る。

大なる成功は大なる冒險から生れる。

一攫千金の樂しき夢の蔭には、沒落の現實の悲哀が待つて居る。

乾坤一擲の大業、成れば天下を取り、敗れば屍を曝す。日本の滿洲國承認は、全世界を敵に廻しての大芝居である。成れば世界を支配し、敗れば國際の管理となる。國家存亡興廢の分岐點！。右地獄道、左極樂道。日本は今單身孤行三途の河原に立つて居る。

歐洲大戰の獨逸には、尙ほ二三の興國があつた。一九三二年の日本には、全世界只一の同情國もない。世界何れの國もが、未だ曾て經驗した事なき大國難である。

個人と國家とを問はず、苟くも大事を爲すに當りては、最善の場合を期待すると同時に、最惡の場合をも考慮せねばならぬ。

日本は斷乎として滿洲國の承認を行つた。果して鬼神も避けるであらうか？。

國際聯盟は亦しても評定に耽つて居る。果して戰爭に訴へないであらうか？。

軍部の指導精神が果して當るか、當らぬかゝ運命の分れ途である。

滿洲國承認に對し、日本にとりて最善の場合は、聯盟及び米國が、無條件に日本の行動を是認する事である。然しながら斯の如きは、相手國たる支那の存在を全然無視するもので、假令混亂狀態であらうと、無政府狀態であらうと、支那が獨立國として國際聯盟の一員である以上、聯盟は否でも、應でも、支那の言葉にも耳を借さねばならない。のみならず今更日本の行動を無條件に是認することは、之までに於ける聯盟の行動決議に照し、聯盟自身の威信を損するものとして、到底聯盟の爲し得ざるところであらう。





最善の場合が望まれぬとせば最惡の場合は如何？　聯盟が日本の行動を以て、聯盟規約に違反するものとなし、日本を聯盟より除名して經濟封鎖を行ふ事である。併しながら斯の如きは、當然日本對世界戰爭を惹起するものであつて、歐洲に於ける國際關係の機微と、經濟狀態の難澁とは、戰爭の局に當らねばならぬ聯盟の大國をして、經濟封鎖の決議を躊躇せしむるであらう。

既に最善の場合でなく、亦最惡の場合でもないとすれば、結局は中間の彌縫策に出づるの外はない。

理論に徹底せず、實行に徹底せず、中途半派の誤謬化しに依つて、一時を糊塗するものが彌縫策である。だから彌縫策には千差萬別、種々樣々の場合がある。

滿洲事變の結果として、或は延長として、次の樣な場合も起らぬとも限らない事を、國民は覺悟せねばならぬであらう。

日本の滿洲國正式承認によりて、滿洲問題は一方的に解決せられ、支那調査團が數ケ月間現地について苦心調査したる報告書も、今では滿洲事變の經過を語る一片の歷史的記錄に過

ぎなくなつた。

國際聯盟に於いては日本の行動は、九月三十日の總會に於ける『滿洲事變不擴大』の決議を破つたとの意見が高まつた。

曩に日本の行動を以て、九國條約の條文並びに不戰條約の精神に背くものとして、抗議的聲明を發した米國は、氣味惡き沈默を守つて居る。

支那は日本の滿洲國承認を以て支那主權を侵害するものとして、又々國際聯盟に訴へた。

斯くて、日本の滿洲國承認に關して論議する爲め、國際聯盟理事會が開かれることゝなつた。そして幾度かの會議に於ける議論の要點は、

イ、滿洲國の獨立と九國條約との關係如何。

ロ、聯盟は日本の滿洲國承認を是認するや。

ハ、支那が滿洲國の獨立を承認せざる時聯盟の對策如何。

ニ、日本が滿洲國承認を取消さざる場合聯盟の處置如何。

であつた。豫てより日本の行動に對して極度の反感を有せる小國代表は、秘密會を幸ひに





日本に對する非難攻擊の毒舌を振ひ、何れも、日本は歐洲が經濟難に惱み、支那が大洪水に苦しめるを好機とし、不信にも火事場泥棒を稼いだものであるとなし、日本をして滿洲國承認を取消さしむべしと唱へ、若し日本にして聯盟の勸告に從はざる場合は、或は規約第十六條に依り經濟封鎖を斷行すべしとか、或は日本を聯盟より除名すべしと極言するものもあつた。大國側は流石に責任を重んじ、未だ具體的意見を發表せざるも、日本の行動に慊らざる事は、日本代表の演說に對し一人の拍手する者なきに徵しても、明かに察知せられた。

秘密理事會は幾たびか開かれたが、何時も結論に於て、日本が滿洲國承認を取消さゞる場合、聯盟は日本に對して經濟封鎖を斷行するや否やの問題に至ると、大國側の尻込に依つて決を取ることが出來なかつた。

日本はとつちめてやりたし、と言つて經濟封鎖の勇氣はなし、と言つて此まゝ泣き寢入も出來ず、聯盟理事會は今や三叉路に立つて途方に暮れた。

幾度か會議を繰返したる後、聯盟理事會は小國側の强硬論を抑へて、漸く次の樣な妥協折衷の勸告案が作成された。

一、日本は滿洲國の承認を取消すこと。

一、支那は其の宗主權の下に滿洲自治國を認むること。

之に對し日支兩國代表は各本國政府に請訓の上、日本代表は、

『滿洲問題は飽まで日支直接交渉に依つて解決すべきものにして、聯盟の干與すべきものにあらずとの當初の主張を固持し、聯盟の勸告に應ずる能はざる旨』

を聲明した。

支那代表は

『滿洲問題に關しては。中國は日本に對し寸毫の讓歩を爲すの理由と必要とを認めざるも、世界平和の爲めに曲げて聯盟の勸告に應ずる旨』

を宣明した。

一方は聯盟の勸告を拒絶し、一方は聯盟の勸告に聽從するとせば、聯盟の空氣が如何に動くかは想像するに難くない。

聯盟理事會は事件の重大性に鑑み、之を聯盟總會に移した。聯盟總會が理事會の勸告案を





當事國を除く滿場一致を以て採用するであらうことは、聯盟内の空氣と從來の前例とに照らして明かである。

一年間に亘りて世界の視聽を騷がしたる滿洲問題も、解決か、爆發か、愈々最後の幕の開かるべき時が來た。

宣傳戰、買收戰、世界言論界の重點は、今や正に此の問題の上に懸つて居る。

日本が飽迄滿洲國の承認を取り消さぬ時は何うする?。

支那が飽迄滿洲國の獨立を承認しない時は何うする?。

是までの聲明や決議に對する國際聯盟の威信を何うする?。

九國條約、不戰條約の手前、米國の面目を何うする?。

日本、支那、國際聯盟、米國を役者とする滿洲劇は、いよ〳〵之から大詰の舞臺に入るのである。

悲劇か、喜劇か、將た劍劇か。

幕の外には、世界の觀客が胸をとゞろかして、詰め掛けて居る。

# 國際聯盟の論戰

世界の大戰か、將た平和の解決か、日本の存立か、將た滅亡かを決する、歴史的記錄に殘るべき、滿洲問題最後決定の國際聯盟總會は、今日ぞジュネーブなる聯盟會館の大廣間に於て開かるゝ事となつた。世界の大政治家とかは此一室に集中し、傍聽席は立錐の餘地もなき滿員である。

會議は豫定の如く進行し、今ぞ議長の指名により立ち上つた日本代表は、左の要領の演說をなした。一言一語をも聞き洩らすまじと、滿場水を打ちたる如く、聲を呑み、耳を聳てゝ居る。

我が代表も亦一言一句を忽にせじと、莊重の態度と、明朗の音聲とを以て、草稿片手に徐ろに口を開いた。

『聯盟規約第十五條により滿洲問題を處理する事に對しては、日本帝國政府の始めより同意せざるところにして、本代表は帝國政府の承認せざる會議に列席するの義務を有せず、





且亦斯の如き會議に於て作製せられたる勸告に對して、帝國政府は之を受諾する責任を有せざるものである。然るに本代表が今日此處に立ちたる所以のものは、唯單に事件に對する帝國政府の所見と所信とを披瀝せんが爲めにして、決議に對する表決に參加する爲ではない事を豫じめ了承せられたい。』

と冒頭し、更に語を繼ひで、

『日本帝國政府は滿洲國に對する承認を以て、滿蒙の事態を安定し延いては極東に於ける恒久平和を招來する唯一の解決法と認むるものである。抑も近來極東に於ける國際關係惡化の主因が、支那の混亂狀態に加ふるに過激思想の影響を受けたる排外的革命外交の遂行に存することは何人も爭ひ難き處である。然してこれが爲め最大の害を蒙るものは我帝國であるは云ふ迄もなく、他列國も亦忍ぶ可からざる侮辱と堪えがたき災害とを蒙り來りたる次第である。然るに斯くの如き事態に於てその匡救を國際聯盟其の他の平和機關に求むることの困難なるは、支那に權益を有する列國の體驗したる處であると信ずる。

日本帝國は二十餘年の久しき間、極度の自制と忍耐とを以て、支那が穩健なる方法に依り

て國運を挽回せんことを衷心希望し來りたるに拘らず、支那は毫も我が國の寛大なる態度に應ぜんとするの誠意なく、益々我が國に對する輕侮と排斥とを加へ、遂に我が國の生命線たる滿蒙に於て、彼の九月十八日事件の發生を見るに至り、我が國に於ては敢然として正當防衛の行動に出ずるの外はなかつたのである。然るに我が國の行動を以て不戰條約に違反するものとの說を爲す者あるも、同條約は斯くの如き場合に於ける自衛權の行使を制限するものではない。即ち同條約は締約國が其の判斷に基づき、自國の領土及び一切の權益に對する危險を防守する爲め、必要と認むる處置を取る事を禁止しては居らぬ。又右自衛權の行使は行使國の領土外に及び得るものなること明かである。即ち帝國の行動は從來他の列國が同樣の場合に取りたる處置と其の本質に於て異る所は無いのである。

又一部に於ては滿洲新國家の成立を以て我が軍事行動の結果となし、之に對する責任を日本帝國に歸せんとする者あるも、斯の如きは滿洲の眞相を知らざるの言である。滿洲國の成立は多年に亘る支那本部の內亂に反對し且つ張家の惡政を憎惡する滿洲の人士の手に依つて行はれたもので、同地方が支那本部に對して有する地理的歷史的及び住民心理上の特





異性を背景とせる獨立運動の結果に外ならないのである。斯くの如くにして成立したる既存の新國家に對する帝國の承認が、九國條約に違反すと主張する如きは甚だ不可解なる議論にして、九國條約は支那に於ける分離作用即ち支那の一地方の住民が自己の發意に依つて獨立國を建設する事を禁止するものではない。從つて帝國の滿洲國承認は斷じて同條約の規定に抵觸するものではない。

日本帝國は滿蒙に對して何等領土的野心を有せざる事は屢次帝國政府の聲明したる所である。帝國政府が滿蒙問題の解決に關し最も重を置く所は、第一に其の住民の正當なる要望が滿たされ且つ帝國の權益が確保さるゝことゝ共に、苟くも舊來の排外的施設の再現を防止して、同地方に內外人安住の樂土を築き、以て滿蒙自體の安定は勿論、進んで極東に於ける恒久的平和の招來を期すること、第二に感情論又は抽象論を廢し、滿蒙に於ける現實を基礎として問題の解決を期すること、の二點である。

然るに國際聯盟の解決案たる滿蒙に於ける支那の宗主權を認めんとする如きは、是れ一時を糊塗するに過ぎずして斯くの如きは窮極する所九月十八日事件以前の狀態を繰返す結果

に終る可きことは、帝國多年の經驗に顧み何等疑ひのなきところである。これを以て斯の如き解決案に對しては日本國民は斷じて贊成するものでないことを玆に言明するものである。（帝國議會に於け內田外相の演說摘要）

尙又滿洲新國家の成立に依り、同國內に於ける帝國軍隊の配備は帝國と同國との協定に依れるものにして、從つて昨年九月三十日國際聯盟理事會に於ける、日本軍隊の鐵道沿線に撤退の決議は、當然事實的に消解したるものとし、該決議に對し日本帝國は爾後其の責めに任ぜざることを併せて聲明する。』

日本代表の演說に對し、一人の拍手を以て之を迎ふる者もなく、各國代表は石の如く沈默して居る。傍聽席には喃々の私語や、故意の咳拂ひや、輕き笑聲すら聞えた。

日本代表の演說終るや、支那代表は議長の指名に依りて立ち上り、稍蒼白の面に激越の語調を以て左の要領の演說を爲した。

『昨年九月我が中華民國の領土滿洲に於て行はれたる日本軍隊の不法なる攻擊に對し、中國政府は世界平和の爲め正當防衛の權を犧牲とし、國際聯盟の精神と規約とを尊重して事





件の解決を聯盟に附託した。爾來國際聯盟が事件の正しき解決の爲に執られたる努力と誠意とに對し、本代表は中華民國の名に於て深甚の謝意と敬意とを表するものである。

余はこれ迄幾多の國際會議に列したるも、今日始めて日本の同僚の爲したるが如き獨斷的なる演說を聞く事を得たるを欣快とする。』

と劈頭先づ喧嘩腰の毒舌を飛ばし、更に語を繼ぎて、

『滿洲事變が如何にして發生し、滿洲國なるものが如何にして成立したるかは、種々の報告と幾多の證跡とに依り、各國代表各位の既に熟知せらるゝ所であるから、最早や更めて述ぶる必要を認めない。余は先づ日本の同僚の演說に對して反駁し次に中國政府の所信を述べんと欲するものである。

先づ第一に日本は滿蒙を以て自己の生命線と稱へて居る。生命線の何たるやは解釋に苦しむも、恐らく之なくしては生存の出來ない事を意味するものであらう。他國の領土に據らざれば自國の生存が出來ぬ樣な國家は、獨立國としての資格を缺くものと言はねばなるまい。若し自國の生命線なるが故に、勝手に他國の領土を侵略し攻擊し得るならば、米國は

生糸關係に於て、濠洲は羊毛關係に於て、夫々日本の經濟的生命線である。米國が日本の生糸を買はぬ時、濠洲が日本に羊毛を賣らぬ時、日本は生命線たるを理由とし、米國を侵略し得るや、濠洲を攻擊し得るや。

日本は滿蒙に於ける張家の惡政を云々するも、滿蒙は儼然たる中華民國の領土である。其の內政に對しては善惡共に他國の干涉を容るべきでない。若しこれを爲し得るとせば、我等は朝鮮に於ける日本の施政に對し、言ふべき多くのものを持つて居る。日本は亦中華民國の秩序の混亂を非難して居る。併し幸ひに我が中華民國に於ては、〇〇の〇〇が白晝〇〇に〇〇して〇〇を〇〇する程に秩序の亂れて居ない事を、此の席上に於て世界に報道するの機會を與へられたる事を、深く日本の同僚に感謝するものである。

日本政府は滿洲國の獨立と其の承認とが、極東に於ける恒久平和を招來する唯一の解決法であると、驚くべき獨斷の言を述べて居る。滿洲の獨立と日本との關係は、天知る、地知る、世界の正しき人間が知つて居る。斯くの如き國家を承認して中華民國より分離せしむることは、中華民國の斷じて承認同意せざる所で、中國々民は永久に日本を以て盜國の仇





敵とするであらう。これ恒久の平和にあらずして、恒久敵對の種を蒔くものに非ずして何ぞ。他人の頭を打つて永久の親睦を計るなどは、我が中國に於ては未だ曾て聞かざるところである。

次に日本は又滿洲の獨立は滿洲住民の自己の意志であるかの如く述べて居る。果してそれが日本の言ふ如く、民族自決の精神による滿洲住民の意志であるや否やは、日本武力の壓迫の下にある滿洲に於ては知る事が出來ない。若し公正なる國際聯盟管理の下に住民の一般投票により、獨立が彼等の眞の意思であるならば、中國は之を承認するた吝なるものではない。

日本同僚の演說に於て最も驚くべき放言は、九國條約の締約國は自國の判斷に基づき、自衛權の行使は外國領土に及び得ると云ふ點である。若しも斯くの如き原則が國際的に是認せらるゝとせば、日本の判斷に依つて、昨日滿洲に於て行はれたと同じ行爲が、同じ名目の下に同じ手段を以て、明日は布哇に於て、比律賓に於て、明後日は印度に於て、濠洲に於て行はれるであらう。斯くても世界の平和は保てるであらうか。國際聯盟並に九國條約

及び不戰條約の締約國は、果して日本の言を是認するであらうか。

次に余は日本の同僚が言及せる排日問題に就いて一言せん。元來中國に於ける排日運動は日本の不法行爲、例へば二十一ヶ條問題の如き、或は今回の事件の如きに對して抗議する中國民衆の愛國心の發動によるものにして、中國政府の關知する所ではない。世界何れの國の政府と雖も、其の國民の適法なる愛國運動を抑制することは出來ぬであらう。外國品を買ふと買はぬとは、國民の絶對自由で、中國人民の好まぬ日本貨物を排斥することは中國人民の權利である。

最後に、日本の同僚は聲を大にして、中國が日本の權益を侵害したと言つて居る。抑も滿洲に於ける日本の權益とは何ぞや。それは歐洲戰爭のドサクサに紛れ、日本が暴力を以て支那に强要した二十一ヶ條に依るものではないか。暴力の强制の下に締結せられた條約が有効なるや否やは疑問である。中國政府はこれが正邪を判明する爲め、國際仲裁裁判に附するの覺悟を有するも、日本は凡ての他の文明國が參加せるにも拘らず、唯獨り仲裁々判應訴義務を受諾しないではないか。日本は何を恐れて世界の正しき審判の前に立つ事を拒





むのであるか。

以上を以て大體日本同僚の演說に對する余の駁論を終つた。余は中華民國の代表として中國政府の所見を簡單に述べたい。

抑も滿洲事件に關し中華民國は唯一の非違をも犯して居ない。從つて我が中國は事件解決の爲めに寸毫の犧牲を拂ふべき理由を有せず、國際正義の名に於て、滿洲を事件發生以前の儘に復舊を要求するの充分なる權利を有するものである、と言ふ事を嚴格に聲明するものである。併しながら事件の解決を聯盟に附託したる以上。滿洲に於ける中國主權の毀損せられざる限り、世界の平和と人類の幸福との爲め、中華民國は忍び難きを忍んで聯盟の勸告に應ずるの用意を有するものである。』(支那所論綜合)

支那代表は毒舌の中に皮肉を交へ、約一時間半に亘る長廣舌を振ひたる後、小國側代表の割れる樣な拍手の裡に、凱旋將軍の如く悠々として席に復した。

聯盟理事會が苦心慘膽漸くにして捏つち上げたる解決案も、日本の反對に依つてあはれ無効に歸した。豫じめ斯くあるべしと期して居た議長は。更に第二の決議案を提出した。

一、國際聯盟は滿洲國の獨立を認めず。

一、昨年九月三十日に於ける聯盟總會決議は(註、日本軍の原地撤收)は尙効力を有す。

日本代表の棄權したる外、滿場一致を以て、右決議案は可決された。

日本は愈々國際間に孤立した。併し國際聯盟は日本に對して何等の制裁を加ふることもせず、日本も亦聯盟脫退の聲明もせず、世界を驚かした滿洲問題も、恰も幽靈の如く有耶無耶の裡に消解した。泰山鳴動して鼠一匹も出ないとは此事である。

けれども問題は之で終結したのではない。支那代表は再び起つて更に次の樣に述べた。

『中華民國は誠心誠意世界平和の爲に大なる犧牲を忍んで、聯盟の勸告を受諾するの用意を有したるも、日本の反對に依りて解決案の無効となりしことを遺憾とする。中華民國は中國の領土たる滿洲の叛逆者に對し、隨時討伐の權利を有することを爰に更めて正式に宣言するものである。もし之を妨害する國あらば其の何國たるを問はず、中國の內政に干涉する侵略者として、之に對して正當防衛の權利を行使するであらうことを、世界の前に儼乎として聲明する。』





斯くて議長は、日本政府が聯盟決議の精神を尊重せんことを望む旨を述べ、沈痛なる語を以て聯盟總會の閉會を宣した。

事件發生以來、日本は聯盟の足並揃はざるに付け込み、唯押の手一點張りで、押して押して押しまくつた。初めから浮足立つた聯盟は、土俵際の踏ん張りも、打つちやりも見せず、たゞずる〳〵と土俵を割つて仕舞つた。だが此の相撲一番勝負ではあるまい。

どこかで

『世界景氣の回復を待て！』

と叫んだ者がある。急霰の樣な拍手が起つた。

尋で又

『千九百三十五年を待て！』

と叫んだ者がある。暴風の樣な喝采が起つた。

世界の景氣は何時回復するであらう？

千九百三十五年とは何を意味するものであらう？

# 來るべきものが遂に來た

世界に孤立した日本が滿洲の經營に苦心慘憺たる間に、世界の景氣は徐々に回復しつゝある。滿洲事變に際し、海軍力不足の爲め、日本に對して强壓政策を採り得ざりし米國は、一九三二年國際聯盟主催の軍縮會議に提出したる、陸海軍々備の三分ノ一天引案の容れられざりしを好機とし、倫敦條約に規定せる最大額の海軍充實に着手した。其の完成期は一九三五年である。

滿洲事變は偶然にも、支那國民と支那軍閥とに覺醒を與へ、彼等は多年の內爭を捨てゝ、一致協力國難に當らん事を誓ひ、臥薪嘗膽以て東北失地の回復を期し、歐米諸國の後援を得て、現代的國軍の建設に努力した。其建軍綱領に次の樣に言つて居る。

『國防施設に於て我中華民國は、世界の列强就中中國の仇敵たる隣邦日本に對し著しく劣勢の地位にある。今に於て彼に劣らざる陸軍及び海軍を建設するには多くの年月と多大の經費とを要し、時勢速急の用に應ぜざるのみならず、維新多端の今日到底其の費に堪へ得





ざる所である。幸ひに今や國防施設の革命期に際會し、國防の主力は陸軍及び海軍より空軍に移りつゝある。

中華民國は此好機を逸せず、陸海軍は國內治安の維持に任ずるを以て程度となし、空軍を以て對外兵備の主力と爲すことに決した。我に優勢なる空軍の存するあらば、敵艦百隻舳艫を含むも我沿岸を犯す能はず、敵軍百萬砲銃を列ぬるも我國土を踏む能はず、東北失地の回復の如き蓋し亦難事に非ず。

我中華民國は國土廣大にして鐵道未だ周ねからず、交通尙改善の餘地がある。將來大いに航空事業を振興し、平時にあつては空中輸送によつて交通に資益し、戰時にあつては徵して空軍となす。其經濟的にして、速成的にして、且有効的なる、誠に一擧三得の國防計策である。今後十年にして我中國の航空力は亞細亞の空を制するであらう。』

此方針の下に支那は大いに空軍の建設に力め、米國の資本と獨逸の技術とを容れて着々功を收めつゝある。

飛行機は金さへあれば、一年に千機でも二千機でも製造する事が出來る。搭乘者も亦二年

も稽古すれば、如何なる優秀な操縦者も、偵察者も養成する事が出來る。後進支那の國防方針としては蓋し當を得たものである。

支那の新國防方針は、日本の國防上に極めて重大なる影響を及ぼすもので、日本の百萬噸の軍艦も、三百萬の動員兵力も、優大なる空軍に對しては何の國防力もないことになる。爆彈を積んで南京を發した飛行機は、裕に大阪東京を爆擊することが出來る。

正に日本國防の危機である。

之が對策としては、唯支那よりも壓倒的優勢なる空軍を整備する以外に法はない。

世界第三の大海軍力を備へ、世界の二三を爭ふ大陸軍を有する日本は、更に大空軍を設けなければならなくなつた。

此增大する國防費を如何にせん？　增稅か？　公債か？

海軍を縮小せんか、日米の此危機を如何にせん！

陸軍を縮小せんか、日露の此緊張を如何にせん！

ジュネーブに於て日本が國際間に孤立して以來、日本の海外通商は著しく減少した。





國家の收入は減少して支出は增大する、一面に於て將に日本財政の危機でもある。

國家存榮の爲めの國防が、今や國防のために國家を破滅に導かんとして居る。

併し日本としては今や騎虎の勢ひである。乘り出した舟である。中途で降りることも、引き返すことも出來ない。行く處まで行く外はない。

滿洲事變以來早幾年かを過ぎた。日本對世界の關係は依然として險惡の途を辿つて居る。

滿洲事變並に上海事變の餘波として、日支兩國間には紛爭の絕え間がなく、國民的感情は益々尖銳化するばかりである。

支那の空軍は次第に增勢せられ、今は日本のそれを凌駕せんとする程にまでになつた。

支那空軍の增大と、日本財界の窮迫とは、支那をして滿洲國討伐を決意せしむるに至つた偶々滿洲に於ける支那人排斥問題に乘じ、支那は世界に對し滿洲討伐に關する次の聲明書を發し、直に攻擊の準備に着手した。

『滿洲が中華民國の領土たる事は、歷史的にも、地理的にも、人種的にも、疑ふの餘地なき事實にして、幾多の國際條約によつて實證されて居る。然るに一九三一・二年日本に依つ

て引き起された事變に乘じ、同國庇護の下に、不逞の輩の陰謀によつて滿洲國の獨立を宣言したるも、中華民國は未だ嘗て之を承認したる事なく、滿洲は依然として中華民國の主權下に屬する領土の一部であることは世界の公認する所である。

爾來滿洲國政府を僭する不逞の輩は、日本と通謀して中國の主權を凌辱し、滿洲の治安を紊り、恣に私兵を養ひ、妄りに租稅を徵し、內外住民の康寧を害する事大である。中華民國は一九三二年〇月〇日ジュネーブに於て開かれたる國際聯盟總會に於て、中國政府が特に留保を聲明したる滿洲討伐權により、今回兵を發して、滿洲獨立僞政府を討伐せんとす。

本問題は國際聯盟によつて承認せられたる中華民國領土內に於ける事件なるを以て、聯盟規約第十五條第八項により、國際聯盟より何等の勸告を受くべきものに非ず。從つて我軍事行動を阻害せんとするものは、其何人たると何國たるとを問はず、中華民國に對する侵略者と認めて之を排擊することを嚴格に聲明する。而して之に依つて生ずる總ての責任は當然彼等の負ふべきものである。』





滿洲國の獨立を承認したる日本は、滿洲を以て支那の領土であると云ふ支那の聲明を認容する事が出來ない。殊に滿洲國とは國防上攻守同盟を結べる關係上、支那の滿洲國討伐を默視する事を許されない。日本政府は直に支那の聲明書に對し左の反駁聲明を爲した。

『滿洲國は一九三二年、滿洲住民の自由意思に依つて獨立を宣言し、爾來中華民國の主權の外にある嚴然たる獨立國である事は、炳として事實の明證する所である。民族自決は國際聯盟の精神にして、實にベルサイユ平和條約の基礎をなすものである。中華民國と歷史を異にし、民族を異にし、地理的に隔絕せる滿洲住民が獨立を自決する事は、滿洲民族の神聖なる權利にして、何人も之を阻止する事を許されないものである。

從來屢次帝國政府の聲明したるが如く、滿洲は帝國の存立上極めて重要緊密なる關係を有し、其安寧と福榮とは帝國の最も關心する所である。之を以て曩に滿洲國の獨立を宣言するや、帝國政府は此特種の關係に照し、率先其獨立を承認したるものにして、帝國政府は滿洲を以て中華民國領土の一部と認むる事は出來ない。

帝國と滿洲國との關係の密なる事斯の如く深且大である。滿洲國の治亂は直に帝國の治亂

に影響するものなるが故に、其何れの國たるを問はず、苟も滿洲國の治安を害し康寧を妨ぐる者に對しては、帝國政府は之を默視する能はず、斷乎として排擊の決心を有するものである。而して之に依つて生ずる如何なる結果に對しても帝國政府は其責に任ぜざる事を聲明する。』

滿洲問題が再び蒸し返され、日支の聲明が又々正面衝突を來した。

滿洲は支那の領土であるのか？　領土でないのか？

領土であるとすれば當然支那に討伐權がある。之を妨ぐる日本は內政干涉の不法の誣を免れない。

領土でないとすれば日本の滿洲國擁護は自由である。之を討伐する支那に曲がある。

世界は之を如何に裁判せんとする？

日支兩國の聲明に依つて、世界は又々戰爭の脅威に驚かされた。

併し前回の滿州問題に手を燒きたる國際聯盟は、解決の困難を見越してか、容易に乘り出して來ない。と云ふよりも聯盟の信用と權威の失墜により活動の能力を失つたのである。





曇りに曇つた東洋の空、どうせ一度は血の雨が降らなければ、天氣は回復しないであらうバルカンの低氣壓は、歐洲戰爭で根が拔けた。

やりたい者にはやらすが宜からう、只自分の國に迄血の雨を降らしたくない。

と云ふのが、多くの國の腹らしい。

だが空氣は決して日本にとりて有利でない。

國際聯盟の行動が頗る緩慢なるに反し、米國の行動は甚だ活潑である。日支の聲明に續いて次の意味の聲明書を發表し、問題に對する米國の態度を、極めて直截的に表明した。

『往年東洋に事件發生以來、米國政府は平和の解決を望むため、力めて陰忍謙抑の態度を保つて來た。然るに事件の進展は米國の所期に反し、國際の正義は冒され、世界の平和は將に脅かされんとして居る。

思ふに支那の領土が外國の武力によつて分割されんとする事は、支那領土保全の九國條約に違反し、又武力を以て他國の內政に干涉する事は、明かに國策遂行の爲の侵略行爲にして、不戰條約に背反して居る。九國條約、不戰條約の提案者として、條約擁護の責任を感

する米國は、國際正義と世界平和との爲に、斷じて是等の違反行爲を認容し得ざる事を嚴格に聲明する。」

米國と支那との間に豫じめ協約のあつた事は略ぼ察せらる。

日本國民の輿論は反米反支に沸騰し、全國の都市に於ては對米對支の大示威運動が行はれた。

全國の新聞は一齊に戰爭的に武裝した。流言頻りに行はれ、蜚語盛に飛んで居る。

元老、重臣、閣僚等より成る重大御前會議は開かれた。

亢奮と緊張との中に、不安の氣が全國に滿ち漲つた。

だが、驚くには及ばない。狽てるには及ばない。

唯來るべきものが遂に來たゞけである。

國民の腹は何年か前に既に決まつて居る筈である。



昭和六、三、八
日本対米英
戦争開戦
の今日、之を改
めて再説する
に、現実と
想像とは
雲泥の相
違ある事
すむ。
特に支那事変は、四年半に亘る戦争中也。（一六、三、二朝）

## 遂に火蓋は切られた

戰爭の火蓋は先づ支那に於て切られた。

滿洲討伐軍を乘せたる支那裝甲列車が、山海關を發して滿洲國の領土に入らんとするや、同地駐屯の日本守備軍が之を阻止したので、忽ち日支兩國軍の間に戰鬪が開始せられた。

次の瞬間には優勢の支那軍は、我天津守備隊に對して猛攻擊を開始した。

翌天明には、數十機の支那飛行機が旅順及び大連を爆擊し、我空軍は北平其他を襲擊して各々敵に多大の損害を與へた。飛行機も亦汉方共に多くの犧牲を出し、中にも日本の飛行機は、優勢なる敵機に退路を扼され、甚大の損害を蒙つた。敵の內地深く進擊する飛行機の常に蒙る犧牲である。

斯くて日支兩國は、各々正當防衛上武力行使の止むを得ざる所以を聲明し、宣戰布告を用ゐずして戰爭狀態に入つた。

米國の向背は曩の聲明によつて既に明かである。米國大使は本國政府の訓令により、日本

は支那の滿洲討伐に干渉せざるか、然らざれば、歸國旅券の交付を日本政府に要求した。

日本政府は斷乎として米國の干渉を排斥し、米國大使に歸國旅行券を交付した。

かくて日米國交は遂に斷絶した。

やがて宣戰は公布せられた。

各國は滿洲を以て獨立國と認めない、從つて交戰國としての權利の行使を許さないと云ふ條件の下に、局外中止を宣言した。併しそれは決して嚴正中立でないことは想察に難くない。

局面は遂に落ち付く所に落ちついた。

二十餘年の久しき間、東亞の空に結んで解けざりし暗雲は、遂に裂けて大暴風となり、破れて大雷雨となつた。

太平洋には怒濤澎湃として天に漲り、滿洲支那には血雨沛然として地に溢れんとして居る。

愈々切つて落された日本對米支聯合の大決戰！　龍鬪虎擊の大舞臺は、今や世界の前に展開されんとして居る。

日本に於ては大纛の下に大本營が編成せられ、且つ軍國の大機に參劃する爲め、總理大臣





及び內務、外務、大藏、陸軍、海軍の諸大臣より成る軍事內閣が組織せられた。戰時總動員が令せられ、戰時聯合艦隊が編成せられ、主要都市及び各軍港は臨戰合圍地として戒嚴令が布かれた。

聯合艦隊は出師準備を整へ、第一線部隊は東京灣に、第二線部隊は佐世保軍港に、夫々集中を命ぜられ、約百艘の大運送船は軍隊輸送の艤裝を整へて、門司、宇品、大阪、横濱等に碇泊待命して居る。全國の造船所を動員して、戰艦〇隻、巡洋艦〇隻、其他驅逐艦、潛水艦多數の急造命令が下された。全國の飛行機製造所は晝夜兼業、全力を擧げて製作を急いで居る。

百萬の豫後備兵が召集せられ、全國の兵營所在地はカーキー服を以て埋められて居る。

戰氣は滂湃として全國に充ち滿ちた。

帝國議會は全院一致を以て、政府の戰時對策を絕對に支持すべきことを決議した。

三十億圓の戰時愛國公債は、三日にして募集額を超過した。

指輪、鎖、時計等の、國民の地金獻金は、十日間にして十億圓を突破した。

國民の愛國心は焔の如く燃え盛り、敵愾心は熱湯の如く沸ぎり立つた。

擧國一致、國難打開の叫びは、暴風の如く、全國に響き渡り、皇國安全、敵國退散の禱は津波の如く津々浦々に至る迄流れ行れた。

『最後の血の一滴迄』が全國の青年團に於て、血を以て誓はれた。

全國主要都市には消燈令が發せられた。ジヤズに輝くネオンサイン、銀座のカフエーも、新宿のバーも、今は街頭小暗き死の町となつた。歡樂盡きて哀愁來るの感がないでもない。

正に神武開闢以來未曾有の大國難が來た。

支那に於ては討滿司令部を北平に置き、×××が其總司令長官に任ぜられ、五百臺の飛行機と、外國人を加へて二千人の優秀な飛行士を、北平を中心として集結し、以て滿洲攻擊軍の主體となし、別に新式武器を以て裝備されたる十萬の新鋭軍が、山海關以南に配備され、日本軍の北平進擊に備へて居る。

南京方面に於ても、日本軍牽制の爲め三百機の飛行機が、機首を東に機翼を張つて居る。

支那に在る數萬の日本人は全部本國に引揚げ、明治以來拮据經營、數十年にして開拓した





る地盤は一朝にして空に歸した。

米國に於ては大西洋艦隊全部を太平洋方面に移動し、艦隊の主力は布哇進出の準備を整へて居る。之に依つて英米の間に、軍事的默契の存する事が窺はれた。

また太平洋岸、布哇、巴奈馬運河地帶等に戒嚴令を布き、日本人一切の出入を禁止した。

尙ほ布哇に向つて軍隊、飛行機、軍需品等の大輸送が開始され、哇布産業の爲めに必要缺くべからざる者の外は、十五歳以上六十歳以下の在住日本人男子を、悉く米本國に送致抑留した。

日本對米支戰爭の場合、日本にとりて最も重大な關係を有する國は、英吉利と露西亞とである。

英米同盟せば、日本の海軍は施すに術がないであらう。

露支提携せば、日本陸軍の勝ち目は薄いであらう。

日本作戰部に於ては、各國の利害と國際關係を考察したる上、少くとも戰爭の初期に當りては、英露兩國共に中立を守るものと判斷した。

其他諸國の向背は、日本に對して致命的關係を有するものでなく、何れも中立の態度を採るであらう。併し滿洲事變の當時、國際聯盟に於ける『十三對一』以來の感情の縺れから、日本に好意を有する國は、歐洲の○國位のもので、他は親米でなくとも少くとも反日であることが想像される。

孤立の日本！　無援の日本！

世界を敵とした獨逸には尙ほ、墺太利、土耳其、悖牙利亞の與國と、多くの精神的同情國があつた。

今度の日本には手足纏ひの滿洲國の外には、唯一の與國もない。

其滿洲すらも、住民の大多數は、支那本土から移住した漢民族であるから、日本に取りて餘り信賴は出來ない。

朝鮮の獨立運動も油斷はならない。

唯賴むところは、愛國の血潮漲る六千萬大和民族の、鐵の如き堅き團結ばかりである。

由來、日本の對外的強味は其の民族の單一であつた。即ち有事の際、內を顧みることなく、





國民の全力を外に向け得た點であつた。是れ二千餘年の久しき間、或は地理的に、或は政策的に、國を鎖して小島國內に閉ぢ籠りたる結果、高天原種族も、出雲種族も、蝦夷も、熊襲も、打つて一丸とした日本民族を形成したが爲めである。だが今はさうではない。

歐洲戰爭中、英國は愛蘭の獨立運動に苦しみ、獨墺は波爾蘭民族の反抗心に惱まされた。

朝鮮全國に戒嚴令が布かれ、警備の爲め十萬の軍隊が派遣さるることになつた。

我が大本營に於ける作戰方針の大綱は決つた。

情況判斷

一、英吉利は恐らく中立を宣言するならんも、米國に對し好意を有すること明かなり。

二、露西亞の向背は明かならざるも、帝國に對し好意を有するものとは認め難し。

三、佛蘭西は比較的帝國に好意を有するが如きも、其援助は期待するを得ず。

四、伊太利及獨逸は對佛政策上よりして、佛蘭西と對立の動向に出づるものと思はる。

五、其他の諸國の態度は、國際聯盟會議に於ける狀勢より推して大體帝國に對し好意を有せざる如きも、其の向背は戰局に對し直接大なる關係を及ぼさず。

要するに。北米合衆國及支那以外の諸國は局外中立を守るものと認むるも、戰勢の動向、戰局の推移に應じて其の態度を變ずることあるべし。之が爲め我は常に有利の對勢を持するを要す。

作戰綱領

一、露西亞に對しては專ら陸軍を以て之に備へ、必要の兵力を滿洲要地に配置する事。
但し可成開戰の動機を避くる事。

二、英吉利に對しては力めて親善主義をとり、極力紛議の發生を避くる事。

三、支那に對しては海陸協同作戰に依り速かに天津上海を扼して北平南京を攻略し、以て支那の死命を制し合衆國との連絡を遮斷する事。

四、合衆國に對しては專ら第一線艦隊を以て攻勢防禦の姿勢をとり、漸減作戰により敵艦隊の全滅を期する事。

五、速戰速決を以て作戰の指導精神となす事。

右作戰に應ずる爲には、差當り八十萬の軍隊と、二千機の飛行機とを要するであらう。





# 戰局を制する英露の動向

前布令が長かつただけに、日本對米支戰爭に對して世界は『來るべきものが遂に來た』として、あまり多く驚きも、騷ぎもしなかつた。之で東洋の低氣壓が消滅されゝば、却て後がさつぱりして良いとさへ思つた者も少くはなかつた。

太平洋上又は太平洋岸に領土を有せざる國に取りては、日本對米支戰爭は全く對岸の火災で、何方が勝たうと、敗けやうと、何の痛痒も感じない。同時に日本及米支に取りても亦、是等の國の去就向背は交戰上大なる影響を蒙らない。佛蘭西が日本を援けやうと、獨逸が米國を援けやうと、結局精神的同情以外の何ものでもないであらう。

之に反し、此の戰爭の結果によりて最も大なる影響を受くる國、從つて又其の國の動向に依つて、兩交戰國就中日本が戰爭遂行上に至大の利害を有する國は、海軍關係に於ては英國陸軍關係に於ては露國である。

是等二國の動向に依つて、勝つべき戰も敗れるかも知れない。敗れるべき戰も勝つかも知

れない。

海の王座に復辟を狙ふ英國の去就は如何？　二度の五年計畫に陣容を立て直した露國の向背は如何？

## 英國の去就？

日米相戰ふに當り、日本の爲めにも、米國の爲めにも、致命的打擊を與ふるものは英國の去就である。若し英國が日米の何れかに與みせば、勝敗の數は戰はずして自ら明かである。

されば日本も、米國も、英國の意思を無視して、濫りに戰爭を開始することは出來ない。苟も太平洋戰爭を開始せんとせば、日本たると米國たるとを問はず、又その主動的立場に立つと、受動的立場に在るとを論ぜず、豫じめ英國の意思と態度とを知ることが必要である。少くとも英國が中立を持することを確かめた上でなければ、戰ひを宣することは出來ない。此の事は、英米戰爭の場合には日本、日英戰爭の場合には米國、にも適用する事が出來る。

日英米は現代世界に於ける三大海軍國で、之に次ぐ佛伊は遙かに下つて、その實勢力は日本の二分の一にも達しない。されば世界の海洋は事實に於いて、日英米三國海軍に依つて支





配されて居るのである。而して是等三國の海軍力比率は、大體に於て三、五、五であるけれ共、米國は國防上その兵力を太平大西兩洋に分かたねばならず、英國は其の領土の關係上全世界の海洋を防ぐ必要がある。獨り日本のみはその全海軍兵力を、東亞の一隅に集結し得るの戰略的利益を有して居る。これ等の關係上、三國の中、何れかの二國が聯合せば、他の一國は兵力の點に於ては到底對抗し能はざることは兵理の定勢である。

されば米國が主動的に日米戰爭を開始する際には、開戰前に於て既に英國との諒解、少くも好意中立の約束が出來て居る筈である。同時に日本が受動的に應戰する場合に於ても又、少くも英國が米國に對し、兵力的應援を與へざる事を默契若しくは明察した上でなければならぬのである。

歐州戰爭開始の際、獨逸の作戰部は英國の態度に關して誤算があつた樣である。獨逸參謀本部は開戰の場合、英國の中立を豫想し、白耳義の中立條約を犯して、兵を其の國内に進めたところ、案外にも英國からの最後通牒的强抗議に接して大狼狽を極め、遂に騎虎の勢ひに驅られて英國を敵に廻すに至り、窮極に於て戰爭に敗れたのである。

獨逸が初めに英國の不參戰を豫想した譯は、算盤勘定の高きテームスの町人は、累世の競敵たる佛蘭西の爲めに、血を流す樣な事は絶對にあるまいと信じた爲めであり、而も後に於て遂に敵に廻したるは、英國の陸軍を輕視した爲めであると思はれる。英國自身も亦あれ程までにひどい痛手を負ふとは豫期しなかつた所であらう。

歐洲戰爭に依りて現代戰爭なるものゝ正體が暴露し、假令勝つとも再び起ち難き損害と災禍とを受けることが判つた。だから各國ともに自ら戰爭の渦中に投ずる事を避け、局外に在つて他國の戰爭を見物旁々金儲けをなし、同時に他國の疲憊衰弱することを望んで居る。

海陸を合算した兵力の點に於ては、歐州戰爭の結果、佛、伊、獨、露が第二流に下り、英、米、日が實に世界の三强國であると同時に、三大海軍國となつた。陸軍の戰爭は如何に大規模でも局地戰であるが、海軍の戰爭は全世界的である。日米、日英、英米戰爭こそは、現代に殘されたる世界の三大戰爭にして、之等の內、其の一つが戰はれる時、第三國が居ながらにして漁夫の利を占めるのである。

英國の領土は世界到る處に蔓り、米國とは加奈太及びカリビヤン諸島に於いて、日本とは





印度及び濠洲に於て、各重大な關係を保つてゐる。されば日英戰爭の場合、濠州及び新西蘭は日本艦隊の攻擊を受け、印度は日本陸軍の侵襲を蒙る危險が非常に大である、同時に中支に於ける英國の商權が、根本的に覆滅さるゝ事は言ふ迄もない。

極東に於ける英國唯一の軍港たる香港が、華府條約に依り防備を制限せられたる結果、英國は新に新嘉波に大軍港の築設に着手した。新嘉波軍港の目的は、言ふ迄もなく日本に備ふる爲であつて、若し此處に難攻不落の軍港が完成し。有力なる英國の艦隊が此地に根據する限り、日本の陸軍は馬刺加海峽を西する事能はず、日本の艦隊は本國を空にして濠洲を窺ふ事を許されない。併し英國は此軍港築設に對してすらも、日本の反對輿論を氣にして、屢々計畫を變じた程に、日本に氣兼遠慮をして居る。斯くの如く英國は、日本に對し、常に大なる危惧と憂慮とを懷いて居る。

日本に對し、斯かる弱點を有する英國は、單獨で日本と戰ふ事を好まない。英國の欲するところは日米相戰ふて共に傷つき疲れ、居ながらにして英國が再び海の王座を占めんことである。待てば海路の日和で、今や日米戰爭は開始せられた。英國は幸運なる漁夫の籤を引き

當たのである。打算に賢明なる英國は、決して此幸運の鍵を無駄にするものではない。

歐洲戰爭では日本と米國とが、英國から多くの金を吸ひ取つた。今度の戰爭では英國が日本と米國とから、多くの金を吸ひ取る番である。だが日本に吸ひ取られる金が有れば未だしもの幸ひである。

歐洲戰爭の時、米國は何故に遲がけに戰爭に參加して、敗戰の引導を獨逸に渡したのであるか。それは軍國主義撲滅の聯合國の排獨宣傳にかぶれたのでもなく、獨逸の無制限潛水艦戰に對する人道的義憤でもなく、又元より英國と同文同種の民族感情の爲めでもない。聊か穿ち過ぎた觀察かも知れぬが『四年の交戰に英佛の聯合側も、獨墺の同盟側も、双方共にへと〳〵に疲れ切つた。米國としては吸へるだけの金は吸ひ盡した。此上戰爭が續けば自國の產業を破壞する。最早や戰爭を止めさす汐時である。米國の新鋭の力を以てせば、唯一押しで何方でも倒す事が出來る。聯合側と、同盟側と、何れを勝たした方が米國に有利であるか、何れを負かした方が米國に不利であるか』と考へた時、向上意識と發展慾の强い新興氣鋭の獨逸を勝たす事が、米國の將來に恐るべき敵を殘す事である、ぐらゐの事を知らぬ程にお目





出度い米國でもなかつた。

日米戰爭の場合、英國は丁度、歐洲戰爭に於ける米國の立場に立つて居る。米國が儲ける丈け儲けた末で、勝敗示命の鍵を握つたと同樣、戰爭が長期に涉り、日米共に疲れた時、英國は始めて其の態度を明かにするであらう。其時日本が英佛となつて勝たされるか、獨墺となつて敗かされるかは、日本國民に與へられたる最も重大なる疑問でなければならぬ。

倫敦會議に於て、英國は日本に對するよりも、米國に對してヨリ强烈に爭つた。だから英國は米國よりも日本に對し、ヨリ大なる好意を有するなどと說く者がある。併し倫敦の抗爭は、海軍と云ふ局部問題に對する專問的の論爭に過ぎない。若し政治の大局面から考ふるならば英國も、米國も、領土的には既に滿腹して、唯現狀維持を望む事に一致して居る。英米兩國は同文同種の國だとか、或は血は水より濃しなどの言葉は、國交上の虛辭に過ぎずとするも、白人には白人共通の利害があり、共通の感情があり、共通の矜持がある事を忘れてはなるまい。

日本と英國とは支那に於て、太平洋に於て、相當大なる利害の背反を有するに拘らず、日

英關係が表面極めて平靜なるは、一に日米關係緊張の幕に隱れ居るが爲めに過ぎない。日米關係が日本に有利に展開し、日本が太平洋の主人公となつた時こそ、武裝した日英關係が世界の銀幕に判きりと影を現はすであらう。支那に勝ち、露西亞に勝ち、更に米國を破つたとすれば、次に來るものが何であるかは、英國人の知らぬ筈はない。斯く考ふる時、英國の去就に關して與へられた日本國民の疑問は自から解かれるであらう。

要するに、英國は此の戰爭に對し、輕々しく劍を拔かぬであらう。英國が其の大海軍を擁して局外中立の行司役となり、白眼を以て戰爭の過程を睨視する時、勝敗は交戰國たる日米に依つて決せられるものでなく、之を支配し、命令するものは英國である。東洋に生命線を有する英國は、日本を負かさぬ迄も決して勝たさぬであらうことは想像に難くない。

## 露國の向背？

當事國たる日本と支那とに次ぎ、滿洲の獨立に依つて最も大なる影響を受くるものは露國である。滿洲國獨立の事實に對し、ソヴエート露西亞が好惡何れの感を懷き居るやは、此の戰爭に於て米支に傾くか、日本に傾くか、露國の動きを計るクリノメーターである。





露國は單に滿洲と接壤隣境の地理的關係を有するのみならず、西比利亞の滿洲里より北滿を横斷して浦鹽斯德に至る西比利亞鐵道の捷路なる東支鐵道を有し、滿洲と大なる經濟的並に軍事的關係を持つて居る。

帝政露西亞の東方經略政策は、遂に滿洲占據を喫機として日露の衝突となり、戰爭の結果露國は大敗して樺太南半の割讓、南滿鐵道の讓渡、捕虜給養費の名を以て二億圓の賠償金を出す等、屈辱的媾和を結んだ。

人になぐられた恨みは終生忘れることの出來ないのが人間の感情であると同時に、人をなぐつて夜が寢られないのも人間の良心である。假令それが正當の行爲であつても、相手の復讐を恐れることは人間普通の心理である。歐洲戰爭では佛蘭西は獨逸に勝ちながら、獨逸の復讐に對して戰々兢々として居る。日露戰爭に於て日本は露國を叩きつけたものゝ、相手が相手とてその復讐を恐れ、一面には陸軍を十三ケ師團より二十一ケ師團に激增し、大いに之に備ふると同時に、一面には彼の御機嫌を損ぜざることに是れ力めたのであつた。

日本の爲めには幸福にも、たま〳〵突發したのが歐洲戰爭である。露國の國力不相應なる

大軍備は、實戰に際してこれを運用する事が出來ず、遂に內より潰れて帝政露西亞の沒落となつた。尋いで起つたものが今のソヴエート共產露西亞である。侵略主義なる帝政露西亞の沒落は、日本の國防に取りては何よりの仕合せであつた。

戰爭の爲め國力は極度に疲弊し、革命の爲め秩序は全く紊亂し、外壓の爲め國內は甚だしく動搖し、北滿に於ては支那の輕侮と凌辱とをさへ蒙るに至り、一時は大露西亞國の潰滅をさへ思はしめた。併し多年培はれたる大國の基礎は流石に鞏固であつた。勇猛なる革命家の奮鬪は流石に懸命であつた。怒濤の湧くが如き內憂を切り拔け、暴風の襲ふが如き外患を押し切り、新建國の土臺は十年にして漸く固まつた。

更生露西亞が其の共產經濟試練の第一步として踏み出したるものが、一九二八年に着手したる所謂經濟五ケ年計畫なるものである。その大膽雄大なる計畫は、完全なる統制經濟の社會主義國に於てのみ、始めて實行し得る計畫經濟である。賞贊と、非難と、成功と、失敗と、衆評區々たる間に、五年計畫は着々進捗して、兎も角も相當の効果を擧げ、經濟狀態は著しく改善されたのは事實である。露西亞は更に第二次五ケ年計畫に着手した。





露國の五ケ年計畫に目を剝いで驚いたのが日本の陸軍である。爲めにする宣傳か、或は信念の叫びかは判らぬが、彼等は東洋に於ける露國の捲土重來の警鐘を打つた。曰く露國には八十師團の陸軍がある、露國には機械化旅團が出來た、五ケ年計畫中の重工業だけは確かに成功だ、それは日本の國防に對する大なる脅威であると。國民は東に對米戰爭で威かされ、北に對露戰爭で脅かされ、食ふものも食はずと、軍艦や大砲を作らされて居る。

滿洲事變發生の當初、北滿地方に於ける、我が軍事行動に對する露國の防害說が、眞らしい氣に公然と日本內地へ傳へられた。之に對して露國から事實無根の正式抗議が來たりして、頗る國民を惑はしめた。あの當時出先では、露國を怒らし事を滋くする爲め、故意に彼の臀をつゝいて、隨分嫌がらせをやつたとの噂が高かつた。若し露西亞が帝政時代であつたなら日本があの十分の一の事をやつても戰爭になつてあらう。素より『であつたなら』日本もやりもすまいが。

ソヴエート露西亞は社會主義國として、帝國主義戰爭反對を國策として居る。それが口先の宣傳であるか、或は心からの信念であるかは、何れとも保證は出來ない。併し新露西亞建

國の當初、バルチック沿岸小國が民族意識に依つて、舊露國から離れ去つた時、ソヴエート政府が何等の反對を唱へざりしに見ても、今の露西亞に領土的侵略慾のない事だけは略ぼ明かである。だからこの北方の赤熊は、こちらから態と尻つ尾を踏まなければ、喰ひ付く心配は先づあるまい。

とは云へ、北滿に於ける日本の軍事行動が、少からず露國の神經を刺戟した事は爭はれない。だが建國大業の中途にありて、日本と事を構ふるの不利なる事を知つて居た露國は、こゝみ上げる腹の虫を押へて好く隱忍自重した。併しそれは決して日本に對し愉快の感情を以てではなく、不快の念を懷いてであることは明かである。社會主義の帝國主義戰爭反對は、國家の侵略政策に反對なのであつて、他國の侵略に對して無抵抗と云ふのではない。

露西亞が浦鹽を中心とする沿海洲や、極東西比利亞を領有する限り、東支鐵道は國防上より言ふも、經濟上より言ふも、極東露領の生命線である。北滿の權益を壟斷して、東支鐵道の存在を危くするものあらば、露國は何時迄も拱手傍觀するものではあるまい。適當の機會だにあらば、決然起つて自己の利益を守るであらう。





滿洲事變に於ける日本の行動に對し、露國が如何なる感情を以て、如何なる考察を爲して居るかは、昭和七年（一九三二年）ジュネーヴに於て開かれたる國際聯盟軍縮會議の席上、露國代表の提出したる左の覺書を見れば其の大體を窺ふ事が出來る。

ソヴエート政府は四月二十日軍縮一般委員會の決議、即ち『軍備は各國の地理的地位及び諸般の事情を參酌し、國家の安全と兩立し得る最低の限度迄縮小さるべし』との決議を受諾するに當り、之に先だち『平和維持の爲めの國際的義務を犯し居る隣邦の有ることを考慮せんとするものである』。ソヴエート政府は宣戰を爲さずして其の國の在留民を擁護するとの口實を以て、外國領土に陸海空軍を送り敵對行爲に從事し、前述の決議案中に提案せられたる軍備縮小に對する誓約に對し、充分なる保證を與へざる國のある事を、考慮に入れんことを提案するものである。

覺書に言ふ所の隣邦とは、日本を指せる事は疑ふの餘地がない。露國は少くも日本を以て國際義務を犯す危險國であると認めて居る事は明かである。

露國は恐らく今日未だ、日本の鋭鋒に當るの力はないであらう。併しながら若し日本對米

支戰爭に於いて、日本の戰局が苦境に立つに至れば、コサック赤衛軍の馬首の向ふところ知るべきのみである。

世には、共產主義の總本山ソヴエート露西亞が、思想的、政治的、經濟的に最も好まぬものは資本主義である。而して現代世界に於ける資本主義の大本山は米國である。故に露國當面の敵は、日本に非すして米國でなければならぬ。日米戰爭の場合、露國は米國よりも寧ろ日本に好意を持つであらうと、日本の爲めに好都合の樂觀說を爲す者がある。

信仰より來る宗敎戰爭が、全く跡を絕ちたる現代に於ては、戰爭の原因は常に必ず直接間接の國際利害の衝突である。資本と、共產と、兩主義國の本山たる米國と露國とは、主義思想の抽象的異同こそあれ、實利實害の背反衝突は殆んど絕無である。これに反し接壤隣境の日露の間には、そこに戰爭の誘因たるべき幾多の利害の對立がある。

露國より見れば。米國は政策上の資本主義國であつて、其處には共產主義も公認せられて居る。然るに日本は國體的に反共產主義國であつて、共產主義の存在が絕對に許されない。故に資本主義國としては、米國の方が日本よりも大且つ强である。併し反共產主義國として





は、日本の方が米國よりも嚴且つ烈である。

之を以て露國としては、日米戰爭に依つて日本と米國とが共に傷つき、共に斃れんことを第一に望んで居るであらう。併しながら若し何れかを殺さねばならぬとすれば、資本主義の米國と、反共產主義の日本と、何れにピストルを向けるであらう。それは日本國民に取つて決して難解の問題ではあるまい。

要するに、此の戰爭に於て日本が有利なる戰局を持する限り、露國は中立を保つであらう。露國が中立を保つ限り、戰爭の本舞臺は太平洋で、立役者は海軍だけであるから、戰費は比較的少くて濟む。日露戰爭の時には、海軍はあれ程活動したにも拘らず、其の戰費は陸軍の十二億八千萬圓に對し、僅に二億二千萬圓であつた。之は海陸建軍の相違の然らしむるところで、此の戰爭にも適用が出來る。

然るに若し露國の參戰に依つて、戰場が西比利亞にまで擴大したる場合には、大軍の給養に、彈藥軍需の製造に、之が遠距離輸送に、莫大の經費を要するに至り、兵力の戰爭以外に、經濟問題の爲めに日本は行き詰まりはしないであらうか。

# 巴奈馬運河爆破の効果

この戰爭、日本が有利の戰局を保持する限り、英國も、露國も、中立を持續するであらう。露國が中立を保つ限り、日本の主なる敵は米國である。即ち米國は幹にして支那は枝である。

幹を倒せば枝は自然に枯れる。米國を破れば支那は自然に屈伏する。計り知れぬ國民の血と財とを犧牲として、果てしもなき支那四百餘州を馬蹄に蹂躙する必要はない。

故に戰爭の本舞臺は太平洋であつて大陸ではない。否大陸であつてはならない。戰爭の本舞臺が大陸に分れた時こそ、露西亞が戰爭に參加した時で、やがて又英國が中立の旗を降ろす時かも知れない。

海に英米を敵とし、陸に露支を敵とするに至れば、最早天佑と大和魂との作戰では間に合はない。

此戰爭、日本は何處までも敵を米支に限らねばならない。





そこで日本は米國相手の太平洋作戰を何うする？。太平洋戰爭は何うなる？。

對米作戰に於ては、米本國に對する正攻や奇襲の外に、巴奈馬運河の爆破、比律賓及びガムの占領、布哇の襲擊などが劃策されるであらう。

巴奈馬運河は南北米兩大陸を連接せる巴奈馬地峽の最狹部に位し、今は巴奈馬共和國の領域内にありて、米國の管理に屬して居る。

米國は此運河開鑿の爲に前後十六億圓の巨資を投じ、一九一五年(大正四年)二月盛大なる開通式を擧行する豫定を以て、米國政府は既に各國に案内狀を出し、軍艦の參列を希望した。我國よりも軍艦二隻を派遣する筈にて。諸般の準備全く整ひたる際、偶々歐洲戰爭勃發の爲め折角の開通式も御流れになつたと云ふ、奇しき因緣を有する運河である。

大西洋岸なるコロン港より運河に入れば、バナナ實る黃金の畑、椰子の葉茂る綠の山をば痛々しくも唯一文字に切り割りたるガツンの堀割、苔も結ばぬコンクリートの長壁は、熱帶の炎陽に輝いで陽炎空に搖らめいで居る。渠水一路長堤に添ふて進むこと數哩、ガツンの第一水閘を過ぐれば、此處は二二〇方哩の面積を有するチヤグレスの人造大沼湖である。細波

激湍たる萬頃の波底は。嘗て是れ野馬谷に飲み。牧羊草に眠りたる綠の野にして、遠近に點在屹峙せる幾多の島嶼は、正に是れ當時の山頂である。

斯くて右折左曲、澪標を辿つて二十三海里の湖水を過ぐれば、幾度かの地辷りに、運河鑿掘の最難工事と知られたるキユレブラの堀割に達する。水路漸く狹まつて、兩岸の立壁蠢乎として、手を延ばせば正に觸れんとして居る。ペドロ・ミギユエル、ミイラフロレスの第二、第三の水閘を出づれば、太平洋は淼洋として既に眼眸に落ち、やがて太平洋岸なるパナマの港に達する。運河の全長五十哩、規模の大、結構の雄、坐ろに金の力と機械の力の偉大なるを思はしめる。

太平洋は米大陸の西にある。然るに巴奈馬運河の西口は大西洋に面して居る。是が此運河に對して屢々起る錯覺である。

米國は巴奈馬運河の開通により、東岸紐育より西岸桑港に至るに、約八千五百海里に對する日子と、勞力と、燃料とを節約することを得たのである。單に是等の經濟上の利益を得たるのみならず、南米迂回に要する半分以下の時日を以て、其の大西洋艦隊を太平洋方面に移動





する事が出來る。若し日時の節約に加ふるに、南米南端に於ける風濤の險惡による艦船の破損と乘員の疲勞とを以てせば、其の軍事上の功益は計り知る事が出來ない。

されば巴奈馬運河は、米國海軍にとりて死活に關する頸動脈である。一度運河の連絡が絶たれゝば、米國海軍の作戰計畫は或は根本的に破壞されることがあるかも知れない。

之がため米國は、英國との間に取りきめたる運河開放の約束を無視して、運河の兩端には堅固なる要塞を築き、優勢なる移動軍を置き、殊に太平洋岸には港口の島嶼を利用し、現代兵器の精鋭を粹つて之に備へ、如何なる堅艦も海上より之を窺ふことを許さない。

だから運河破壞の法は、飛行機を以て空中より爆擊を行ふの他にない。スパイの手擲彈で岸壁の一部や、戸船を破壞した位では、大した効果はない。

『日本恐るべし』の著者デビス大佐は太平洋及び巴奈馬運河の防備に關して、

『世の中が泰平を謳歌せる間は巨大なる砲煩がポイント・ローマ角上嚴しく並んで居るが、サンビドロの港口を守つて居るか、金門を睨めて居るかどうかは、サンデイゴ、ロスアンゼルス又は桑港の市民にとつては、街路の鋪裝、公園の植樹よりも重大な問題ではない。

然し若し開戰が布告され、日本の潜水艦や快速巡洋艦の脅威の暗雲が低く漂ふ時、是等要塞の重要なることは、大旋風時に於ける土嚢と同様である。戰爭は既に此世に終りを告げ千年の平和時代が搖籃の中にあることを樂しんで居る間は、巴奈馬運河を通航する船舶にとつて、ガツン閘門、キユレブラ堀割、又は世界的關門の入口が、大砲や飛行機を以て如何なる敵に對しても衛られて居るか、どうかは問題ではない。併し一度戰爭が起つた場合一臺の爆擊機から落すダイナマイト又は潜水艦の狙ひ定めた少數の彈丸は、一時間以内に米國艦隊を數ケ月間分離するに充分である事を忘れてはならぬ。」

と警告し、更に巴奈馬運河の爆破に關しては、

『日本との間に戰爭が起るとすれば、恐らく不意に突發するであらう。日本人は術策に富む戰士であると同時に亦狡猾なる外交家であつて、國際協約の文字に從ひながら一切の拔け道を利用するであらう。それは公式に戰ひを宣布する前に、或るきつかけを見付けて一國が他國に攻擊を加へることである。日本が此手段に出づることは確かである。而して同時に攻擊さるべき場所は三ケ所ある。日本の艦隊及び航空機は比律賓のキヤビテ及びガムの





二根據地に攻擊を加へるであらう。同じ時太平洋側巴奈馬運河沖には潜水艦が現はれるであらう。飛行機の發動機の爆音、ダイナマイトの爆裂、榴彈の落下に次で、運河は閉鎖されるであらう。』

と言つて居るが、之は聊か日本を恐れ過ぎた見方である。

今假に日本の秘藏兒として世界に誇る伊號潜水艦を以てすれば、航續力の點に於ては巴奈馬攻擊に堪えるであらう。

だが、空中防禦の堅固な巴奈馬運河に對し、潜水艦に搭載せる一機や二機の飛行機を以てしたのでは攻擊の効果は頗る疑はしい。

それに亦潜水艦だつて、五百海里も、千海里も潜航が出來るものではない。如何に優秀な艦でも、潜航距離はせい〳〵八十海里か百海里に過ぎない。

四十海里近くも速力の出る巡洋艦や、驅逐艦に較べて、牛の様に速力の鈍い潜水艦は、目的地に達する前に敵に發見破壞されるであらう。

潜水艦が一度多數の敵に發見されたが最後、蛇に睨まれた蟇同様、逃げることは殆んど困

難である。假令潜水しても、油の様な熱帶の海では、飛行機で空中から探せば容易に發見せられる。

如何に堅牢な潜水艦でも、海水の壓力と艦殼の强度との關係上、水面下三十尋以下に潜ることは危險である。飛行機から水中爆彈を頂戴すれば、其儘二度と浮ぶことの出來ない海底に潜行せざるを得ないであらう。

さらでだに倫敦條約により潜水艦の不足を叫ぶ日本の海軍には、巴奈馬の海の魚を肥やす爲の潜水艦は一隻だつて持ち合せがあるまい。

同著者は一九二二年米國に於て行はれた巴奈馬攻擊演習の報告書を引いて、

『太平洋戰艦々隊司令長官エバール大將の率ゐる敵艦隊は、巴奈馬灣内に一地點ありて、侵入艦隊が一度海上及び空中を掌握せば、此處よりミラフロレス閘門及び水道のバルボア端を守備せる要塞を、抵抗を受くることなく攻擊し得べきことを發見せり。此地點は太平洋戰艦隊中の十四吋砲二十四門の射程内にあり、而してエバール大將の艦隊は、二隻の戰艦をして閘門を攻擊せしめつゝある間に、更に八十二門の十四吋砲を運河西端の要塞に指





向するを得たり。西口を防禦する砲の有効射程は約二萬米なるを以て、此地點にありて煙幕を以て掩護せらるゝときは、海岸要塞の着彈地域外にあるを得べし。』

と說き、巴奈馬防備の薄弱を叫んで居る。重大なる軍事機密に屬する防備の缺陷弱點を公表して憚からざるところに、米國式の特色がある。秘密萬能の日本と、秘密開放の米國と、國民性のソリが合はぬのも當然である。

併し之は報告書に云へる如く、攻擊艦隊が海上及び空中を掌握したることを前提としての演習である。日本艦隊が巴奈馬の海上及び空中權を握ることは、米國艦隊の全滅したることを意味するもので、布哇に優勢なる敵艦隊を生きた儘に殘しながら、『八十二門の十四吋砲を備ふる大艦隊』が横須賀から八千海里を隔つる巴奈馬迄出掛けられるものではない。殊に敵の艦隊が全滅した後に。わざ〳〵運河を破壞するの必要はない。寧ろ日本の艦隊が運河を經て大西洋へ進出することを防ぐ爲めに、米國側に於て運河を爆破する恐れのあることを、あべこべに日本が警戒せねばならぬであらう。

デビス大佐の書は、米國民に對する警鐘の爲めとは云へ。之は又あまりにも鬼面人を嚇す

ものであると言はぬばならぬ。もし日本人が之を讀んで嬉しがつて居たら、誠におめでたき至りである。

同大佐は又、日本の飛行機がコロンビヤ國に根據地を得て、巴奈馬を攻擊するとも言つて居る。誠に奇想天外の言である。恐らく巴奈馬共和國獨立問題に關して、脛に傷もつ米國人としての良心の咎めから、日米戰爭の場合には、コロンビヤが對米舊怨を晴らす爲めに、日本と同盟するとでも心配して居るのであらう。

人を呪へば穴二つと云ふが人事ではない。

要するに海軍を以てする巴奈馬運河の爆破は、敵艦隊の現存する限り、不可能に近き困難且冒險事である。然も爆破の効能は主として開戰の初期、米國大西洋艦隊が未だ太平洋方面に進出せざる前の期間であつて、既に進出を終へた後は軍事上に於ける効率は著しく減殺されるのである。

米國は如何なる場合にも、大西洋艦隊を大西洋に殘した儘で、日本に對して戰爭を開始するものではあるまい。米國が對日宣戰を布告する時には、大西洋艦隊は、既に太平洋の波に





浮んで居るであらう。

然る時、巴奈馬運河の爆破は、鳥が逃げた後で籠の戸を閉めるのと大差はない。

英國の海軍通として有名なるバイウオーター氏は、其の著「一九三一年から一九三三年の間に起る太平洋大戰爭」に於て、巴奈馬運河の爆破に關し、次の樣な事を書いて居る。(意味摘譯)

日米の國交が既に危殆に瀕し、三月五日には駐米日本大使が引揚の旅券を請求したといふ三月三日の拂曉、大阪商船會社の貨物船明石丸(一二、〇〇〇噸)が巴奈馬運河の大西洋岸なるコロン港に到着した。本國政府から、日本船抑留の命令も受けず、船舶書類も完備して居たので、運河官憲は一隊の監視兵を乘せたまゝで運河の通過を許した。同船はガツン湖を出で、今しも地辷りで有名なキユレブラの堀割に差しかゝつた際、突然天地を撼がす大爆發が起り、冲天高くそゝり立つた大斷層は、沸き返る激浪と濛々たる砂煙と共に大地辷りを起し、明石丸は粉碎して影も留めず、運河は一千碼の長距離に亘り土砂を以て埋められて仕舞つたといふのである。

若し之が實際に行はれたとすれば、米國人は隨分『呑氣な父さん』である。

# 比律賓は日本への進物

外國の軍事評論家の多くは、日米戰爭の場合、比律賓とガムとは、米國から日本への進物である、唯日本が如何にして之を受取るかゞ問題であると言つて居る。

比律賓と云へば、米國亞細亞艦隊の根據地であると云ふことよりも、毎年夏から秋にかけて、日本を襲ふ低氣壓の發生地として、我國民の耳に一層よく聽き馴れて居る。

比律賓は臺灣の南、ボルネオ及びセレベスの北に横はる一大群島で、日本列島と共に北太平洋の西壁を形作つて居る。其の最大島は我南洋通商史を飾る呂宋彦左衛門で名高きルソンと云ひ、之に次ぎてミンダナオ、サマール、ネグロス、パネー、ミンドロ、パラワン、レート、セブー、ボホール、マスバテ等を主なるものとし、總數一千七百の島嶼より成つて居る。全面積二十九萬六千餘平方キロで、日本の朝鮮、臺灣、樺太を合したものと略同一である。住民は馬來人種に屬し、其數一千二百萬を算し、支那人の數は二十萬を越えて居る。氣候は臺灣の南と云ふことに依つて、其の暑熱が察せられるが、熱帶通有の海風が常に吹來して大い





に暑氣を緩和して呉れる。物産は金銀銅鐵其他種々の礦物を出し、各種の熱帶植物と果物とは自然に繁生し、マニラ煙草とマニラ麻とは世界的に有名である。島の内地は蓊鬱として未だ曾て斧鉞を入れざる原始の處女林を以て蔽はれ、山には錦羽の極樂鳥が棲み、海には貴重な眞珠貝が繁殖して居る。

島は南米の南端マガリエン海峽の發見者として有名なる葡萄牙の航海者マガリエンに依つて、一五二一年始めて世界に紹介せられたのである。彼は群島探險中、マクタンと稱する一少島に於て土人の爲めに虐殺せられたと云ふ悲しき歴史を留めて居る。島は其後一五七一年西班牙人に依つて征服せられ、時の國王フイリツプの名に因んで比律賓と名付けられたのである。爾來徳川家光の鎖國禁教に至る迄、我國とは緊密なる通商關係を持續し、當年キリシタンの宣教師は多く此處から派遣されたのである。降つて一八九八年米西戰爭の結果、獨立の志士アギナルドの雄圖も空しく消へて、遂に米國の所領となり、以て今日に及んだのである。

比律賓はガムと共に華盛頓條約に依る防備制限地域内に在る。即ち條約成立の際に於ける

防備の現狀維持である。日米開戰の危機が明日に切迫するとも、砲臺に一門の大砲を增すことも、軍港に一棟の工場を建ることも許されない。日本の臺灣、琉球、奄美大島、小笠原島なども同じく此條約の適用を受けねばならぬのである。

比律賓の軍港はマニラ灣の奥なるカビテにある。之は西班牙時代からの遺物に多少の改善を加へたもので、防備堅固とは言へない。

米國はカビテの外に、スービク灣のオロンガポに新軍港を建設せんとして着々工事の進捗中、華盛頓條約の成立を見たのである。若し華盛頓條約が成立しなかつたなら、オロンガポは今頃難攻不落の軍港となり、我西方通商航路を脅かす事誠に大なるものがあるであらう。夫のみならず此處に優勢なる米國の艦隊が根據した曉には、我國の胸先に短刀を突きつけられたと同樣、國防上の不利不安も亦極めて大である。

華盛頓會議に於て我が加藤全權が、主力艦一割の代償として比律賓の防備制限を約さしめたのは、大なる成功と云ふべきであらう。然るに我國の大海軍論者は、防備制限の利益は棚に上げ、六割讓歩を以て我全權の無能を責め、六割强要を以て米國の横暴を詰るのが常であ





る。比律賓の防備制限が出來た上、日本の七割要求が容れられたなら、日本の爲めには誠に好都合であるが、殘念ながらさう甘くは問屋が卸さなかつた。

比律賓の陸上の固定防備は比較的貧弱である。守備兵も土人軍を加へて僅かに約二萬人に過ぎない。而も戰時米本國からの援兵は絶對に望まれない。日本軍の勇敢を以てせば、之を攻略することは、拂ふ犧牲に比例する時間の問題である。近代式武裝を以て築城せられ、頑强の聞へ高き露西亞兵に依つて守られたる旅順さへも、豪勇の譽れある獨逸軍に依つて守られたる青島さへも、前者は八ケ月、後者は四ケ月にして落城した。敵に包圍された孤立無援の城砦にして、一年の守りを續けたものは古來稀である。

併し今日のマニラは曩日の旅順ではない、青島ではない。空には上陸軍の大敵たる飛行機がある。海には封鎖を不可能ならしむる潜水艦がある。平時比律賓にある軍用飛行機は、百乃至百五十機位であるが、開戰と共に之を三百四百に增すことは決して不可能事ではない。

現代の戰術に於ては、空中を制せずして、即ち敵の空軍を擊滅せずして、陸兵を敵地に上陸せしむることは、自殺的無謀の行爲である。海上からの軍艦の援護などは、何等の効果も

ない。唯貴重の軍艦を敵飛行機の爆擊目標に供するの愚に過ぎないであらう。日米戰爭の場合、我海軍はたとひ舊式軍艦の一隻と雖も、無意義に海底に沈めることを許されない。

今假りに我軍が制空權を握らずして、比律賓の或地點、例へばマニラ背面のラモン灣の一地點に我陸軍の揚陸を決行したとする。百にあまる敵の飛行機は、爆音囂々、機翼を連らねて我運送船隊の上空に殺到し、船に對しては爆彈を、人に對しては霰彈や、黴菌彈や、毒瓦斯彈を雨の樣に投下するであらう。三百キロの爆彈一個は、大運送船を爆破することが出來る。霰彈は鐵兜で、毒瓦斯はマスクで防ぐことが出來るとしても、服に火がついたり、皮膚が燒けたりする燃燒彈をどうする？　黴菌彈のコレラ菌や、マラリヤ菌などは、熱帶では最もよく繁殖に適して居る。日清戰爭の時臺灣で、コレラで死んだ者は彈丸で死んだ者よりも多かつた。三十か五十かの飛行機が決死的に暴れたなら、何萬人でも殺傷することが出來ることは、上海事變に於ける我空軍の活動に照しても明かである。

だから、我有力なる空軍の援助なくては、陸兵を比律賓に上陸せしむることは絕對に出來ない。





臺灣の南部から、比律賓に於ける我軍の上陸豫想地點迄は三百乃至五百海里であるから、往復と戰鬪行動とを加へると凡そ一千海里內外となる。現在に於ける普通の戰鬪機や爆擊機ではやゝ燃料が不足である。併し生還を期せぬ『行きつきり』飛行でやればやれぬこともない。

故に最も輕易且確實なる攻擊を行はんが爲めには、少くも五十機以上を搭載する航空母艦を使用することである。

然るに斯かる航空母艦は、日本に於ては赤城及び加賀の二隻だけである。布哇の攻擊とか、主力艦隊の決戰とか、太平洋の本舞臺戰を後に控へながら、我海軍の虎の子たる航空母艦を、此危險なる局地作戰に使用し、萬一敵の飛行機や潛水艦の攻擊を受けて沈沒でもしやうものなら、それこそ全戰局の運命に關する。比律賓占領の利得と、航空母艦喪失の損害とは、差引何れが大なるかは疑問である。

しかも夫は決して杞憂ではない。敵の飛行家に二三の眞に死を決したる勇士があつて、大膽不敵なる突擊襲擊を決行したならば、實現さるべき眞の憂慮である。

比律賓占領軍を載せた我陸軍輸送船隊は、西海艦隊援護の下に、今しも艦艦を連らねて上陸豫定地點に到着した。

我航空母艦〇〇は、上陸地點から百海里も離れた沖合を、西に、東に、南に、北に、當てもなく全速力で走つて居る。千疊敷の其の廣い飛行甲板には、僅かに十機ばかりの飛行機が殘つて居るだけで、他の飛行機は陸軍の上陸援護のため、母艦を離れて遠く上陸地點に到り、敵の空軍と將に激戰中である。

折から深綠にすみ切つた大空に、ふわりと浮べる白雲の幕に描き出された點々たる黑影、飛鳥か、飛行機か、敵か、味方か、見分けもつかぬ其の間に、母艦を目がけて隕石の如く降り來る數機の飛行機、印は青地に白の星。

敵機來襲！

事は急である。母艦の甲板からは直に邀擊の機が放たれた。爆々の機音、戛々の銃聲、忽ち壯烈なる空中戰が展開された。

衝突して落ちるもの、燃えながら落ちるもの。戰鬪は深刻である。





敵戰鬪機の後に續きたる一臺の爆擊機、一千米の上空より一千キロの爆彈諸共、猛烈なる勢ひを以て我母艦の飛行甲板に垂直に落下擊突した。忽ち起る大爆裂！。大音響！。人も、機も、瞬刻に粉碎して跡もない。

母艦は四重の甲板を打ち碎かれて機關を破壞され、運轉自由を失したが辛ふじて沈沒を免れた。之がため同艦は少くも一年間は戰線につくことは出來ない。

斯んな事が事實であつたら、どうする？

然る時日本は、米國からの折角の進物たる比律賓を、遂に受取ることが出來ないのであらうか。

元來比律賓の防備は薄弱である。米國主力艦隊が日本攻擊のために、布哇からわざ〳〵此地へ進出するなどは、司令長官が發狂せざる限り起り得べき問題ではない。

だから比律賓其ものは、日米戰爭の場合、日本にとりて何等の脅威を與ふるものでないのである。

然らば日本は何故に、或は多數の軍隊を犧牲に供し、或は貴重なる航空母艦を危地に陷

れて迄も、比律賓を占領せねばならぬのか？

それは安いバナナを國民に喰はす爲めでもない。マニラ煙草を廉く吸はす爲めでもない。マニラ麻を輸入して國民を縛り上げる爲めでは尙更ない。

目的は比律賓を根據とせる米國亞細亞艦隊を、撃滅若しくば驅逐せんが爲めである。恰度日露戰爭の時、旅順口に巣喰ふた露國艦隊を撃滅するため、乃木大將の率ゐた我第三軍が旅順要塞攻略のために、惡戰苦鬪したのと同一の事情である。

米國亞細亞艦隊が劣弱であると云ふのは、日本の主力艦隊に對しての比較であつて、通商破壞艦隊として無武裝又は武裝輕微の商船に對しては、殺活檎縱の絶對權を握れる暴君である。

歐洲大戰の際、膠州灣を脫出したる獨逸巡洋艦エムデンの跳梁の爲めに、印度洋に於ける聯合國の通商が如何に防害破壞せられたかは、エムデンの勇行と共に今尙世界の記憶に新なる所である。彼れエムデンは排水量僅かに四千噸の眇たる小巡洋艦の身を以て、ベンガル灣から亞剌比亞海にかけ、印度洋上を横行濶歩し、東に來たかと思へば西に去り、北に現はれ





たかと思へば南に隱れ、變幻出沒海魔の如く、聯合國側の商船を襲つては石炭糧食を補充しつゝ洋上に活躍すること約一百日、其の間唯の一回も港に錨を投することなく、大膽不敵の活動に、聯合國商船二十艘、露國軍艦及び佛國驅逐艦各一隻を撃沈し、日英佛露の聯合捜索艦隊をして奔命に疲れしめたのである。

一隻のエムデンにして尙然りである。米國亞細亞艦隊劣勢なりとは云へ、尙現代軍艦の花形たる一萬噸巡洋艦一隻を中心とし、舊式とは云へ驅逐艦、潜水艦各十餘隻を有して居る。是等の軍艦が比律賓を根據として、支那海方面に暴れ廻つた場合には、臺灣以西に於ける我國の貿易は、全然破壞されて仕舞ふ譯である。

殊に中立諸國が日本に好意を有せぬ場合に於ては、米國艦隊は情報の取得に、需品の補給に、多大の便益を得て、其の活動力と破壞力とはエムデンの比ではないであらう。

されば敵の艦隊を其の根據地に追ひ込んで、旅順封鎖の樣に、我艦隊を以て海上から敵を封鎖監視してはどうかと云へば、潜水艦と飛行機とが戰場に現はれた今日では、海上封鎖などは、鼠が猫の番をすると同樣、番するものが番せられるものゝ餌食となるであらう。

だから、米國の亞細亞艦隊が全滅するか、或は又滿洲をさへ握つて居れば、臺灣以西の貿易は杜絶しても、自給自足の自信があるならば、國民の士氣を鼓舞すると云ふ事以外に、何も急いで、慌てゝ、無理を押して迄、比律賓を占領する必要はないのである。戰爭の終局に於て勝ちさへすれば、比律賓などは媾和條約の判一つで取ることも出來るし、又反對に、惡戰苦鬪多くの犧牲を拂つて一時占領しても、戰爭の終局に於て負けたなら、舌の先で取り返されるのである。

そこで殘された一つの問題は、米國がどの程度迄比律賓を防守するであらうかと云ふ點である。旅順の露西亞軍の如く、最後迄頑張るか、或は青島の獨逸軍の如く、到底守り切れぬと諦めて、適當の時に開城するか、それとも亦無益の殺生を厭ふて無抵抗に降服するか。

だが旅順の樣に海陸を完全に封鎖して、兵糧攻めにする事は絶對に出來ない。香港及びボルネオとの空中連絡は左程難事ではない。海上封鎖が行はれぬ限り海上輸送も容易である。されば若し米國守備隊が、城を枕に討死の覺悟を以て、强烈に抵抗した場合は、日本は貴重なる航空母艦の犧牲を冒險する外に米國の此進物を頂戴する途はないのであらうか。





# 特別旅團の進發

戰局の推勢は、萬難を排しても比律賓の攻略を決行せねばならぬ時期となつた。

我が大本營に於ては或る作戰計畫の下に、決死中の決死とも云ふべき、最も勇敢なる飛行將校と、最も精銳なる三百の戰鬪機とが、臺灣の空軍根據地に集められた。

それは、偵察も、爆擊も必要はない。唯敵機を見付け次第、勇猛果敢に突擊して、力の續く限り、機の動く限り、相手擇ばず一機討の切り死をすれば好いのである。

空軍の集中と共に、〇個師團より成る比律賓攻略軍が編成された。

特別任務を有せる軍の先頭部隊たる混成旅團を搭載せる運送船二十艘は、臺灣某港に碇泊して進發の命を待つて居る。何の爲めだか、工兵の大部隊と軍夫として數千の土工が乘り込んで居る。

時は恰も支那海の暴風期である。若し上陸作業中に、比律賓名物のあの恐ろしい大風に襲はれたなら、弘安の蒙古勢の轍を踏まぬとも限らない。

敵情と天候とを見定めたる上、秘密命令の下に進發の令は下つた。

二十艘の輸送船隊は二梯團に分れ、第二線軍艦より成る西海艦隊に前後左右を警護されつゝ某地點に向つて出發した。行先地がどこであるかは、艦隊と旅團の幹部以外は何人も知らない。唯各艦船の指揮官には出發後、信號命令に依つて開封すべき封密命令が渡されて居る。

炙りつく樣な熱帶の太陽は、猛烈に輝いてぎら〳〵と甲板を燒き、船足の爲めに起る輕風が僅かに汗を拂ふばかりである。幸ひに波靜かに、船平かに、海に弱き陸兵達も船暉にも冒されず、明日に迫れる戰爭も知らぬげに、嬉々として甲板に戲れて居る。

飛行機は屢々放たれて、航路の周圍を偵察警戒して居る。

やがて信號により次の封密命令が開かれた。大本營から特別混成旅團司官に與へられた訓令である。

『特別混成旅團は西海艦隊と協力してバシー海峽〇〇〇島を急襲占領し、最大急工事を以て同島内に飛行機發着所及び燃料補給所を設置すべし。』

初めて行先地と任務とが一同に知らされた。





臺灣の最南端鷺鷥鼻と比律賓の最北端エレカノ角との距離は僅に二百五十海里で、房州野島崎と紀州潮岬との距離と略相似て居る。

その間にはバシイ、バタン、バブヤン、カミグイン、其他多數の小島嶼が、恰も伊豆七島の如く、點々として踏石の樣に連つて居る。

〇〇〇島は其の中の一島である。

此處は我が臺灣空軍の往復行動圏内に屬し、我が上陸軍を充分に掩護することが出來るのである。

輸送船隊は命ぜられたる島に向つて針路を定めた。

赫灼として海水を燒く烈熱の太陽！　あの二百十日の大風も、あの日本南岸を洗ふ黑潮も實に此の熱の爲めに起るのである。その太陽が漸く猛威を收めて、朱色にぼやけつゝ西の海に沈むと、東の空には十日あまりの月が、早三竿の高さに昇つて居る。

輸送船隊は舷外に漏れる全燈火を隱蔽し、夜間の警戒を一層嚴にしつゝ、一路南方に航進した。空には半月皎々として海に銀漿を漂はす間に、前艦後船、墨繪の樣な黑影が、夜の海

氣にかすんで夢の樣に浮んで居る。

運送船〇〇丸の暗い甲板では市公、三公、七公、八公や、博士と仇名のある大學出の大公など四五人の若い人夫が中年の組頭の寅吉を圍んで、月の光の下に麥酒を飲みながら雜談に耽つて居る。

市『親方ア、一體俺等は何處へ捨てられに行くんだい？』

寅『何處つて極つてらア、フリツピンさ。』

市『俺は、また支那か滿洲かと思つて志願したのだが、道理でチト日給が良すぎると思つたら。』

三『俺や最初からさうと知つたら來るんぢやなかつたんだが、親方は初めから知つてつたんだろ、人が惡いね。』

寅『俺だつて知るけへ。此處まで來てジタバタしたつて仕樣があるけへ。』

七『フルツピンで俺達や何んな仕事をやるんだろ！。』

寅『まさかメリケンの射擊の的にもすまいから安心しろ。』





八『でも、少しや彈丸が飛んで來るんだろね。』

寅『彈丸の來ない樣なとこうで、手前達に高い日給を出す奴があるけへ。』

市『いやだなア、少しぐらゐ日給が良くつたつて、死んぢまつちや、つまんないからなア。』

寅『氣の利いた彈丸は手前等にや中らしないさ。』

三『氣の利かない奴は尙ほ厭やだね。片腕の廢人夫なんか。當節はやらないぜ。』

七『全く樣だ。一體チヤンとメリケンと、どちらが强いんだろ？。』

八『似た樣なもんだろよ。でもメリケンの奴は感心に飛行機を持つてやがると言ふからね。』

寅『あいつで頭の上から機關銃の小便をひつかけられちや、たまんない。』

市『軍人は鐵の兜を被つてるから大丈夫だらうが、こちと等の樣に三年越しの藁帽ぢや、やり切れねいな。』

三『俺も徵兵を籤で免れた時には、『占めた』とよろこんだが、人夫で斯んな所へ來るやうなら、兵隊に行つてた方が、よつ程優しだつた。』

大『ハハ……御前もさうか、俺もさうだよ。だから世の中は塞翁が馬と言ふんだ。』

八『オイ博士公！　そのサイゴーの馬とか、熊とか言ふのは、一てへそら何のこつたい？。』

大『それはね、昔支那の塞といふ國に一人の爺さんが居たと思へ。或日飼つてる馬が逃げちやつたので、爺さん頗る悲觀したと思へ。すると四五日して、其の馬が非常に良い馬を連れて歸つたんで、今度は爺さん大いによろこんだと思へ。』

八『すれつ枯しの女郎見たいに、馬鹿に思はしやがるんだなア。』

大『まあ默つて聞け。するとぢや、或日一人息子が其の馬から落つこちて、腕を折つて片輪となつたのぢや。爺さん、もうすつかり悲觀して仕舞つてると、其うち戰爭が始まつて、村の若い男は皆な兵隊に引つ張り出されて死んで仕舞つたのに、爺さんの息子だけは片輪だつた爲め徵兵を免れたので、爺さん又々大いによろこんだといふ話なんだ。人間棺を蓋ふて運定まるで、何が仕合せになるかわからないさ。』

八『すると、こちと等もまだ悲觀するにも及ばないかね。スベタのお嬶めが逃げて、別嬪の女でも連れて歸るとね。ヒヒヒ。』

七『それぢやサイゴーの馬ぢやなうて、八公のかゝあだぜ、アツハツハ。一てへ大學まで出





たといふ物知りの博士公などが、何だつて土方風情の我々仲間にまぎれ込んで來たんだいまさか此頃流行の赤いお尋ね者ぢやあるめへの、アツハツハ。』

大『かも知らないさ。神樣から見たら、大臣だつて、大將だつて、お尋ね者でない奴は一人だつてあるまいよ。今の樣にお尋ね者の多い世の中で、俺等の樣な馬鹿正直な貧乏者が學問で飯を食はうなぞと思つたのが抑もの間違ひさ。飯が食へなけりや、土方でもやる外仕方がないぢやないか。』

七『ぢやア何だつて斯んな危いところを志願したんだい？。』

大『さうさね、まア世の中が厭になつたから、どこか面白い所で死にたくなつたからだ、心中するには相手はなしさ。ハ、ハ、ハ。』

三『あんなことを言つてらア、實はこうなんだらう。そのサイゴーの馬とかに乘つて、フルツペンの大金持の後家さんにでも惚れられて、お婿さんにならうてんだらう。アハハ…。』

市『さうだ〳〵。フリツピンの女なら。日本人に澁をしたぐらゐの黑さだから、金さへありや我慢するさ。いつかフリツピンの選手が日本へ來た時に、日本の女學生が大騷ぎをやつ

たぢやないか。』

七『そりやお前、あちらにはイモリの黒燒以上の藥があつて、そいつをかけられると、いかな堅い女でも海鼠になると言ふから、女學生もきつと其の手でやられたんだぜ。』

八『さう〳〵、あちらに行つてる日本の女が、一度南洋の土人にかゝると、一生離れないと言ふ話を、向ふから歸つた男に聞ひたことがある。やつぱり其れだね。一てへそんな藥があるもんかね、博士公！。』

大『そんな藥があつたら、俺は日本へ持つて歸つて、專賣特許で大儲けをやるよ。』

三『俺は金儲けよりも、自分獨りで使ふ方が好いね。』

八『慾張るない。どんな藥があつたつて、御前ぢや駄目だい。』

三『何だつて、何が駄目だい！。此の野郎、色男ぶりやがつて、面よりや腕で來い！。』

寅『なに糞馬鹿言つてるか、手前等の樣に墓が唐辛子を舐めた樣な面しやがつた奴を、いくらフリツピンの女だつて相手にするけへ。糞もとらん話ばかりせずと、ちと、あの美しい月でも見ろ！。阿呆めが、今晩が見納めだぞ。





『思ひ出る〳〵月見る毎に、明日は屍を暴らすやら』

ぢや。コラ、八！。一杯つげ！。』

夜は次第に更けて、甲板の話聲もいつしか止んだ。月は檀頭に躍つて、氷の樣な光を海一杯に投げかけ、千項の靜かな波に白銀の閃光を搖るがして居る。船首の波を切る音と、スクリューの回轉する響きとのみが、ひとり夜の寂寞を破つて居る。

折から何處ともなく、輕い尺八の音が風のまに〳〵甲板に聞へて來た。明日の戰に、日頃嗜みの笛と最後の別れの吹奏かと思へば、箱根山の月明に笙を吹ひた義光の故事も偲ばれて床しい。

憂ふるが如く、悲しむが如く、むせぶが如く、訴ふるが如く、餘音哽々として盡きんとして盡きず、波に消へ行く風情、まさに

中天明月を懸く、令嚴にして夜寂寥たり、
悲笳數聲動く、壯士慘として驕らず。

杜甫、出塞の句を思ひ出させるものがある。

# 比律賓攻略戰

輸送船隊は途上敵襲にも逢はず、翌爽昧無事目的の〇〇〇島附近に達した。

曩に艦隊と分れて先航した捜海隊から、

『上陸地點捜海終る、敵の機雷〇個を處分す。海上敵影を見ず。』

との無電報告があつた。

輸送船隊は直に速力を増し、豫定の上陸地點に向つて急行した。軍艦でも、運送船でも、一切の上陸準備が完成され、短舟は水線迄降ろされ、人は瓦斯マスクまで用意して居る。

月は西の海に落ちて、曉の明星が東の空に、青いまたゝきをして居る。風が少しく増して薄暗い海面には、小さな白波がちら〳〵と立つて居る。潜水艦の攻撃には絶好の機會である。

艦隊は上陸地點占領の陸戰隊を揚げるため、警戒を嚴にしつゝ陸岸近く進入した。

突如として先頭にある巡洋艦の艦底に、猛烈なる爆發が起つた。





大爆音！　大震動！　大噴焔！

艦は見る〳〵傾いて、遂に横倒しに沈沒した。幸ひに迅速なる僚艦の救助により、人員の損害は比較的輕微であつた。之が開戰以來我海軍最初の犠牲である。

それが潜水艦の攻撃か、機雷の爆發か、原因ははつきり判らない。

巡洋艦の爆沈は全軍に異常の衝動を與へ、各艦船は一層監視警戒を嚴にした。

今しも第〇號輸送船の甲板で、上陸準備をして居た一人の兵士が、ふと首を上げて海面を見ると、二百米ばかり先の、まだほの暗い海面にちらつく白波の間に、一升瓶を倒にした樣な黑い物が浮んで居る。波のせいか、目のせいか、上つたり、下つたり、動く樣でもあり、動かぬ樣でもある。

隣りの兵士に、

『おい、あれは何だい！。』

『どれだ？。』

『そら、此先にビール瓶見たいなものが浮いてるぢやないか、あれが機械水雷て云ふ奴ぢや

ないのか？。」

『馬鹿、あんな小さい機械水雷があつてたまるものか、ありや屹度どつかの船で捨てた罐詰の殼だよ。』

『だつて見ろよ、あれから此船に向つて白い筋が海の上に出來たぞ。』

見ると、白波の間にもそれと分る二條の白線！　其一つは本船目がけて眞直ぐに！

『こいつあいけねへ。ハ、ハ、班長どの！。』

『何だ騷々しい、あわてるない！。』

『ダ、ダ、だつて！。ア、ア、あれを！。』

言葉の終らぬ内に、恰度彼等が坐つて居つた下方船底で大爆發が起つた。

潜水艦の攻撃！。魚雷の命中！。

爆發は船の中央機關室の水線下に起つた。

商船は船體の構造が脆弱なだけ、爆發の激動は一層激しい。

上甲板にあつた人間も、器物も、大部分海中に吹き飛ばされた。爆發の直上部に居た人間





は、坐つて居た者は背骨が碎け、立つて居た者は腰骨がはづれて終つた。

甲板に生き殘つたものは、殆んど無意識に海中に飛び込んだ。或は銃を持つたまゝ、或は重い背嚢を負つたまゝ、中には試驗的に欽めて見た瓦斯マスクを着けたまゝで。

船は機關室滿水の爲め忽ち大傾斜をなし、次の瞬間にはバナナでも折つた樣に、中央から眞二つに折れて沈沒した。

中甲板以下に居つたものは、恐らく一人も脫出する暇はなかつたであらう。

他の一本の魚雷は、他の運送船の船首に中つて爆發したが、船は船首をもぎ取られたまゝで、幸ひに沈沒を免れた。

我驅逐艦は直に敵潜水艦の攻撃に向つた。

敵は忽ち潜水して、海中深く其の姿を隱してしまつた。

驅逐艦から投げる水中爆彈の爆裂が氣味惡く船體に響く。ズシン、ビリ〳〵。

斯かる混雜の間にも上陸準備は着々整へられ、海軍陸戰隊を乘せた端舟は、燃え立つばかりの旭日の軍艦旗を海の朝風に翻へしながら、陸岸に向つて勇ましく進んで居る。

だが陸上からは何の抵抗もない。

目的の島は大風に吹き曝され、黑潮に洗ひ流されて住民とてもありやなしや、山は荒れ、岸は峙ち、港らしい港とてもなく、唯海岸ところ〴〵僅かに一連の砂濱がある許りである。

上陸した陸戰隊は直に敵の望樓を占領し、日章旗は竿頭高く揭げられた。之ぞ米國々土に我軍が印したる靴跡の第一歩である。

艦隊旗艦の艦橋上では司令官と參謀とが、天氣模樣でも氣遣ふためか、頻りに空を仰ひでは何事か話して居る。

司『參謀！　大分空が明るくなつて來たが、まだ見えないかね。』

參『まだ見えません。併し三時に向ふを出たといふ通信があつたのですから、もう來るでせう。迎ひ風の爲め、ちと遲れたのかも知れませんが。』

司『陸軍が上陸してしまふまでは、艦隊に護衛の責任があるんだから、空中と水中との警戒を充分嚴重にしてね。』

參『防空配置に就けませう。』





司『それが宜しい。』

直に防空配置の命令は下され、各艦船は何れも其の配備に就いた。高射砲は準備され、銃隊は配置され、瓦斯マスクは用意された。

幾ばくもなく我偵察機から、

『戰鬪機約二十機、爆擊機約三十機、艦隊の南方約三十海里の上空を北に向つて飛びつゝあり』

との無線電報があつた。

三十海里と云へば、爆擊機でも二十分間の飛行距離である。それ迄に身方の飛行機が來なければ、艦隊も輸送船隊も、爆彈と毒瓦斯との猛攻擊を受けて、十分間で全滅である。

全軍防空警戒の令が下つた。艦載飛行機は全部放たれて、我輸送船隊の上空に濃厚なる煙幕を張つた。

艦隊司令官は援兵を待つウオターローのナポレオンの如き焦ら立たしさを以て、石像の樣に身動きもせず、旗艦の艦橋に突つ立つて居る。身方の飛行機を待つ氣持は、一刻千秋の長

き思ひに反し、敵飛行機の近づくを恐れる氣持は、千秋も一刻の感がある。

やがて、始めは岸打つ波の響きの如く、次で疾風が密林を襲ふ聲の如く、やがて千百雷が一時に轟くが如き猛音が大空に唸り渡つた。

空軍來！　敵か、味方か、空尙ほ、暗くして機影は見えない。

之ぞ正に白双夕陽に閃き人馬砂を捲いて走せ來るものは誰ぞ。獨のブリューヘルか、佛のグロウシーか。ナポレオン勝つか、ウエリントン勝つか、ウオターローの勝敗、之に依つて決するものに似て居る。

飛行機は遂に南より來た。正に敵機である。刻一刻、白み行く空に望遠鏡の力を借れば、敵は三機編隊の尖梯陣を張り、隊形整然として三千米の上空を飛んで居る。

之は爆擊機のために進路を淸むる戰鬪機であつた。

次に來るものこそ、爆彈の猛雨を降らし、毒瓦斯の濃霧を吐く爆擊機でなければならぬ。

艦隊も、輸送船隊も、極度に緊張し、全員瓦斯マスクを飲め、艦隊の高射砲は砲擊を開始した。





敵の戰鬪機は隼の如く我上空を飛過して、尙も北方に進行した。

敵戰鬪機の機影が未だ望遠鏡の視野から隱れ切らぬ內に、更に飛行機の他の一隊が南方に現はれた。

之ぞまがふ方なき敵の爆擊機である、其の數凡そ三十機、五機編隊の三角陣を作り千米の高度を保つて低く飛んで居る。

五分を待たず、我艦隊と輸送船隊とは、爆彈の驟雨の下に、艦も、人も、碎けてしまぶであらう。危機は今ぞ寸刻に逼つて居る！。

輸送船隊からは數千の銃火が煙幕の絕え間より之に向つて一齊に放たれた。

空中の機音、海上の砲聲、轟々として天地も裂くるばかり。

此時恰も約五十機の戰鬪機が、隊列美しく鴻雁の翼を張つて、北方の高空に初めて勇姿を現はした。

艦隊からも、輸送船隊からも、全軍將兵の心の底から迸り出たる歡呼の歡聲！

『萬ざーい！。』

空に唸る飛行機の音も、海に轟く大砲の聲も、爲めに聞えぬばかりであつた。

我が戰闘機は一部は直に敵の戰闘機に向ひ、殘りの大部分は、將に我輸送船隊に對して爆擊を開始せんとする。敵の爆擊機に向つて猛犬の如く飛びかゝつた。

壯烈なる空中戰は、忽ち二ケ所に於て行はれた。一は北方の上空に於て彼我戰闘機の決闘戰。一は我輸送船の上空に於て、我戰闘機と敵爆擊機との交戰である。

敵味方合して百機の飛行機より發する發動機の響きと。高射砲及び機關銃の音とは殷々として空に唸り、海に轟き、銃砲彈は雨の如く、霰の如く、海にも甲板にも落ちて來る。

敵の爆擊機は我戰闘機に追はれながら、其の若干機は我輸送船隊の上空に出で、大小數十發の爆彈を投じた。內數個は命中して、我驅逐艦及び運送船各一隻は沈沒し、運送船三艘は大損害を蒙り、尙海上に落ちた爆彈のため短舟にて上陸中の陸兵人夫數百名を死傷せしめた。

北方戰闘機の決戰は、我兩三機を殘したるのみにて兩軍共に全滅した。戰闘は實に猛烈を極め、衝突して引組んだ儘海中に墜落したものが數組もあつた。數千米の上空から燃えながら火の柱を立てゝ落ちるものもあつた。操縱士がハンドルを握つた儘戰死した爲めか、飛





行機が獨りで宙返りを繰返しながら海中に突込んだのもあつた。激しき空中の戰闘は僅に十五分間ばかりで終つた。我決死飛行機の勇敢なるは言ふ迄もなく、敵も流石に歐洲戰爭の經驗を有する丈あつて、戰闘は中々巧妙である。

此空中戰に於て彼我の飛行機は、共に多大の損害を蒙り、來襲した約五十機の敵飛行機中戰場を脫し得たものは十機を越えぬであらう。

我上陸部隊の損害も決して少くはなかつた。

猛烈なる空中戰闘の間にも上陸作業は敢行せられた。

かくて上陸部隊は軍夫を督して、直に飛行機發着所の工事に着手した。熱帶の炎天下に木の根を掘り、岩石を穿つ土工作業は、容易の勞苦ではない。

晝間は豪灣からの飛行機が絕えず交代して空中を警戒して呉れるが、夜になると敵の飛行機が來て照明彈と共に爆彈を投じ、恰度賽の河原で子供が積み上げた石の塔を、赤鬼が鐵棒で叩き崩すと同樣に、折角作り上げた工事を、片つ端から破壞して行く。時には晝間優勢なる敵飛行機の襲擊を受けて、我飛行機が苦戰に陷つた事もある。之が爲め爆彈に打たれて死

傷するものも少くない。それよりも病氣で倒れるものゝ方が尙多かつた。熱帶地方の戰爭で、最も恐ろしき敵は、彈丸よりも熱病と痢疫とである。英國の南亞戰爭、佛國のチニス征伐、日本の臺灣征討など、何れも戰死者よりも病死者の方が數が多かつた。まして敵が黴菌彈を投下したる形跡あるに於ておやである。給養不良の軍夫の如きは、三分の一は病氣で倒れるの慘狀を呈した。

如何に國際會議で、毒瓦斯や黴菌彈の使用を禁止したとて、實戰の場合、之を守る樣な馬鹿正直な國は今の世界には有るまい。毒瓦斯使用は歐洲戰爭前。國際的に禁止されて居たにも拘らず、聯合、同盟、兩軍共に公々然と使用して居た。

敵襲と、苦熱と、惡疫と苦鬪しながら、我上陸軍は晝夜兼業、不眠不休の急作業で、上陸後一週間にして工事を完成した。これさへ出來れば臺灣を發した飛行機は、此處で燃料を補給した上、ゆふ〳〵敵地攻擊を行ふことが出來るのである。つまり陸上飛行機に對する母艦の作用をなすものである。

比律賓の占領は、最早や犧牲と時間との問題である。





比律賓の根據地を追出されたる米國亞細亞艦隊の中、本國歸還の遠航に堪えがたきものはさん〳〵支那海で暴れた上、香港、新嘉坡、其の他中立國の港で、武裝解除抑留となるであらう。爾餘の軍艦は濠洲の北或は南の適宜の航路をとつて、布哇又は桑港の本國艦隊に合するであらう。青島を脫出した獨逸東洋艦隊の如く、フオークランドの海戰が彼等の前路を扼さぬことは、米國艦隊にとりて幸運である。

歐洲戰爭開始と同時に、司令官フオン・スピー少將引率の下に、膠州灣を脫出して本國歸還の途に上りたる獨逸東洋艦隊、裝甲巡洋艦シヤンオルスト、グナイゼナウ及び輕巡洋艦數隻は南太平洋を橫斷し、南米コロネル沖に於て、クラドツク少將の率ゐる英國太平洋艦隊と會戰して之を擊滅し、風濤險なる南米南端を廻つて大西洋に乘り入つた。

クラドツク艦隊の全滅に憤激したる英國は、獨逸艦隊邀擊の爲め、直に優勢なる艦隊を南米に急派し、フオークランド島に於て獨逸艦隊に遭遇した。物的勢力に於て遙るかに英國艦隊に及ばざる獨逸艦隊は、將卒の勇戰奮鬪に拘らず、司令官以下、人も、艦も、悉くフオークランド島沖の水屑と消へ、世界の海戰史上悲壯の一頁を加へたのである。

# 太平洋作戰と布哇

日米戰爭の場合、比律賓攻略戰は局部作戰に過ぎず、戰爭の本舞臺は太平洋である。

歐洲戰爭以前の戰爭は、敵の常備兵力即ち平時から養成せられたる軍隊を擊滅又は屈服せしめることに依つて勝利が得られたのである。言ひ換へれば、戰爭する爲めに國民中から選出された、軍人と云ふ戰爭選手の勝敗によつて、其の國の勝敗がきまつたのである。軍隊が破れたなら、殘りの國民が如何に多く、如何に强く、如何に富んで居ても、其の國は戰爭に敗けたものとして、兜を脫ひだのである。

然るに歐洲戰爭の實驗に依れば、今後の戰爭は單に常備兵力即ち軍隊のみの戰爭でなく、國民全體或は國其のものゝ戰爭となり、從つて勝利を得る爲めには、敵の全國民を屈服せしめねばならなくなつたのである。

其の理由には種々ありとは云へ、一は現代機械工業の發達に依り、兵器彈藥の製造供給が自由となり、人間力の許す限り兵數を增加し得る爲めである。併しながら、軍艦を以て基本





兵力とせる海軍は、陸軍と稍趣きを異にして居る。如何に造船力の發達せる國に於ても、軍艦の製造には最短限に於て、主力艦なれば二年、巡洋艦なれば一年半、驅逐艦でも一年の日子を要する。

だから海軍に關する限りに於ては、大體に於て平時の兵力が戰時の兵力である。一度海軍力が滅亡すれば、之が回復は短日月では出來ない。日本や米國の如く、海に依つて國民生活を支配さるゝ國が、戰時海軍力を喪失すれば、結局に於て敗北を免れない。

日露戰爭の際、露軍は奉天戰に大敗したるも、毫も屈服の色なきのみならず、益々後方に兵力を集中して、戰勢の回復を期したるに反し、日本海海戰に於ける其の艦隊の全滅は、彼をして戰勝の望みを絕たしめ、遂に敗戰を自覺して和を媾するに至らしめたのである。獨逸が屈服の最後迄も、其艦隊を愛惜したのは、海軍の全滅が全戰局の破滅であることを恐れたが爲めであつた。

米國のマハン海軍大佐は其の名著『海上權力史』に於て、現存艦隊の威力につき、艦隊は單に軍港內に存在すること丈によつて、戰時に於ては大なる威力を發揮することを得るもの

であると說いて居る。

太平洋を本舞臺とする日米戰爭は、當然海軍の戰爭である。敵の海軍を擊滅して、太平洋の制海權を握りたるものが、終局の勝者となるのである。日米戰爭に於ける我陸軍の用途はカリフオルニヤ占領などと云ふ、桃太郎の鬼が島征伐の夢の樣な作戰は別として、比律賓、ガム、布哇などの占領を行ふ場合がありとすれば、多少舞臺に上ることもあるであらうが、それにしても何處迄も海軍作戰の結果に支配されるワキ役者に過ぎないのである。要するに日米戰爭は、太平洋に於ける彼我艦隊の海上權爭奪の一語に盡きるのである。

然らば如何なる方法と形式とに於て、此の海上權の爭奪が行はれるであらうか。米國の艦隊が日本へ攻めて來る場合もあるかも知れない。日本の艦隊が米國へ攻めて行く場合もないとも限られない。又兩國の艦隊が太平洋上に遭遇戰を行ふ事もあるであらう。そこには機に臨み、變に應ずる、種々の戰略もあれば計策もある。時間を計つて勝負を決する相撲や拳鬪の樣に簡單には行かない。殊に太平洋の略眞ん中には、布哇と云ふ兵略上の要地があつて、作戰をして一層複雜ならしめて居る。





布哇！。布哇！。布哇！。

布哇の名は明治の初め以來、日本人の口に膾炙して居る。

明治十二年布哇國王カメハメハ何世かゞ、支那訪問の途次、我國に立ち寄りたる際、深夜明治天皇に內謁を申出で、布哇の國嗣として某親王の御渡布を願ひ出でたるなどの昔話も殘つて居る。それ程日本と布哇とは緊密なる關係を持つて居るのである。

殊に最近日米の關係が喧ましくなつて以來、比律賓と布哇の名は、特別の意味を以て日本人の頭を刺戟して居る。

其の布哇とは一體如何なる處であらう？。

橫濱の東南東三千四百海里、桑港の南西二千百海里に當り、概位北緯二十度、西經百六十度を中心として、北太平洋の洋心に浮べる一群島こそ、これぞ布哇である。群島はハワイ、マウイ、オワーフ、カウアイ、モロカイ、ラナイ、ニイハウ、カフラウエの八大島と十餘の無人島より成り、其の全面積六千七百萬方哩にして、略我四國の大きさに匹敵して居る、布哇本島には我富士山を拔くこと一千五百尺なる一萬三千五百尺以上の高山が三つも聳え、其

の一は今尚ほ噴煙して太平洋上の一偉觀を呈して居る。

布哇が始めて世界に知られたるは、一七七六年英國の有名なる海洋探檢家キヤプテン・クックの發見によるもので、時の英國海軍卿の名に因み、之をサンドウイチ諸島と命名した。降つて第十八世紀の末、太平洋のナポレオンと呼ばれたる土人の英雄カメハメハ一世が、布哇島より起つて八島を征服し、茲に布哇王國を建設してカメハメハ朝を建てたのである。

布哇は熱帶圏内に在るとは云へ、大洋を渡る涼風は晝夜連吹して綠陰苦熱を感ぜず、草花四時香り、バナナ自然に實り、地味肥えて住民は溫和、實に太平洋上の樂園である。されば歐米人の來り住む者年と共に多く、政治經濟の實權漸く彼等の手に歸するに至つた。愛國者を以て任ずる保守派の土人等大いに之を憤慨し、女王リリオカラニを擁して尊王攘夷を企て遂に在住外人と衝突し、一八九四年議會は國王を廢して共和國を宣言し、次で一八九八年米國と合併するに至つたのである。

日本人が勞働移民として始めて此島に來たのは、布哇國王の訪日後結ばれたる日布條約によるもので、明治十二年二千人の甘蔗畑の勞働者が入國したのを嚆矢として居る。給料はよ





し、生活は樂だし、住民は溫和だし、甘いバナナやパインアツプルは食い放題と云ふので、熱い位はものかはと、出稼ぎ邦人は年と共に增加して、遂に先來の支那勞働者を驅逐し、一九〇〇年(明治三十三年)米布合併當時には、全人口十五萬中の六萬を占め、昭和五年には十三萬人に增加し、全人口の約半數を占めて居る。

そこには日本語よりも米國語をヨリ流暢に話す、多數の移民第二世がある。『日本恐るべし』のデヴイス大佐は、一九四〇年(昭和十五年)には布哇の全選擧有權者六萬六千の内、日本人の有權者三萬一千に達するとて、此處でも大いに日本を恐れて居る。此移民第二世が日本に與みするや、米國に與みするやは、日本と、米國と、何れがヨリ善き國であるかに依つて決するであらう。

斯くてカナカ美人の臀振踊りに、永久の太平を夢みたる太平洋の樂園も、今や日米の風雲一度裂くれば、鐵丸の驟雨降る修羅の巷と化せんとして居る。

首都ホノルルは群島の中央に位する、オワーフ島の南岸にあり、其の西方十餘哩に眞珠灣がある。天成の良灣に加ふるに人工の堅砦を以てし、比律賓の防備制限以來、太平洋上に於

ける米國唯一の一等軍港として、全艦隊を收容するに足るべき水陸の施設完備し、實に難攻不落の稱がある。

布哇は太平洋作戰に於ける日米兩海軍の主策源地たる、横須賀と桑港との本航路の南方約六百海里に位置し、此處より横須賀と桑港とに至る距離は約三と一・八との割合である。

布哇あるが爲めに、米國は之に據つて、日本を攻めることが出來るのである。日本は之を奪ふて米國を擊つことが出來るのである。若し太平洋上に布哇と云ふ島がなかつたならば、五千海里を隔つる日本と米國との間には、現今の科學文明を以てしては、事實に於て戰爭をなし得ないのである。

戰爭の懸念のなきところ、國際の不安もなく、猜疑もなく、從つて國交の疎隔も來さず、國民の反感も起らず、太平洋は其の名の如く太平であり得るのである。

然るに太平洋の眞ん中に、無くてもがなの布哇と云ふ島がある許りに、太平洋戰爭をして可能ならしめ、軍國主義者に戰爭宣傳の好辭を與へ、日米兩國民の神經をして彌が上に尖鋭化せしめて居る。





日米戰爭は布哇あるが爲め可能である。即ち布哇は日米戰爭開否を支配する鍵鑰である。而して之を握るものが好く戰爭をリードし得るのである。

米國が之を握れる間、日本は米本國に對して積極的本攻勢を取り得ない。日本が之を握れば、米國は其の太平洋岸を防ぎ得ない。

即ち日本が布哇を攻略し得たと云ふことは、米國の艦隊を擊滅したと云ふことであり、太平洋の制海權を掌握し得たと云ふことであり、從つて戰爭に勝ち得ると云ふことである。

反對に、日本が布哇を攻略し得ないと云ふことは、戰爭が長期に亘ることを意味し、從つて又日本が戰爭に勝ち得ないと云ふことを意味する。

それ程に布哇は軍事上の重要地點である。

布哇八島僅かに六千七百方哩。之を世界の陸地に比すれば、誠に九牛の一毛に過ぎない。布哇がなくとも、世界の人類が餓える譯ではない。布哇がなくとも、太平洋の航海が出來ぬ譯ではない。全能の神が地球を造つたとすれば、又神の意思が人類の平和であるとすれば、神は何の爲めに、日米戰爭の媒介者とも、挑發者とも言ふべき布哇を太平洋の眞ん中に造つ

たのであらう?。

萬能の神が月の娥嫦に見とれた涎の雫が布哇の島となつたのか?。

造物の主が熱帶の日に照された汗の滴が布哇の島となつたのか?。

唯不正者に對する神の師の足溜りと見ることに於てのみ、布哇存在の意義が判る。

此の戰爭!、神の師は日軍か?。米軍か?。勝つ者が夫れであらう。

だが布哇その者は問題ではない。問題は唯其の眞珠港である。

火山島たる布哇の諸島は。何れも海岸線は眞直で且壁立である。然るに唯獨りオワーフ島のみが屈曲凹凸して、眞珠の良港を抱いて居る。

或歷史家は、クレオパトラの鼻が何分とか低かつたなら、世界の歷史は今と違つて居るであらうと言つたが、オアーフ島の海岸線が十哩短かつたなら、太平洋に戰雲は棚引かなかつたであらう。

嗚呼、布哇!。

布哇こそは、今の世界に於ける奇しき存在である。





# 此の布哇を奈せん

布哇は日米戰爭の勝敗を支配する天王山であり、ウオターローであり、ヴエルダンである。

布哇の爭奪は太平洋作戰の眼目である。

そして米國が布哇を領有すると云ふことは、戰はずして米國に七分の利がある。

布哇の產物の主なるものは、米と砂糖とパインアツプル位のものである。到底大艦隊の給養を充たすことは出來ない。

だから米國艦隊にせよ、日本艦隊にせよ、之に據るものは、一切の軍需品を其の本國からの供給に仰がねばならないのである。

元より米國に於ては、平時からの貯藏品があるとは云へ。日々の消耗は常に之を補充する必要がある。まして日本軍が之を占領したる場合、米國軍は凡ての軍需品を燒棄し、日本は新に之を輸送せねばならぬであらう。

布哇から米國の策源地たる桑港までは二千一百海里、日本の策源地たる横須賀迄は三千四

百海里である。二千海里と云へば、日本に於ては、北樺太の國境から南臺灣の澎湖島に至る距離である。途中唯一の避難地もなき此長距離海面の軍事輸送は、敵の襲擊に對し極めて危險なるもので、常に有力なる艦隊護衛の下に、船團輸送を行ふの他はない。

布哇の後方輸送の攪亂防碍は、日本海軍として必らず行ふべき重要なる作戰の一つであると同時に、米國海軍にとりては大なる苦痛である。

布哇、桑港間の輸送ですら。尙危險で且つ困難である。まして日本が布哇を占領したる場合、布哇、横須賀間三千四百海里の後方輸送は敵の海軍に奇襲部隊の存する限り、尙一層危險で且つ困難である。併し日本が南洋諸島の委任統治權を有する限り、此れ等の諸島を飛石傳ひに行けば、比較的安全である代りに、距離に於て一倍半の損をせねばならない。

即ち布哇は米國が之に占據すれば、後方輸送は比較的容易であるけれども、日本への進擊は困難である。之に反し、日本が之を占領すれば、米國への進擊は比較的容易であるけれども、後方輸送は困難である。

兩者一利一害、一長一短、其處に作戰の苦心と妙味とがある。





太平洋作戰に於て布哇の重要性は今述べた通りである。

比律賓、ガムの喪失は米國にとりては國民の士氣問題以外、本國の國防上何等の痛痒を感ずるものではない。

然しながら布哇の喪失は、直接端的に本國の運命に影響する。布哇一度守りを失へば、米國太平洋岸は日の丸艦隊の砲擊下に暴露せられるのである。

米國は死力を盡して最後迄、布哇を頑守するであらうことは疑ひを容れない。

そこには無限の補充源を有せる有力なる空軍がある。周圍數百海里の海面を偵察して、近づく敵を監視警戒して居る。

そこには一萬海里の航洋力を有する潛水艦隊がある。空陸と通信の連絡を保ちつゝ、晝夜海上を游弋警戒して居る。

そこには新式築城法に依る堅固なる要塞が、軍港の周圍を取り圍んで、大小數百の大砲が寄らば擊たんと砲門を開いて待つて居る。

この二段三段の嚴重なる防備の中に、戰備を完成した米國聯合艦隊の主力が、至急出港の

用意を整へ、港内狹しと舳艫を連らねて碇泊して居る。

米國の五に對して、三の劣勢比率を有する日本の艦隊が、三千四百海里の遠距離から正々堂々、眞つ正面より之を攻擊することは、自ら死地に投ずる狂氣の沙汰である。

布哇在住十餘萬の日本人の奮起による布哇占領の如きは、子供を喜ばす映畫以外の何物でもない。武器を持たぬ十萬の衆は、機關銃を揃へた百人の兵に敵することは出來ない。殊に戰爭開始の後まで、布哇の日本人を布哇に殘し置く程に、米國の軍部は寛大でも、愚鈍でもあるまい。歐洲戰爭の際英國は香港、新嘉坡、印度等に於ける在住獨逸人を全部濠洲に移送抑留した。

英國の海軍評論家として有名なるバイ・ウオーター氏は、其の著『太平洋大戰爭』に於て

『五月に入る匆々、突如としして驚くべき飛報は、ハワイに於ける叛亂を傳へた。それが地方的に突發した事件か、或は東京からの敎唆に依るものかに就ては何れとも決し難かつたが、何等かの手段で多量の小銃が此の島に密輸入され、オアフの中央部に運ばれて、更にそれから漸次に、當時人口三十三萬の內約十四萬を占める多數日本人間に分配されたと





言ふ事だけは疑ひがなかつた。

今俄然として發展し來つた此の事件は戰前に於てすら當局の頭痛の種であつたので、早くから種々の對策が論議されて居た。或者は開戰となつたら日本人全部を一纏めにして米本國に移すべしと主張し、この果斷な政策に含まれる輸送と設値の困難などは顧慮しなかつた。又他の勸告はニイフア島に集合キヤンプを作れと云ふのであつた。こんな狹い場所にこれ程の大衆を宿泊せしめ且つ養つて行くことが出來るかと云ふ問題などは、全然考慮の外にあつたのである。が、結局地方官の意見が勢力を占めて日本人は安穩に其の職業に留まる事を許されたのである。』（北上亮二氏譯『太平洋の爭覇戰』より）

と、布哇在住日本人の米本國移送を非常に困難で無謀の見であるかの如く言つて居る。併しそれは左程困難なことでも無謀の意見でも決してない。在住日本人と言つても武器を執り得る男子だけを移送すれば宜いので、其の數は精々五萬か六萬である。其の位の人間を輸送するのは、布哇から米國へ歸る運送船の空船にバラスト代りとして積めば、何でもない事である。又收容の設備にしても、歐洲戰爭の時十萬、二十萬の俘虜が一時に出來て、之を收容

したことを考へれば、是れ又造作のない事である。寧ろ夫れよりも、氏の構想するオアーフ島へ多量の小銃を密輸入することの方が數倍困難な事であるであらう。

外より攻むる能はず、内より奪ふ可からずとせば、布哇に對して日本の海軍は。遂に手を下すの道がないのであらうか。布哇が敵手にある限り、日本は兵力を以て米國を屈せしむることは出來ないのである。

米國人の書いた日米戰爭本には、布哇は容易に日本人に占領せられると書いて、米國人に戒告を與へて居るのが多い。日本人の書いた日米戰爭本にも、日本は苦もなく布哇を占領すると書いて、日本人を喜ばして居るのが多い。布哇は軍事の常識眼より見て、米國人の恐れる程、日本人が安心する程、そんなに容易に取られるものでも、取れるものでもあるまい。

米國恐るゝに足らずと聞かされて、喜んで居る日本人が強いのか、日本恐るべしと聞かされて、心配して居る米國人が弱いのか。布哇が取られると思ふ米國人は意氣地なしか、布哇は取れると信ずる日本人は自惚か。今審判の時が來た。

布哇の攻略！。布哇の占領！。





それは必ずしも不可能ではあるまい。けれども非常に困難であることは事實である。

それには種々の準備作戰或は補助作戰を要する。併も個人の犧牲的勇氣に待つものが少くないであらう。

飛行機、潜水艦等の決死的奇襲に依つて。敵の海軍勢力を漸減することも作戰の一つである。

敵の後方輸送を脅かして、敵艦隊の出動を促し、機に乘じて之を奇襲することも作戰の一つである。

屢々敵の太平洋沿岸を襲撃し、敵國民の士氣を焦立たしむることに依つて。敵艦隊の決戰を逸らしむることも作戰の一つである。

若し夫れ、敵が勝を逸り、艦隊の主力を提げて、日本に對し本攻撃を取り來るが如きことあらば、是れ日本にとりてもつけの幸ひで、米國軍艦の生きて布哇に還る者幾隻あるかゞ問題であらう。

米國海軍の考案になれるリング・ホーメーション＝之を譯して輪形陣と云ふ＝なる陣形が

ある。米國海軍多年の理論研究と、長日月の實地演習との結果より、編み出されたる遠洋渡航陣形であつて、米國海軍が難攻不敗と誇稱して居る所のものである。

此陣形の編成大要は、先づ陣の中心に戰鬪の根幹たる主力艦を置き、補給艦隊を其の附近に配し、中心より二十海里及び二十五海里の半徑を以て第一圈及び第二圈を畫き、第一圈上には輕巡洋艦を、第二圈上には驅逐艦を、夫々適宜に配置して內方の警備に任じ、更に第二圈の外方視認距離に於て一圈を畫き、之に潛水艦を配備し、內外三段の警戒網を張つて、主力艦隊の警衛に當らしめ、尙此輪形陣の前方五百海里の距離に於て、更に外方警戒線を「形に張り、之に八吋砲巡洋艦を配置すると云ふ極めて複雜な陣形である。

思ふに之は海軍大學校の生徒が、コンパスと定規とを以て圖上に畫いた陣形であつて、斯かる繁累複雜な陣形が、實戰に於て其の隊形を整然と保持することが出來るや否やは大なる疑問である。

陣形の混亂、隊形の不整は、敵襲に對する最惡の弱點である。勇敢決死の我一隊の水雷戰隊は、暗夜に乘じて敵陣の中心を襲ふことは、左程難事でないであらう。





米國艦隊司令長官が餘程の向ふ見ずでない限り、日本の艦隊が著しく減勢せられざる間は、三千五百海里の遠距離を難航して、貴重の艦隊を鰐の淵に冒險せぬであらう。

日本の艦隊も攻めて行けず、米國の艦隊も攻めて來られずとせば、布哇爭奪戰は結局何うなる?。

此の問題が太平洋作戰の總てゝあり、日米戰爭の九十九%でもある。さう簡單に解決が出來ては、日米戰爭の威嚴(?)に關する。

然るに日本駐在武官の米國エリオット陸軍少佐の著『ゼ・タイド・オフ・バットル』に依れば、日本軍の布哇占領は極めて手輕に行はれて居る。同書に依れば、

先づ日本の飛行機が布哇へ飛んで來て、オアフ島の米軍兵營や眞珠港を爆擊する。日本の軍艦に護衛された陸軍運送船がオアフ島の西北岸に來り陸兵を上陸せしめる。日本軍を乘せた他の運送船が島の南西岸に迫り、此處にも陸兵を上陸せしめる。日本の移民が蜂起する。米軍は遂に眞珠港を放棄して退却する

と言ふのである。米國の艦隊も、空軍も、晝寢でもして居たと見へる。